

ドイツ思想詩の黎明 その三

—— ハラー『アルペン山脈』(一七二九年) ——

高 橋 克 己

(人文学部独文研究室)

内容梗概

ドイツ思想の黎明 —— ハラー『スイス詩歌の試み』 ——

〔一〕序 言 〔第36巻〕 二(44)頁—四(46)頁

〔二〕『朝の思』 (一七二五年)

(1)~(9) 〔第38巻その二〕 五(215)頁—五(225)頁

〔三〕『アルペン山脈』 (一七二九年)

要旨 〔第40巻〕 一六(2)頁

(1) 〔栄光の記念碑〕 一六(2)頁—一七(3)頁

(2) 〔新たな詩作〕 一七(3)頁—一八(4)頁

(3) 〔内なる人間〕 一九(5)頁—二〇(6)頁

(4) 〔自然の宝庫〕 二〇(6)頁—二一(7)頁

(5) 〔黄金時代〕 二一(7)頁—二二(8)頁

(6) 〔幸福な乏しさ〕 二二(8)頁—二四(10)頁

(7) 〔楽園フランス〕 二四(10)頁—二五(11)頁

(8) 〔苦吟する詩人〕 二五(11)頁—二六(12)頁

(9) 〔各十行の詩節〕 二六(12)頁—二七(13)頁

(10) 〔内的完全性の発展〕 二七(13)頁—三〇(16)頁

和文註解 一七 頁—一七(27)頁

欧文註解 (Quellenachweis) 二八 頁—二八(52)頁

Zusammenfassung/ Sommaire/ Abstract 五三 頁—五三(55)頁

Inhalt/ Table des matières/ Contents 五三 頁—五三(55)頁

〔四〕『理性、迷信、不信仰についての考え』 (一七二九年)

〔五〕『悪の根源について』 (一七三四年)

〔六〕『永遠についての未完詩』 (一七三六年)

〔七〕結 語

※既刊部は註解および要旨ともに高知大学学術研究報告の人文科学篇にて、その第三六巻(一一)四三頁—五四頁、および第三八巻その二(一一)二一五頁—二五四頁において公刊されている。

## ハラール『アルペン山脈』 (一七二九年)

要旨 (約八〇〇字)

通常『アルペン山脈』は自然詩とか描写詩、あるいは眺望詩として享受され易い。すると詩想の内実において教訓詩から思想詩へと深まりゆく省察の歌声が見過され勝ちにならざるを得ない。例えば「ラオコオン」でレッシンクは、当詩歌における「内なる完全性の発展」を、せいぜい観察と分析の記述ぐらゐにしか考えず、当詩歌に内包された思念の脈動に十分留意しなかった。確かに「風景描写」も「詩的絵画」もある。但しハラールの場合それら自体が「物そのものの姿」を映して自己完結することはない。故にむしろ或る心の「内なる完全性の発展」こそが「アルペン山脈」の詩想に求められ、この軌跡を歩む西欧意識の流れが辿られねばならない。このためには表層に現れた具体的な詩歌象徴を鑑賞し味読するだけでは事足りず、敢てその深層にて魂が探し索めている理念を讀者も共に追求することが要請される。然らば「ラオコオン」に關しゲーテが述べたことは正に「アルペン山脈」にもあてはまり、「この作品は私達を貧相な直観の領域から、思想の自由な広野へと魅了し拉致去る」と言えるのである。

詩想の核は、「黄金時代」に宿る「幸福な乏しさ」(Glückseliger Verlust)を、霊峰の山岳ならではの「自然の宝庫」に見出す点と考えられる。これは蓋し金銀水品など以上に高山植物を指すと読み取れ、慎ましく「岩肌にさえ花咲き」と歌われる所に象徴されている。そして可憐な草木にも紛う山岳の牧人生活をハラールは理想化し、正に「貧しさを幸いとす」と言える点に「人倫の価値」を置く。なぜなら此所には「悪徳の源泉たる充溢が拒まれてゐる」からである。ところで実はハラールこそ啓蒙期の諸学芸に秀で、才能の「充溢」に満ちていた医学博士であった。かくして厳しい自己否定から「幸福な乏しさ」を目指した詩人の敬虔な情操は、いつしか「乏しき時代」に「至福なるギリシア」を待望するヘルダーリンの世界へと繋がりゆくのである。

### (1) 「栄光の記念碑」

： おお汝ハラールよ、 汝の永遠の歌声から  
 アーレ河の岸辺は我に芳香を放ち、彷彿として目映く輝き、  
 汝は天の柱、汝の謳いしアルペン山脈を  
 四四四 自らの栄光の記念碑としたのだ。：(一)

(クライスト『春』初稿 一七四九年)

十八世紀中葉に壮麗な讃歌「春」初稿(全四六〇句)の終結近い第四四二句で、まずクライストはハラールの雄篇『悪の根源について』(一七三四年)冒頭で歌われた「清らかなアーレ河」(第一三句)に想いを馳せ、次いで別の秀作『アルペン山脈(Die Alpen)』(一七二九年)を、第四四三句にて「天の柱(Pfeiler des Himmels)」更に第四四四句で「栄光の記念碑(Ehrensäulen)」と称えている。既に当時ドイツ芸術文化は、バッハの『マタイ受難曲』(一七二九年)や『フーガの技法』(一七四九年)を筆頭に、諸外国の成果に恥じない自国の古典を有していたのであるが、しかし時代の衆目が一致して十九世紀以降のようにバッハやハラールの作品群を「栄光の記念碑」と高く評価していたわけではなかった。

例えば『マタイ受難曲』の再評価が、成立後一世紀も経た一八二九年のメンデルスゾーンによる演奏を契機にしていることなど、このことの象徴的な証左となる。他方ハラールの『アルペン山脈』の方は、右記クライストの賛美に確かめられるように、十八世紀当時からして既に相当な名声を獲得していたのであるけれども(3)、別の筋では文壇の大御所ゴットシェーアの側から手厳しい批判を被っていた。

だが時代の悪しき流れは如何にして変ろうぞ！  
 唆かされた歌人の新人類が生い育ち、  
 アルペン山脈の万年雪にその胸は冷え、：  
 語義も発想も分別悟性の幽霊どもで、

それらはさ迷う、決して晴やかならざる地の中を。

そこでは梟まがいの眼しか見えず、

公然たる白昼から逃避し、闇の晦渋へと遁れる。(4)

(ゴットシェート『ノイキルヒ詩集への序文』一七四四年)

恐らく「明晰かつ判明 (clair et distinct) (5)」を第一に掲げた反スイス派かつ親仏派の啓蒙批評が、まずハラアの『アルペン山脈』に「詩歌の書き方の中で、あちこちに蔓延している如何わしく態とらしい本質 (6)」の先駆けを見たのも不思議ではない。

ところで私達はとかくレッシングの『ラオコオン』(一七六六年) 第七章とか、シラーの『素朴文学と情感文学について』(一七九五年—九六年) における厳しいハラア批判を窓として、『アルペン山脈』などの作品に触れ易い。それ故むしろ『春』でクライストが高唱した「栄光の記念碑」(註(1))としての側面が見失なわれ気味なのが現状である。確かにレッシングが『アルペン山脈』第三九節(初版の第三八節)以下に關し、「画家や詩人がわれわれに与えることのできる形象の鮮やかさや迫真性の程度」を要請し、結論として「私はその一語一語に、苦吟する詩人の声を聞くが、物そのものの姿が見えるとはとても言うことができない(7)」と難を突くにも一理あり、右のゴットシェートの啓蒙批評(註(4))もこの点を指しているように思われる。但しヴィヴァルディの『四季』から受けるような「形象の鮮やかさや迫真性」を内面性豊かなバッハの受難曲に期待したとて、また思念溢れるハラアの詩想に「物そのものの姿」をいくら要求したとて、所詮ドイツ芸術の本質が解明されるわけではなからう。

むしろ『アルペン山脈』には、シラーも認めた「理念への飛翔 (Aufschwung zu Ideen) (8)」の筋を見逃すことが出来ない。成程シラーの批判にある如く、「ハラアにおいては分別悟性が感受性に君臨している(9)」のを否めない。だがこれをゴットシェートのように「分別悟性の幽霊ども (Gespenster des Verstandes)」(註(4))と一重に否定方向にのみ片付

けるなら不十分と言わざるを得ない。なぜなら幾重にもうねる晦渋なハラアの想念は、正に「苦吟する詩人」(註(7))の「分別悟性」の弛まぬ努力の結晶でもあるからで、但し更に一層円熟し「思想そのものが詩歌象徴 (der Gedanke selbst poetisch) (10)」となるには未だ「感受性 (Empfindung)」が乏しいと言ふことである。この点ではシラーとてヘルダーリンに比べれば、「分別悟性が感受性に君臨している」との観を免れ難い。然れども「理念への飛翔」を目指すハラアやシラーの歌声が、後世には「天の柱」あるいは「栄光の記念碑」(註(1))として聳え、厳しい批判と吟味に耐えつつ新たな思想詩が誕生する母胎と成り得たことは確かなのである。

## (2) 「新たな詩作」

翻り次にはハラアが『アルペン山脈』を創作した当時の詩歌の現状を振り返ってみよう。例えば一七七二年三月ゲミンゲン宛書簡においてハラアは、自らの誕生した頃十八世紀啓蒙期の初頭を回顧して、「詩歌 (Dichtkunst) がドイツから消え失せてしまった時代」と規定し、「プロックセスとピーチュは幾篇か、前者は時折壮大な佳作を物した」との旨を認めつつも、「だが余りにもプロックセスは途方も無い流暢さ (unendliche Fertigkeit) に感(感)じて、筆先から韻文 (Reime) を捻り出した(11)」と批判を下している。

もしプロックセスの詩集『神における地上の楽しみ』(一七二二年—四八年)の諸作品を念頭に置かならば、『アルペン山脈』第二八節を締め括る第二八〇句が意味深長となる。

Die Rührung macht den Vers und nicht gezählte Töne.

感動が詩句を作り、数えられた語調ではない。(11)。

「感動 (Rührung)」とは、教訓詩や思想詩の場合、作品を貫く「情操

(Empfindung)』として表出されると考えられ、『アルペン山脈』第二節の第一三句にて「物の価値は、それより我々が受ける情操次第である (Der Dinge Wert ist das, was wir davon empfinden) (21)」と言われる例からも解かる通り、此所にプロッケスのような単なる「韻文」ならぬ、ハラーの「詩歌芸術」を成り立たしめる母胎があると思われる。

この点は他でも、例えば後年「悪の根源について」の端書きに述べられている。

詩人は世の指南役ではなく、描写して感動させ (rührt) 、そして証拠立てた (22)。

既に引いた一七七二年三月ゲミンゲン宛書簡(註(10))に語られている「途方も無い流暢さ」が、ハラーの「情操」に宿る「感動」の対極にあると考えられる。すると「流暢」ならざる所に、『アルペン山脈』の詩語の特性が確かめられて然るべきであろう。

ハラーが唯一の自作詩集『スイス詩歌の試み』(一七三二年一七七七年) 第四版(一七四八年)に附した序文には、この特性が「新たな詩作 (die neue Art zu Dichten)」と自覚されており、そこでは「尚一層短い行に、一層多くの思想をつめこみたい」との表明がある。そしてこの「新たな詩作」への機縁は、一七二七年夏七月下旬より八月末にかけての滞英期間に得られた模様である。

とかくするうちに私は英国詩人に親しむようになり、この詩人たちから思索欲 (Liebe zum Denken) と重厚な詩作の優先 (Vorzug der schweren Dichtkunst) とを受け入れていた。その偉容に私が驚嘆した哲学詩人たちは、軽い泡の如き暗喩の上を泳ぐ (der auf Metaphoren wie auf leichten Blasen schwimmt) ローエンシュタインの膨らみ浮腫んだ本質 (das geblähte und aufgedunsene Wesen dess Lohensteins) を私から押しつけ、かくして私には新たな詩作が誕生した。但しこれは不幸にも幾多の人々か

ら不興を被ってしまったけれども、私はさ程悔いることなく、尚一層短かい行に一層多くの思想 (noch viel mehr Gedanken in viel mindere Zeilen) をこめこみたこの試み (23)。

『スイス詩歌の試み』第四版の序文

親仏派ゴットシェートが此所に「如何わしく態とらしい本質 (finsternes und gezwungenes Wesen) (註(6))を見た点は既に指摘した通りで、この場合には「思索欲」が「分別悟性の幽霊ども」へと、「重厚な詩作」が「闇の晦渋へ (ins Dunkle) (註(4))と低下させられてしまったのである。

他方シラーやヘルダーリンへと伸びる教訓詩と思想詩の展開においては、むしろ「思索欲」と「重厚な詩作の優先」こそが重要となる。するとこの際ゲーテは微妙な位置を占めざるを得ない。例えば『詩と真実』第七書でゲーテは、「希薄で冗慢で空虚な時代から脱出する第一歩が、的確、精緻、簡潔 (Knappheit) によってのみ踏み出され得る (24)」と述べておいて、ハラーやクロプシュトックにおける「文体」の「凝縮 (das Gedängte/ gedrängt) (25)」を一応は肯定しつつも、結局はこの筋が「緊密へ (ins Enge)」と至るや「不可解で享受できない (26)」と告白している。恐らくヘルダーリンの讃歌『パトモス』(一八〇二年)における「緊密」かつ「凝縮」した重厚な詩作こそ、「尚一層短い行に一層多くの思想をつめこみたい」とする「新たな詩作」(註(14))の円熟した成果であろうけれども、ヴァイマルの古典主義の努力目標は詰まる所ここから外れていたと考えられる。蓋し「凝縮」で「緊密」な「文体」を、もし「簡潔 (Knappheit)」を旨として纏めてしまふならば、必ずや雄渾な讃歌や思想詩は萎縮してしまい、十九世紀ドイツ音楽の交響曲に通ずる詩歌の脈動は興隆せず、その代わりに簡にして要を得た寓話 (Fabel) とか歌曲 (Lied) が花咲くのみであったらう。

(3) 「内なる人間」

十八世紀中葉は実に様々な試みが並立しており、『アルペン山脈』の収められたハラーの『スイス詩歌の試み』(一七三二年—一七七年)もその一つであり、またこの「試み」を高く評価しようとしなかったゴットシエートの『批判的詩論の試み』(一七三〇年—一七五一年)もその一つである。結局ブライティンガーの『批判的詩論』(一七四〇年)などスイス派の筋が賞揚したハラーの詩歌を、その宿敵ライプツィヒ派の総帥であるゴットシエートが貶めたのも不思議ではない。そして度重なる両派の対立は和解へと向かいそうになかったのであるが、しかしながら新たな市民社会に適う文芸を樹立しようという努力においては両者ともに類似の方向を示していた。

例えば前に述べた「軽い泡の汝き暗喩の上を泳ぐローエンシュタインの膨らみ浮腫んだ本質」(註(14))は、孰れにしても何らかの手段で乗り越えられるべきものであった(20)。これを克服するのにハラーが試みた「重厚な詩作」は、生憎ゴットシエートを始めとして「不幸にも幾多の人々から不興を被ってしまった」(註(14))。他方ライプツィヒ派が洗練された趣味に基づき規範を示すことにより活路を見い出さんとしていたことは、ゲーテの『詩と真実』第七書も認めている所である。

私達にはゴットシエートの『批判的詩論』が与えられており、これは十分に重宝で啓蒙的なものであった。即ちこの本はあらゆる種類の詩および韻律とその様々な律動に関し、古来の文献に現われた知識を伝えていた(21)。

ところが他面この「啓蒙的 (belehrend) な「ゴットシエートの水域」に呑まれ、「ドイツ詩歌の山岳の麓なす美しく多彩な草原が容赦なく伐採され」(註(3))た点をも、ゲーテは見逃していない。

かくして私達も実際、スイス派の方が本当は卓越していると聞いており、ブライティンガーの『批判的詩論』を読み始めた。此所で私達は今や一層と開けた

広野へと推参したわけなのだが、しかし実際には一層と大きな迷宮に入ったに過ぎなかったのだ。 …… (21)

こんな調子で一進一退を繰り返しつつ、ゲーテの筆は「或る絶望に満ちた状態 (ein verzweiflungsvoller Zustand) (22)」を意識する手前で、当時「イソップ寓話」が「第一級かつ至上の種類の詩」と看做された「実に奇妙 (So wunderlich) (23)」な経緯を物語っている。

これら全ての諸要求に従い、今や様々な種類の詩が吟味されんとした。そして自然を模倣し、更に不可思議 (wunderbar) かつ同時にまた人倫の目標と公益たるべきものが、第一級かつ至上の種類の詩と看做さるべしとなり、幾多の熟慮の末ついに大いなる当の優先権は、最高度の確信を以てイソップ寓話に帰せられることになった(23)。

「実に奇妙」なこの結末から「絶望に満ちた状態」へと至る過程において、果してゲーテは何に活路を見い出そうとしているのであろうか？

『詩と真実』第七書では、この間に先程引いたスイス派ブライティンガーが、「有能で博識かつ洞察力溢れる人物 (ein tüchtiger, gelehrter, einichtsvoller Mann) (24)」と持ち上げられた後、次のように批判されている。

このスイス派を全面的に弁護するには但し、こう言えば良からう。即ちブライティンガーは誤れる観点から立論し、ほぼ既に関心圏を走破した後、漸くにして主題に突き当たり、かくして人倫習俗や諸性格や様々な情念の表現、つまり詩歌芸術がやはり確かに格別依存している内なる人間の表現 (die Darstellung … des inneren Menschen) を、著者の終結部で言わば付け足しとして勧めざるを得ないのである(25)。

竟に「内なる人間の表現」が「主題」として提示されたのであるが、ゲーテの特殊な関心は次に「ギュンター」の「機会詩 (Gelegenheitsgedichte)

〔25〕に向かつてしまふ。

これに対して以上の叙述を踏まえ、むしろ本論としては教訓詩が思想詩 (Gedankenlyrik) へと深まりゆく十八世紀ドイツ抒情詩史においてこそ「内なる人間の表現」が円熟すると主張したい。そして「自然を模倣し、更に不可思議かつ同時にまた人倫の目標と公益たるべきものが、第一級かつ至上の種類の詩と看做さるべし」(註(23))ならば、就くハラーの『アルペン山脈』こそ正に当の要請に應えるべく踏み出された第一歩と考えられるのである。

#### (4) 「自然の宝庫」

讃歌「春」でクライストが『アルペン山脈』を「天の柱」とか「栄光の記念碑」(柱(1))と高唱した時、まず念頭にあったのは未踏の霊峰に藏せられている「不可思議」な「自然」(註(23))と考えられる。例えばその第三二節から第四四節(初版の第三二節から第四三節)にかけて、まずハラーは山岳の景観を海拔二二〇八メートルなす「ゴットハルト峠の頂(Gothards Haupt) (第二二一句)より始め、「大地が他所では稀にしか産んだことなきものを、小国スイスでは自然造化の妙(die spielende Natur)が一つに結び合わせた」(第三二二句―第三二四句)ことを物語ろうとする。そしてこの脈絡で出会う「不可思議(Wunder) (27) (第三二四句)の例として、高山植物や金銀水晶など「自然の宝庫 (Reich-tum der Natur) (28) (第四〇九句)が挙げられてゆく。

但し『アルペン山脈』は珍しい博物誌の標本室ではない。つまり「不可思議」な「自然」の描写はそれ自体が目的ではなくて、より高邁な理念追求の道筋を飾る詩歌象徴である。故にそれらは「物そのものの姿 (das Ding selbst) (註(7))から汲み取られるよりは、むしろ作品の基底を滔々と流れる「情操」(註(12))を母胎として浮き彫りにされる。

微光を放つ水晶が岩盤の裂け目より萌え、  
薄暗い山気を貫いて煌めき、四方に輝き渡たる。

お自然の宝庫ノ、穴あらば這い込め汝ら、フランスの小人ども。

四一〇 西欧の金剛石は此所に繁茂し、生育して山岳となるのだノ。(28)

(『アルペン山脈』第四二節)

詩人は宝庫類を開陳してその色や形を誇示するのではなく、自然の奥深くより慎ましく輝く力強い生育を物語り、これを霊峰アルペン山脈の象徴として提示しているのである。

語りかけられているのは、「内なる人間」(註(25))ならぬ「眩惑されし人間 (Verblendete Sterbliche) (第四四一句)に他ならない。

眩惑されし人間たちよ、汝らは間近き墓に至るまで、

貪欲、名譽 (Eh) として快樂を常に空虚な釣り竿へと結わえ付け

四四五 汝らは中産階級の物静かな幸福 (das stille Glück des Mittelstands) を蔑み、

自然が汝らより望む以上を運命に求め、

汝らは愚鈍のみが請うものを必須となす。

おお信じぜよ、如何なる勳章 (Stern) として飲びとならず、如何なる真珠

装飾 (Schmuck) とし富とならぬことを。(29)

(『アルペン山脈』第四五節)

密やかに遠大な力を展開させる大自然の脈動に協和して、新たに芽生える市民意識は既成の価値観を「眩惑」と看做し、「名譽」とか「勳章」や「装飾」を「人倫の目標と公益」(註(23))から度外視する。既に見た「軽い泡の如き暗喩の上を泳ぐローエンシュタインの膨らみ浮腫んだ本質」が、「思索欲」に溢れる「重厚な詩作」(註(15))に取って代わられるのも、同時にこの脈絡から理解されよう。

「自然の宝庫」は「思索 (Denken)」に似た「物静かな幸福」を宿して

おり、堅実なハラールの如き市民階級の「情操」に適うものとして歌われている。この基調を礎として『アルペン山脈』は内省する魂に響き渡り、十八世紀ドイツ抒情詩に新たな一頁を画する。但しこれは目先の時事問題に新聞のような解答を与えようとする傾向文学とは趣を異にしている。なぜなら本質は表層の階級対立にあるのではなく、むしろ勃興する市民意識の底を流れる「情操」にあるからで、これをハラール独自の「思索欲」と「重厚な詩作」が支えているのである。

諸外国に先駆けて市民社会形式を目指した英国に滞在し、それ以降その国の文化に親しむようになったハラールにとり、「英国詩人」は単に書齋の「哲学詩人たち」(註(15))に留まり得なかつたであろう。従つてその「思索欲」も「重要な詩作」も、決して修道院風の遁世した密室で研鑽を積み重ねる自己完結したものではなく、むしろ社会の現実に直面して人倫の深層へと眼差を向け、歴史の歯車を意識の奥底で回す必然を見据えんとして為されており、「自然の宝庫」として当面の史実との睨み合わせで謳われていると考えられる。

この点『アルペン山脈』はそれ以前のハラールの詩歌、例えば初期の佳作『朝の思ひ』(一七二五年)に比べて格段の現実味を帯びるに至っている。即ち人間が、後者では「三重に偉大なる神」(30)の前に「虫虻(Wurm)」(31)として登場するに過ぎないのに対し、前者に至るや市民として自らの「物静かな幸福」を自覚し、現存の課題を担う責任主体となっているからである。

## (5) 「黄金時代」

既成意識を破り理念追求を目指す詩魂が、竟には「至福なるギリシア(Seeliges Griechenland)」(32)へと西欧キリスト者の心を開くまで、十八世紀ドイツ思想詩の歩みは魂の不滅な「至福」を求め苦闘を繰り返す。ハラールが『アルペン山脈』で理想化する牧人生活も「至福」への途上にあ

り、決して現実の農民をありのままに描くことが究極目的ではない。故に粗野な側面は此所に皆目見られないことになる(33)。

四八一 おお至福なる哉(O seilig)ノ、汝らの如く手ずから養い育てた牛たちと

共に

四八二 父祖伝来の自ら所有する農地を耕す者は。

四八九 その者は自分の境遇(Zustand)を大切にし、決して改善(Bessern)を

望まないノ(34)

(『アルペン山脈』第四九節)

この様に山岳の田園生活を賛美することにより、全四九〇句より成る長詩『アルペン山脈』の終結部は閉じられている。

「決して境遇改善を望まない」(第四八九句)とは、『アルペン山脈』第一句に対応する言葉で、ここでは高度に文明化された「人間たち」に向かいこう語りかけられている。

試みるがよい、汝ら人間たちよ、汝らの境遇を改善(Zustand besser)するがよい。

用いよ、学芸が発見し、自然が汝らに賦与したものを。

花壇を噴水でもって活気づけるがよい。

採掘した岩をコリント様式の円柱に刻め。

五 大理石の壁をベルシア布で装飾し被うがよい(35)。

(『アルペン山脈』第一節)

実は博識な自然科学者ハラール自身、生理学や解剖学などで夥しい研究成果をあげ、学術の進歩に多大な貢献をした医学博士であった。その碩学が敢て自己を否定した地平に「至福」を求め『アルペン山脈』を歌い上げる。

ここでは例えばヘーシオドスの教訓詩「仕事と日々」で「黄金の族」(第一〇九句)について語られたこと、即ち「豊饒な地は稔りをもたら

すのだった、ひとりでに 豊かにしかも惜しげもなく(36) (第一一七句—第一一八句) と言う、昔日のタヒチ島まがいの架空物語は払い除けられる。これに対してむしろその教訓詩の主題の筋、「仕事はけつして恥ではない、無為こそ恥である(37) (第三一一句) と言われる点が、正にハラーの「黄金時代」の中核をなすことになる。

二一 幸運に恵まれし黄金時代 (glückliche Zeit) …

二五 それは自ずから穀物が灰黄の野を被い、

二六 蜜が乳と共に膨れた河川となり流れたからではない。

二九 否、それは人間が充溢 (Überflut) を幸福へと数え入れず、

三〇 困苦 (Notdurft) がその富であり、憂慮をもたらす黄金も無かったからなのだ。(38)

〔アルペン山脈〕第三節

厳しい自己批判が此所には含まれている。実にハラーほど豊かな学識の「充溢 (Überflut) (第二九句) に恵まれた才人も稀らしいからで、瞠目すべきは当人が更に自らの殻を破り、「至福」へと突き抜ける方向で「黄金時代」を探索している点である。

「黄金時代」の歌われた詩節から、この倦むことなき探求の姿勢を度外視してしまふならば、上から教訓を乗れる道徳家へと詩人は転身してしまわざるを得ないであろう。故に説教を下すよりむしろ「思索欲」を求めるハラーは、自己の見解を下垂らせる「充溢」よりは、むしろ止み難い「困苦」の方にこそ「美德」(第三四句) を認め、敢て謙虚に学識なき山岳住民の方を仰ぎ見んとする。

三二 汝ら自然の高弟 (Schüler der Natur) よ、汝らはなお黄金時代を知っているのだ!

三三 誰が考量するか、外観の空虚な輝きなど、

三四 もし美德 (Tugend) が勞苦を快となし、貧しさを幸いとすれば。

三五 汝らの飲む群雲は、霜と稲妻で重く垂れこめ、

三六 長期の冬は、遅ればせの春の期間を縮め、

三七 して万年雪が冷えた溪谷を困らぬ。

三九 だが汝らの人倫の価値 (Sittlichen Wert) は、万事これらを改善 (verbessert) したのだ。(39)

〔アルペン山脈〕第四節

「自然の高弟」は初稿で「生粹の真正な賢者 (Weisen) (40)」と呼ばれている。そして必然不可避の「困苦」ゆえの「改善」のみが「賢者」に相應しく、これこそが「人倫の価値」を基礎づけるとハラーは主張しているのである。

(6) 「幸福な乏しさ」

「困苦」ゆえの「改善」には「充溢」(註(38)) が欠け、常に或る「貧しさ (Armut)」が「美德」(註(39)) として宿る。故に充ち足りた者に時折ふと兆す不満も此所では疎遠となる。

四一 汝は幸いだ、不満なき民 (vergnügtes Volk) よ、おお運命に感謝せよ、

四二 幸運にも汝には、悪徳の源泉 (der Laster Quell) たる充溢 (Überflut) が拒まれていた。(41)

〔アルペン山脈〕第五節

通常考えられるような彼岸ではなく、正にこの現実の只中に「黄金時代」の足跡が刻まれる。但しそれは格別な神殿や寺院ではなく、身近にふと出会う自然の慎ましき精華において、霊峰アルペン山脈ではそれに出会うことが出来る。



五九 自由の君臨する所、全て苦勞は輕減され、  
六〇 岩肌にさえ花咲き、北風も和らぐ(42)。

(「アルペン山脈」第六節)

「岩肌にさえ花咲き (Die Felsen selbst beblüht)」(第六〇句)と歌われる目立たぬ高山植物こそ、恐らく金銀水晶(註(28))に増して「自然の宝库」であろう。實際ハラールの筆も草花を謳う第三九節以下で生彩を放ち、後生レッシングをして「この種のものでは傑作 (ein Meisterstück in seiner Art) (43)」とまき言わしめた程である。

「幸福なき」(Glückseliger Verlust) :: (44)と、ハラールは「黄金時代」の本質を第七節冒頭(第六一句)で言い中てる。後にヘルダーリンが「幸福」を「至福なるギリシア」(註(32))へと、「乏しさ」を「乏しき時代 (dürftige Zeit) (45)」たるキリスト教西欧へと展開させる酵母が既に此所に見られる。両者ともに「乏しさ」が「幸福」や「至福」と見事な明暗を織り成し、西欧キリスト者に特有な意識の淵を彩っている。

至福なる哉、心に乏しさを育くむ者らは(46)。

(「マタイ福音書」第五章、第三節)

かくして「黄金時代」は、魂の古里ギリシアと共に、「聖書」の神観の下に純化されていると言ふことができよう。

ところで滞英以来ハラールが親しむようになった「哲学詩人たち」(註(14))も、一種の「黄金時代」をハラール同様に眼下に収めていた。しかしながら此所には「乏しさ」が欠けており、専ら「充溢」(註(41))が高唱されている。例えばポープの初期詩歌の成功作『ウインザーの森』(一七二三年)を見てみよう。

三九 此所では農耕の女神デーメーテルの贈物が、波うつ眺望 (waving prospect) の下に豊饒を予期させ、

九 ドイツ思想の黎明 その三 — ハラール『アルペン山脈』 — (高橋)

四〇 して穂を垂れ、歎呼する刈り手を誘う。  
四一 富裕なる勤勉 (Rich Industry) が平原に微笑みて坐し、  
四二 して平和と充溢 (plenty) が、王朝の治世を物語る(47)。

当時ブリテン王国の「平和と充溢」は、産業革命と議会制度に支えられ、一七〇七年スコットランド併合、後には一八〇一年アイルランド併合と着実に帝国拡張を実現してゆく。その王国躍進の初期に「乏しさ」や「貧しさ」(註(39))が歌われなくとも不思議ではない。

同様の例はトムソンの詩歌にも見い出せる。例えばその著名な『四季』(一七二六年—三〇年)から『夏』(一七二七年)の第一四三八句以下に注目すると、「素晴らしい眺望(48)」をへた後で、王国がこう讚美される。

幸福なブリタニア (Happy Britannia) / 汝の下では諸学芸の女王、  
靈氣息吹く活力、自由 (Liberty) が外へと

解き放たれ、汝の国境の僻地の田舎小屋にまで赴き、

一四四五 して充溢 (plenty) を時き散らす、手ずから惜しみなく(49)。

(「夏」第一四四二句以下)

更に自由の讚歌『自由』(一七三五年—三六年)に至るや、トムソンはその大団円なす終結部冒頭において、もはや「幸福」ならぬ「至福」を「ブリタニア」の属性とする。

一 おお至福なるブリタニア (blest Britannia) / 至福の現在 (presence best) において、

三 汝は人類の保護者なのだ、汝からのみ

四 全て人類の威厳と幸福、そして名譽 (fame) は進り出る(50)。

(「自由」第五部冒頭)

「乏しさ」なき「至福」に礎を置く国威高揚が此所で、単に産業革命とか帝国拡張に支えられているわけではない。それはヴォルテールが『哲学書

簡」(初版一七三四年)で礼讃した「自由」と「啓蒙」の祖国ブリタニアをまずは念頭に置いている。しかしながら「啓蒙」の朗らかさに感<sup>かま</sup>じて、その時代の明暗の全体を見ないでは不十分であろう。就く「ヴォルテールに一種の尊敬をまじえた恐れを感じしめた(51)とまで言われる敬虔なハラーの詩語を鑑みるならば、それは尚更なのである。

### (7) 「楽園フランス」

十八世紀ブリテン王国の躍進には目覚しいものがある。だが当時の趣味ロココとか、革命後に偉人廟入りしたルソーやヴォルテールに象徴される「啓蒙(光明)の世紀(Siècle des Lumières)」は、別の王国フランスにまず確かめられる。そして啓蒙の成果が一七八九年以降フランス革命という現実の力を有し、「王たる者は全て反逆者であり篡奪者である」(Foult roi est un rebelle et un usurpateur.)<sup>(52)</sup>と公言され、共和国樹立(一七九二年)の翌年に国王朝首を敢行したのも第一共和制フランスであった。但し一七七七年没のハラーには、この十八世紀全体への見通しが欠けており、啓蒙と革命の時代は共和国フランスならぬブルボン王朝の下に眺められざるを得なかったのである。

前述の如くハラーは、「大地が他所では稀にしか産んだことなきものを、小国スイスでは自然造化の妙が一つに結び合わせた」(註(26))として、「おお自然の宝庫ノ 穴あらば這い込め汝ら、フランスの小人ども(welsche Zwerge)」(註(28))と豪語している。隣国の王朝文化への対抗意識がこの様に「アルペン山脈」では明白に表出されており、当作品をナートラーに倣い「古<sup>alt</sup>の同盟スイス共和国民(Die alten Eidgenossen)<sup>(53)</sup>」と呼ぶのも一理ある。政治上では旧体制(Ancien Régime)に対する共和国の自負があり、それを支える「和合と誠実そして勇氣」で以て、ハラーは「楽園フランス」をささ<sup>さ</sup>凌<sup>り</sup>ごうとする。

二九五 如何にしてテルが果敢な勇氣もて、堅固な(旧体制の)軛を粉碎したことか。

その軛は今日もなお西欧の半分が担っているものだ。  
連邦スイスを囲む全ての国はこの鎖の下、いかに窮乏と飢餓に苦しみ、また楽園フランス(Welschlands Paradies)がいかに腰曲がれる乞食を養うことか<sup>(54)</sup>。

三〇〇 いか<sup>い</sup>に和合と誠実そして勇氣が、相互に分かち得ぬ諸力なして、小国スイスに幸福の翼を結<sup>むす</sup>え付けていることか<sup>(55)</sup>。

### 「アルペン山脈」第三〇節

連邦スイスの富を、何より「幸福な乏しさ」を宿す「人倫の価値」(註(39))に詩人が見ている点は、既に指摘した通りである。

ところで「悪徳の源泉たる充溢」(註(41))を文明国フランスに確かめ、これとの対比の下に「古<sup>alt</sup>の同盟スイス共和国民」の「和合と誠実と勇氣」を賞揚するのには先例があった。それは同国人ムラルト著「英国人とフランス人に関する書簡」(一七二五年)に添えられた「旅行に関する書簡」の文面である。

この世に君臨する摂理(Ua Providence)が望んだのはこんなことであろう。諸国の中に或る正しく純朴(une droite et simple)な国があり、この国には豪奢(Grandes richesses)のみならず、大規模な娯楽の機会もなく、贅沢に引き擦られ投げやりな生活を送る欲望も湧かない。世に埋もれた幸福(Une heurieuse obscurité)、あらゆる見せびらかし同様あらゆる無氣力から遠い生活様式が、私達を私達の山岳に結びつけたに違いない。またこの生活様式と切り離せない心の充足が、私達にこのことを確信させたに違いない<sup>(56)</sup>。

ムラルトの言う「世に埋もれた幸福(幸福な闇)」が先例になっていることは確かだけれども、ハラーは単なる先人の拡声機ではない。なぜなら自らの「充溢」をも破る自己批判の坩堝をへて、これが竟には「幸福な乏しさ」へと深まっているからである。

かくして「古の同盟スイス国民」も理想の対象となる。と言うことは後にハラー自身が別の詩歌『当世風の人物』（一七三三年）の終結部（第一五七句―第一六〇句）で語るように、現実においては、「国家に魂を吹き込む市民の心の絆、祖国の脊髄は無気力（*mit*）となり空洞化（*ausgehöhlt*）している（<sup>57</sup>）」という方向を認めないわけにゆかない。この点を例えばシャトーブリアンは『諸革命に関する試論』（一七九七年）第一部の第四八章で、こんな風に説明している。

そういうわけで哲学は、（黒海沿岸の）スキュティア人たちの墮落の第一段階であった。スイス人たちは有徳であった時、諸学芸に無知であった。その人々が自らの人倫習俗（*hours*）を失い始めた時、ハラー家やテイソー家やゲスナー家やラーヴァーター家が現われたのである（<sup>58</sup>）。

「諸学芸（*les lettres et les arts*）」の巨匠ハラーの出現は、裏返せば「人倫習俗」の「墮落の第一段階」を象徴するものと看做せる。恐らくハラー自身この点に無知でなかった故にこそ、自らの「充溢」（註（41））を突き破らんとしたのではなからうか。

### (8) 「苦吟する詩人」

『アルペン山脈』の基底には「幸福な乏しさ」を仰ぐ敬虔な「情操」が脈々と流れており、後世シラー以降これは「極めて高貴で威力ある表現様式における情操の全体（*das Ganze einer Empfindung*）（<sup>59</sup>）」へと円熟してゆく。但し「感動が詩句を作る」（註（11））とは言うものの、「情操」における「感動」だけでは詩歌とならない。従って「苦吟する詩人（*der arbeitende Dichter*）」（註（7））の創意工夫をも無視することが出来ない。就くハラーの場合は、クロプシュトックの様な純朴な抒情詩人に比べ、遙かに「分別悟性（<sup>60</sup>）」（註（4））の働きが顕著なので、一層とこの面での考察を省けないのである。

まず作品の構成に関し『アルペン山脈』全体の鳥瞰を企ててみよう。全四九節は大別し三部に分かれ、導入部は冒頭一〇節、中央部三四節、終結部五節となる。詩節の数だけ見ると、導入部は終結部の二倍となっている。但しこれは『スイス詩歌の試み』再版（一七三四年）以降のことで、その初版で始めて『アルペン山脈』が公刊された折には、後の第一節が欠けた計九節であった。だが改稿の成果は節の数を整えることに留まらない。既に本論でも言及したことであるが、この結果として終結部が冒頭に結びつくことになる。即ち第四四一句で「眩惑されし人間たちよ」（註（29））と呼びかけられ、第四八九句で「境遇」の「改善を望まない」（註（34））ことが結論とされたのに対し、新たな第一節冒頭では「人間たちよ、汝らの境遇を改善するがよい（<sup>61</sup>）」（註（35））と転じ、共通の主題で以て繋ぐれ作品全体は円環構造を成すに至るのである。

詩人は作品の導入部と終結部で同旨の所信を表明しており、詩歌象徴も格別その双方に変化は見られない。この点はヘルダーリンの「パンとぶどう酒」（一八〇〇年―一〇一年）（<sup>62</sup>）において、第一部「夜」から第三部「西欧の夜」にかけて見事に音調が転移しているのを知る読者には、物足りなさを拭い去れない所であろう。だがハラーに都合よく解釈すれば、中央部においてアルペン山脈での生活や自然に触れた後に辿り着く終結部は、文字面こそ導入部と大差ないものの、やはり作品の深層を流れる「情操」（註（12））において転調していると言える。

むしろ表現の妙は『アルペン山脈』の場合、各々の部分の繋ぎ目に見い出せ、これが強い結節点となり作品の骨格を逞しくしている。当の節目は概して四ヶ所考えられ、中央部三四節において主題の転換点に二ヶ所（第一七節と第三三節）、あとはその前後の導入部と終結部との間に位置する。まず導入部を締め括る第一〇節結句「倦むことなき民に（*Dem unverdrossen Volk*）…」（<sup>63</sup>）（第一〇〇句）で、詩人は「労苦を快となし、貧しさを幸いとす」と言う「黄金時代」（註（39））の所信表明を終え、以下アルペ

ン山脈での生活と自然の具体化した姿に目を移してゆく。その生活の現実  
は、遊戯(第一一節―第二二節)<sup>(64)</sup>と恋愛婚姻(第一三節―第一六節)<sup>(65)</sup>  
の計六節に始まり、竟には冬ごもり期における談話(第二六節―第三  
一節)<sup>(66)</sup>の計六節で終結し、この冒頭と締め括りの各六節が相互に明暗  
を織り成す。

冬期の談話なす箇所は引き続き第三二節を以下との節としつつも、中央  
部の中央に位置を占め、人間から自然へと詩想が移りゆくならかな  
中間休止を形造る内面空間 (Innenraum) であり、この後アルペン山岳の  
景観(第三三節―第三六節)<sup>(67)</sup>の計四節、高山植物(第三七節―第四〇  
節)<sup>(68)</sup>の計四節、鉱脈等(第四一節―第四四節)<sup>(69)</sup>の計四節が続く。こ  
の各四節に見られる様にハラールの詩節の数は比例する。例えば冬期の談話  
に先行する四季の詩節も、春三節(第一八節―第二〇節)、夏一節(第二  
一節)、秋三節(第二二節―第二四節)、冬一節(第二五節)と回る<sup>(70)</sup>。  
そしてその前に繋ぎの第七節が「魂の平安 (Seelen-Ruh) ①」(第一六  
二句)を物語る。

ハラールが『アルペン山脈』で示す繋ぎの妙は、その中央部から終結部へ  
の転調に見い出せる。此所では導入部の「黄金時代」(註(38))と同様に  
「境遇改善を望まない」(註(34))「不満なき民」(註(41))を讀えるに先  
立ち、その山岳アルペン住民の無欲な姿が、「眩惑されし人間たち」(註  
(29))に鋭く対比される。

四三七 アーレ河の流れは砂金で重く、純金の粒を撒く。

四三九 牧人はこの宝を眺め、宝は転がるその足下で

四四〇 おお世の範例ノ 牧人は眺め、宝を流れるに任せる。

四四一 眩惑されし人間たちよノ 汝らは間近き墓に至るまで、

四四二 貧欲、名譽そして快樂を常に空虚な釣り竿へと結え付け

……②

(『アルペン山脈』第四四節―第四五節)

(9) 「各十行の詩節」

ハラールが全四九〇句(初版は全四八〇句)に互る『アルペン山脈』で試  
みた新たな企ては、前述の如く第一には教訓詩から思想詩へと展開する十  
八世紀ドイツ抒情詩の巨歩を踏み出した点である。そして歌われる素材と  
して、この思念の脈動に相応しい自然として、霊峰の山岳が選び抜かれた  
と言える。今日では気楽に旅行できる高山アルペン地域が、それ迄は未踏  
の恐れ山でも滅多に近付かず、当時の自然と言えれば庭とか小川など言わ  
ば箱庭風性格が濃厚であった点を考え併せれば、ハラールの提示した大自然  
が破格の存在であったことが知られるであろう<sup>(73)</sup>。

とは言え『アルペン山脈』の歌い方は、滔々と詩想がうねりつつ展開す  
る後の詩作品とは様相を異にし、規則正しく区切れる「各十行の詩節」に  
基づいていた。この点に関しては詩人自身が「スイス詩歌の試み」第十一  
版の際に附した当詩歌の端書きにこうある。

だが私が選んだのは或る骨の折れる種類の詩作で、これが私の仕事を不必要に  
も拡大した。各十行の詩節 (Die zehnzeiligen Strophen) を私は用いた  
ので、それに強いられた私は幾多の個別描写をそれが実際にあった以上に為し、  
常に対象全体を十行 (zehn Linien) に閉じ込めねばならなかった。また最  
近の慣例により、思想の強度を詩節の末尾で常に高めねばならないので、仕上  
げは一層と重荷となった<sup>(74)</sup>。

しかも『アルペン山脈』の韻律は、ラシーヌの『フェードル』(一六七七  
年)など前世紀フランス古典劇に活用された隣国伝来の詩型アレクサンド  
ランである。どうも詩歌形式の決定に関しては、ドイツ語で歌う詩人の内  
的必然性が余り併っていないようである。

しかし「各十行の詩節」を用い、「思想の強度を詩節の末尾で常に高め」ることは、成程カント哲学と響き合う様な思念のうねりには不相応であろうが、他面ポープの『人間論』(一七三三年—三四年)に見られる啓蒙期特有の「簡にして要を得た倫理体系 (a short yet not imperfect, system of ethics)」を念頭に置くならば、むしろ好都合と考えて良いであろう。

もし私の論文にながしかの長所があるとすれば、それは一見対立する極端な学説の中間に棹さし、意味の捕捉に苦しむ言葉を避け、穩健にして矛盾のない、簡にして要を得た倫理体系をつくりあげる点にあると思う<sup>(75)</sup>。

(ポープ『人間論』冒頭、「構想」)

『アルペン山脈』や『人間論』が人口に膾炙され易い理由が、此所に説明してある。例えば後者なら、「希望は人間の胸中の尽きぬ泉だ<sup>(76)</sup>」(第一書簡、第九五句)とか、「理性は羅針盤で、欲望は風だ<sup>(77)</sup>」(第二書簡、第一〇八句)とか、「神は人間の胸の中に己が姿を映す<sup>(78)</sup>」(第四書簡、第三七二句)など、箴言、風に縁取り、され時流の啓蒙精神に適用する詩句が読者の記憶に容易に刻まれてゆく。

同様ポープの教訓詩に似てハラールも、例えば第一五節末尾で、「そして情愛が牧草に芳香を賦与し (Liebe balsamt Gras)、嘔吐は絹(蒲団)に君臨する<sup>(79)</sup>」(第一五〇句)と、牧人生活と宮廷生活との対比を只一句で示したり、また『アルペン山脈』の主題を第四五節の結句にて、「中庸なす自然のみが幸福になし得る (Die mäßige Natur allein kann glücklich machen.)<sup>(80)</sup>」(第四五〇句)と要約したりしてゐるけれども、他方「尚一層短かい行に、一層多くの思想をつめこみたい」(註(14))との姿勢は、何時しか箴言風の了解領域を破らざるを得なくなり、啓蒙批評により「公然たる白昼から逃避し、闇の晦渋へと遁れる」(註(4))と指摘される迄に至る。確かに訳者が語釈に苦しむこと自体がこの事の証左となる。

つまり読者が思索ぬきに修辭の綾に囲まれたいと望んでも期待薄である。むしろ雄弁の充溢は見下される。

四七七 汝ら(不満なき民)には、沸き立つ快樂の大河も充ち溢れず、  
四七八 これに対して理性が空虚な教訓を垂れ自慢することもない<sup>(81)</sup>。  
(アルペン山脈』第四八節)

啓蒙理性の「空虚な教訓 (erle Lehren)」に代わりハラールの場合には、「探求しつゝ深く物思いに沈潜し (Versenkt im tiefen Traum nachforschender Gedanken)、崇高な精神が人間の限界を破り雄飛する (Schwingt ein erhabner Geist sich aus der Menschheit Schranken.)<sup>(82)</sup>」ことになる。だがこのためには「各十行の詩節」は窮屈であり、しかも各節ごとが『人間論』のような教訓の落ちで区切られてしまうとなると、思念の十全な展開とうねりは一層と望めない。故に教訓詩より思想詩へと深まりゆく思索の道筋は、詩想が途切れず脈動するのを望むのであるが、但しそれは同時に自らの「充溢」の彼方に「幸福な乏しさ」を求める慎ましさを忘れず、倦むことなく探求する歌声となるのである。

### (10) 「内的完全性の発展」

人間理性は自然本性上、建築術的である<sup>(83)</sup>。

(カント『純粹理性批判』一七八二年)

スイス派ブライティンガーが一七四〇年に『批判的詩論』(註(21))第二部でハラールの詩歌作品を賞揚した折に、「画家の逼真の写生も、この詩的描写 (diese poetische Schilderung) にくらべれば、全く気のぬけた暗いものである<sup>(84)</sup>」との旨を表明し、正に「詩は絵画の如く (ut pictura poesis.)<sup>(85)</sup>」とどう観点が浮上した。同じ「詩的絵画 (das poetische Gemälde.)<sup>(86)</sup>」の線で『ラオコオン』第七章にてレッシングは、『アル

ペン山脈』第三九節以下を「この種のものでは傑作」(註(43))として吟味対象に取り上げ、「その一語一語に苦吟する詩人の声を聞くが、物そのものの姿が見えるとはとても言うことができない」(註(7))と評して、ブライティンガーのハラール礼讃を批判する。こんな調子でいつの間にか『アルペン山脈』も「詩的絵画」の代表として整理されてしまったのではなからうか。

ところが『ラオコオン』のハラール批判の裏には、別の詩歌の可能性をも読み取ることが出来る。例えばレッシングはマルモンテルの『フランス詩論』より、次の興味深い一節を引用している。

私がこれらの考察を書いたのは、この種の文学(牧歌)におけるドイツ人の試みが、わがフランスに知られる以前のことであった。彼らは、私の考えたことを実行したのである。そしてもし彼らが、自然描写の細部よりも精神的な面を重視するようになるならば、この方面ですぐれた仕事を残すであろう。優雅な牧歌よりも、よりゆたかな、広い、みりの多い、そして無限に自然で精神的なものを(87)

私は此所に十八世紀ドイツ教訓詩が思想詩へと展開する筋を見るのであるが、他方レッシングの場合ハラールを範に『宗教』第一歌(一七五一年)など創作断片を物した後にこの種の詩歌では挫折してしまつたのであるから、話題の『ラオコオン』で結局ハラール批判に転じたのも止むを得ないと言えよう。

表向き「詩的絵画」を盾にレッシングの批評は、ブライティンガーのハラール礼讃の弱点を見事に抉り出している。だが此所ではその裏面を見つみよう。

このような詩にあの誇大な賛辞を呈する批評家は、全くまちがった視点からそれを眺めたのに相違ない。彼は、詩人がそのなかに織りこんだしらじらしい装飾や、植物の生活の高尚めかした表現や、外面の美(die äußere Schönheit)

をただの入れ物にしている内的完全性の発展(die Entwicklung der inneren Vollkommenheiten)などをひたすら重視して、美そのものとか、画家や詩人がわれわれに与えることのできる形象の鮮かさや迫真性の程度(Grad der Lebhaftigkeit und Ähnlichkeit des Bildes)などは、あまり顧みなかったのにちがいない(88)。

「美そのもの(Schönheit selbst)」とは「物そのものの姿(Ding selbst)」に通じ、その「形象の鮮かさや迫真性」が、『アルペン山脈』第三九節以下の「詩的描写」に欠ける。と言うのがレッシングの主張であり、これには恐らく異論はないであろう。

ところが先のマルモンテルの一節に言う「よりゆたかな、広い、みりの多い、そして無限に自然で精神的なもの」(註(87))を念頭に置くならば、むしろ『ラオコオン』第七章の批評文の中からは、「内的完全性の発展」が目される。但し一面これは人間の内観の外に単に客体化して措定される「外面の美」そのものの構造形態とも取れる。そして既に見たゲーテのブライティンガー評にある「内なる人間(der innere Mensch)の表現」(註(25))の欠如を考え併せるならば、「内的完全性の発展」とは言わば、ハラールの様な植物学者が「物そのものの姿」の内部に分析し観察する学術上の記述に過ぎないとも取れる。

実際ハラールが『ラオコオン』第七章におけるレッシングの批判に对应して、『ゲッティンゲン学報』(一七六六年)に掲載した弁明文によると、ハラール自身は「内的完全性の発展」を、「植物(Kraut)」の「若干の瞳目すべき特徴(einige merkwürdige Eigenschaften) (註(4))」と言う程度にしかなかったと思われ。

即ち詩人は植物の内部にある諸特徴を表現でき、これらは他の諸器官を通し認識され、実験により発見されるものであり、こういう諸特徴を表現することは画家に禁じられているのである(89)。

興味深いことに詩人自身を始めとして当時の人々にとつては、「内的完全性の発展」が「内なる人間の表現」へと更に展開するなどと思えなかつた様である。

だが詩人自身が十分に意識しなかつたことを、後世の研究者は見い出す。例えばレクラム文庫版『ハラール詩選』(一九六五年)「結語」でのエルシェンプロイヒ評にはこうある。

レッシングは次の点を顧慮しなかつた限りハラールに不当であった。つまり『アルペン山脈』においては、風景描写 (Landschaftsschilderung) と理念の詩作 (Ideendichtung) とが不可分の一体を成しているのである (98)。

抽象度の高いこの指摘を具体化するために、以下『アルペン山脈』第三九節を取り出して検討してみることにしよう。レッシングもこう言つて当時節を引き合ひに出している。

ひとつ実例にあたって見ることにしよう。この種のものでは傑作といつていいものである。

- 三八一　むこうには気高い、<sup>い、ん、ど、う、が</sup>そのうなじを、
- 三八二　歌いさわぐ雑草の卑しい群れ (Chor) の上高くもたれている。
- 三八三　花族はみな彼の旗のもとに任せ、
- 三八四　その青い弟さえも身をかがめて彼をあがめる。
- 三八五　光のうず巻くせんぶりの花の
- 三八六　茎にそびえる明るい黄金は、灰色の衣の冠のよう。

… (91)

此所に何らかの「理念の詩作」に繋がるものを探すが目下の課題である。果して単なる「詩的絵画」よりも、「よりゆたかな、広い、みよりの多い、そして無限に自然で精神的なもの」が見つかるであろうか。

恐らく視覚本位の考察は慧眼レッシングの思う壺にはまるのみであろうから、「物そのものの姿」とか「植物の内部にある諸特徴」などは問題外

にするとして、話題の詩節にて或る「内的完全性の発展」へと形造られる契機を探求してみよう。すると「歌いさわぐ群れ (Chor)」(第三八二句)として扱えられた草木の在り方が留意される。そして言わば「不可思議な妙な合唱 (Wunderchor)」としてこの筋を本筋とするならば、静物画として眺められた客体ではなく、この「合唱」に協和して躍動する高山植物の諸相が、「よりゆたかな、広い、みよりの多い、そして無限に自然で精神的なもの」を志向することに傾聴できるであろう。

レッシングの見過したものは、こんな状況である。即ちこの描写に専念する詩節が、或る共通の文脈 (Miltex) に織り込まれており、この文脈が当詩節に或る内なる躍動 (eine innere Bewegung) を伝え、これを当詩節は受け取るのみで所有しないのである。… かくして正に当詩節の主意は、「虹の刺繍で編まれた緑の絨毯」(第三八〇句)と言つた静物画に (im Staischen) あるのではなく、これらの高山植物の不可思議な合唱 (Wunderchor) に存し、この合唱が美しき躍動を受け、生気を帯び、決して究められることなく、位階 (hierarchisch) なして序列づけられているのである (92)。

(キュンター『アルペン山脈』論)

既に本論が「情操」(註(12))に宿る「感動」(註(11))として考えた筋が、此所に「内なる躍動」と表現されており、これが「内なる人間の表現」に固有の「内的完全性の発展」に繋がると見て良いであろう。

また「位階なして序列づけられて」と指摘された点からは、「共通の文脈」に宿る「内的完全性の発展」が、所謂ゴティック聖堂様式を思わせる「ドイツの建築」へと繋がるのではなからうか。少くともゲーテが「ドイツの建築」(一七七二年)において述べた次の点は、ハラールの『アルペン山脈』にもあてはまると思われる。

芸術は美 (schön) であるよりもはるか先に、まず造形 (bildend) の営みだ。… なせなら、人間には造形的天性 (eine bildende Natur) があつて、

これは生存が確立するとすぐさま活動によって自己をあらわそうとするからだ。… なせなら、一つの感情 (eine Empfindung) がそれを個性的な全体に作りあげているからだ<sup>(93)</sup>。

未だ『アルペン山脈』には後のシラーやヘルダーリンに見られるような「造形的天性」が十全に展開していない。だが「幸福な乏しさ」を自らの「充溢」の彼方に遠望するハラーの詩作には、「内的完全性の発展」を求める止み難い「一つの感情」が生動しており、これが作品を「個性的な全体」に作りあげているとは言い得るであろう。

前述の如く「内なる人間の表現」に固有の「内的完全性の発展」を十八世紀中葉ハラーたちが十分に自覚していなかった点は、『詩と真実』第七書でゲーテに指摘(註(25))された所である。ところが明確に詩人自身は意識しなかったにせよ、『アルペン山脈』にその「発展」への契機が無かったわけではない。むしろハラー自身の意識の深層には霊峰アルペンの風土に触れ何時とはなしに、「ドイツの建築」の巨匠エルヴィンを前にしたゲーテの「祈り (Gebete)」に似た「感情」が芽生えていたに違いないと考えられる。

汝は生ける一なる者、生み出され展開されたのであり、掻き合められ継接されたのではない。汝を前にすれば、あたかも猛きライン河の飛沫とばし雪崩下る瀑布を前にするが如く、あたかも白雪いづく霊峰の輝く絶頂を前にするが如く、あたかも明鏡の如く広がる湖を眼前にするが如く、峰白きゴットハルトよ、汝の群雲かかる岩壁や荒涼たる溪谷を眼前にするが如く、あたかも創造という偉大なる思想 (Großer Gedanke der Schöpfung) の各々を前にするが如く、魂の中で動き出すのだ、魂に宿る創造力 (Schöpfungskraft) とでも言えるものが<sup>(94)</sup>。

(一七七五年七月十三日)『エルヴィンの墓への第三次巡礼』手稿「祈り」

クライストが壮麗な讃歌の終結部にて『アルペン山脈』を「天の柱」、<sup>(95)</sup>「栄光の記念碑」(註(1))と称えた時、「創造という偉大なる思想」が脳裏

を過ったことであろう。そして丁度ゲーテがレッシングの『ラオコオン』に驚嘆した折のように、「この作品が私達を貧相な直観の領域から (aus der Region eines kümmerlichen Anschauens) 思想の自由な広野へ (in die freien Gefilde des Gedankens) と魅了し拉致去った<sup>(95)</sup>」と、『春』の詩人なら素直に認めたと思われるのである。



## 註解

### (1) 「栄光の記念碑」

- (1) クライスト『全集』(レクラム文庫)一九七一年、五四頁(『春』初稿、第四四句―第四四二句)／五六頁(第四四三句―第四四四句)。
- (2) 『ハラー詩選』(ヒルツェル編)一八八二年版『ハラー詩集』に依る(レクラム文庫)エルシェンプロイヒ編、一九六五年、五四頁。
- (3) フライ『ハラー、その独文字への意味』(一八七九年)一一三頁の主張、つまり「ハラーが一七三五年よりクロプシュトゥック登場(一七四八年「救世主」冒頭三歌章刊行以降)に至るまで、最も名望あるドイツ語圏の詩人であった」との旨を、メッツラー研究叢書の第五七巻ジークリスト著『ハラー』(一九六九年)五七頁も承認しており、更に同五七頁には当フライ著一一頁以下の論述より、「幾多の同時代の報告が示す」こととして、「ハラーの詩歌が暗唱され旅の友とされた」ことが紹介されている。  
成程ハラーに焦点をあてれば以上の如くであるが、他方ゲーテの『詩と真実』(一八二一年―一四年)で回顧された一七六五年(第六書―第七書)の記述にある様に、当時十八世紀中葉の「名望ある老大家(Ger. ansehnliche Altvater)」(ハムブルク版作品集、一九八二年、第九巻、二六八頁)たるゴットシエートの側(註(4))から眺めれば別面も垣間に見られる。実際ゲーテの述べる通り、「ゴットシエートの水域(Das Gotschedische Gewässer)はまるでノアの洪水さながらドイツ語圏に氾濫し、山岳の峰々をさえ呑みこまんとしていた」(二五四頁)と言えるからである。  
そうしてやがて、私があんなにも楽しく散策したドイツ詩歌の山岳の麓なす美しく多彩な草原は容赦なく伐採され、かつ私までもが干涸びた乾燥草を一緒にひっくり反さざるを得なかった。(二五五頁)
- (4) ゴットシエート『ノイキルヒ詩集への序文』(一七四四年)より、註(2)ヒルツェル編『ハラー詩集』中の評伝二二三頁に引用された例文を、再び

此所で当時の文壇の現状を余りにハラーやゲーテを尺度にして見ては危険であらう。

註(3)メッツラー叢書『ハラー』五六頁に引用。この引用の前半の一部は註(3)『ハラー、その独文学への意味』一一九頁より、ギュンター「形式と意味」(一九六八年)八九頁―一〇〇頁所収『ハラーの「アルペン山脈」の構造と言葉』一〇四頁でも紹介されている。

もっとも『アルペン山脈』が匿名詩集『スイス詩歌の試み』初版(一七三二年)で公刊された折には、当初版に関し既に同年『ライプツィヒ学報』でゴットシエートは称賛の言葉を惜しんでいない(註(2))『ハラー詩集』中のヒルツェルによる評伝二〇頁に引用。

この試みは実に良い出来栄なので、この詩集の読者は誰でもこの種のものがもっと当スイス国より出版されるのを望むであらう。なぜなら思想内容は凡そ斬新で気高く入念であり、言葉使いも良く選び抜かれて力がこもっており、しかも脚韻も純正で滑りが良い。匿名の作者は聞く所によると著名なムラルト氏だそうだ。氏は数年前に夥しい賛辞で迎えられた『英国人とフランス人に関する書簡』(一七二五年)を物した人である。

後に反スイス派の党派心も加わりゴットシエートは賛美より批判へ転ずる。因みにムラルトに関しては本論の註(56)で当書簡を引用する。

- (5) デカルト『方法序説』(一六三七年)第四部。仏独対訳哲学叢書、一九六〇年、六二頁、「觀念や概念は…明晰かつ判明…」。
- (6) 『ハラー、その独文学への意味』(註(3))一一九頁より、「ハラーの「アルペン山脈」の構造と言葉』一〇四頁に引用。
- (7) レッシング作品集、一九二五年刊二五部作品集に依る写真複製版、一九七〇年、第四巻(第四部)三六八頁。岩波文庫『ラオコオン』斎藤栄治訳、一九七〇年、二二五頁。
- (8) ヴァイマル版シラー全集、第二〇巻、一九六二年、四五四頁。
- (9) 全集(註(8))第二〇巻、四五三頁。
- (2) 「新たな詩作」
- (10) ハラー『諸著作家と自己自身についての観察日記』全二部(一七八七年)複製写真版二巻本(一九七一年)第二部、一一九頁。別に歴史批判版ドイツ国民文学(DNL)第四一巻の第二分冊(一八八五年頃)フライ編『ハラー

選集』(三修社写真複製一九七四年)一五六頁にも引用箇所は見られるが、諸所今日の正書法に綴りを改めて引用されているので、本論では典拠としな

(11) 『ハラー詩選』(註(2))一四頁。

引用の第二八〇句(第二八節)は、それに相当する初版の第二七節の第二七〇句(註(10)『ハラー選集』二五頁)でこうなっている。

若き羊飼いは牧人として考え、自ら考えたまま書く。

(12) 『ハラー詩選』(註(2))四頁。註(59)も参照。話題の第一三句(第二節)は、それに相当する初版の第一節の第三句(註(10)『ハラー選集』一七頁)で左記の如く。

適度な心情(Gemüth)が、胆汁を甘くすることが出来る。

(13) 『ハラー詩選』(註(2))五三頁。

目下取り上げている「感動」に関しては、既に若きシラーが一七七五年頃ハラー初期の詩歌『朝の思い』(一七二五年)第三五句以下に殊のほか驚嘆した筋が考え併される。これに関しレクラム文庫版一九六八年刊シュトライヒャー著「シラーのシュトゥットガルト逃亡とマンハイム滞在」(一八三〇年頃)では、一七七五年頃のこととして若き詩人の姿を次のように伝えている(一九頁)。

すると安らぎを与える或る内なる声が、シラーに大声で呼びかけた。かの偉大なる医者にして偉大なる自然探究者ハラーは、同時にまた偉大なる詩人ではないか? 創造の不可思議をハラーよりも美しく壮麗に誰が歌ったであろうか? …この表現(「朝の思い」第三五句以下)をシラーは、ハラーの別の詩句とともに、当時のみならず、青春時代初期が疾うに過ぎ去って後も、なお驚嘆の念を以て引用したものである。

やがて「情操」における「感動」は、十八世紀後半ヘルダーリンの言葉通り「魂の歌声(Seelengesang)」(シュトゥットガルト版全集、一九四六年—七七年、第二巻、二〇二頁)へと展開し、ゲーテの『ファウスト』第五三四句以下でこのことがこう語られるのである。

もし君らに感情が無いなら、それは会得できないだろう。

もし魂から(aus der Seele)こみ上げ、

根源の力に溢れる快音で

どの聞き手の心情にも迫らなくては。

(註(3)) 作品集、第三巻、二五頁

(14) 『スイス詩歌の試み』第四版の序文より註(2)ヒルツェル編『ハラー詩集』二四八頁—二四九頁に引用。別に註(3)メッツラー叢書『ハラー』二〇頁にも一部引用されている。

当時の英詩の「詩興や哲学的省察さらに道德的情操」については、註(90)参照。

(15) 作品集(註(3))第九巻、二六九頁。

(16) 作品集(註(3))第九巻、二六九頁。

(17) 作品集(註(3))第九巻、二七〇頁。

「ハラーの「アルペン山脈」の構造と言葉」(註(4))一〇八頁には、話題の「簡潔」や「凝縮」や「緊密」の問題が、「言葉の濃密化(Verdichtung der Sprache)」を軸として纏められており、この第一段階ハラーに続き、第二段階ゲーテ、そして究極の第三段階ヘルダーリンへと論展開している。確かに抒情性の表出という点においてはこれで十分かも知れないが、但し本論の関心的たる抒情思想詩(Gedankenlyrik)を念頭に置く限り、同時に第一段階ハラー、第二段階シラー、円熟の第三段階ヘルダーリンと言う、「思索欲」と「重厚な詩作」の発展史の方も無視でき得ない。しかも実はこちらの方こそ当面の「新たな詩作」には縁が深く、その本質をなすと考えられる。

(3) 「内なる人間」

(18) メッツラー叢書『ハラー』(註(3))五四頁には、ゴットシェートが『批判的詩論の試み』第三版(一七四二年)で、「ハラーの詩歌の晦渋さ(Dunkelheit)に対し、若干の隠微な当て擦すり(einige versteckte Seitenhiebe)を成し、この結果ポークトマーの論文『シルトンの「失楽園」における文体について』(一七四二年)で、「瑣末な粗探し(Kleinliche Beckmesserei)」と批判された経緯が紹介されている。

(19) メッツラー叢書『ハラー』(註(3))五三頁。

ブライティンガーの『批判的詩論』(一七四〇年)でハラーの詩歌は、格別に範例として引き合いに出される。このチュエリヒの文芸批評家は、

詩的絵画、命令法の使用、分詞構文、形容詞の度重なる使用を称え、所々に見られる心揺り動かす文体 (die herzzührende Schreibart) に驚嘆している。

「心揺り動かす文体」に関しては、「情操」(註(12))における「感動」(註(11))を参照。

- (20) 『アルペン山脈』第三八節の第三七五句(註(2))『ハラー詩選』一八頁つまり初版の第三七節の第三六五句(註(10))『ハラー選集』二二八頁に出て来る「竜涎香の薫り(Ambradämpfen)」などに、ハラー自身も後年『スイス詩歌の試み』第十一版(一七七七年)所収『アルペン山脈』の端書きにおいて「なお幾多のローエンシュタイン風趣味の痕跡(noch viele Spuren des Lohensteinischen Geschmacks)」(註(2))『ハラー詩選』三頁を正直に認めている程であり、その初期詩歌「朝の思慕」(註(13))の第二節から第四節にかけてはこの「痕跡」の宝庫である。

五 天は自ら彩る、紫衣と碧玉でいて

一一 黄灰毛馬の群雲は焔めく紅玉の輝きなし、

一五 百合の竜涎香の薫りは、私達の喜びに生氣を与える、

一六 繊細な玉葉の繻子灰色に。

(註(10))『ハラー選集』三頁

更に南大路振一著『十八世紀ドイツ文字論集』(三修社、一九八三年)所収『一七二〇年代のゴットシエートとスイス派』(一九七四年)を参照すると、『理性に従い叱責する女性たち』第一部の第三十四篇(一七二五年八月二十二日付)でゴットシエートは、スイス派の『画家談論』(一七二一年一—二三三年)第二部の第一篇所収「喜びの国」(これはボードマーにより執筆された)の描写表現をとらえ、「芳香の」賦香料や乳香や没薬の薫り(一五頁)などに、実はこれを書いた宿敵ボードマー自身が「詩人ノイキルヒを笑い草にする大仰な表現(hochgehobene Redens-Arten)」(一六頁)を指摘している。

因みにゴットシエートが『ノイキルヒ詩集への序文』(註(4))を物した『ノイキルヒ』(一六六五年—一七二九年)は、ホーフマンズヴァルダウ(一

六一七年—七九年)やローエンシュタイン(一六三五年—一八三年)の文体を一旦は模倣していたのであるが、…しかし明晰かつ冷静への転身を体験し、啓蒙(Aufklärung)の時代と文体とを既に裏書きする新たな音調で、昔日には喝采に唳かされていたと告白した」と、クライン著『ドイツ抒情詩の歴史』(初版一九五七年)増補再版(一九六〇年)一八九頁にて紹介されている後期バロック詩人である。

- (21) 作品集(註(3))第九卷、一六二頁。  
(22) 作品集(註(3))第九卷、一六四頁。  
(23) 作品集(註(3))第九卷、一六三頁。  
(24) 作品集(註(3))第九卷、一六三頁以下。  
(25) 作品集(註(3))第九卷、一六四頁。

#### (4) 「自然の宝庫」

(26) 『ハラー詩選』(註(2))一五頁。『ハラー選集』(註(10))二六頁(初版、第三〇一句/第三〇三句—第三〇四句)。

まずハラーが着眼した峠の頂は、後述するゲーテの手稿で「峰白きゴットハルトよ、あたかも創造という偉大なる思想の各々を前にするが如く」(註(94))と語られる様に、山岳アルペンの峯を代表する所である。此所は「君知るや…」(ゲーテ『ミニヨンの歌』冒頭。註(3))作品集、第七卷、一四五頁)と唱導される程ドイツ人に憧憬の感情を目覚めさせないけれども、他方イギリス人にはこの様な「霊峰アルペン(An Alp)」が正に「イタリアの蒼穹(skies Italian)」と並び称されるほどに強い憧れの対象たり得たのである。

五 だが私は時折り、憧憬を感じるのだ、

イタリアの蒼穹へ、そして内なる熱望を抱くのだ、

玉座の如き霊峰アルペンに坐らんと。

(キーツ『幸いなるかな英国ノ…』一八一七年、第五句—第七句。英独対訳レクラム文庫『英国ロマン派詩集』一九八〇年、三三三頁)

(27) 『ハラー詩選』(註(2))一七頁。『ハラー選集』(註(10))二八頁(初版、第三五四句)「不可思議の作品(Wunderwerk)」。

- (28) 『ハラー詩選』(註(2))一九頁。『ハラー選集』(註(10))三〇頁(初版、第三九七句―第四〇〇句)「寶石の岩盤は、幾千もの色彩戯れる所で、…」(第三九八句以下は変更なし)
- (29) 『ハラー詩選』(註(2))二二頁。対応する初稿の第四四節(註(10))「ハラー選集」三二頁には未だ明確な階級意識が現われていない。
- (30) 『ハラー選集』(註(10))四頁(第四一句)。
- (31) 『ハラー選集』(註(10))四頁(第四八句)「一匹の虫虻の誉め言葉」。
- (5) 「黄金時代」
- (32) ヘルダーリン全集(註(13))第二卷、九二頁。『パンとぶどう酒』第四節、第五句。
- (33) 『観察日記』(註(10))第一部の三六八頁には、一七七二年ズルツァー著『美術の理論』をハラーが論じた折テオクリトス(前三二〇年―前二四五年頃)の牧歌に触れ、「但し(良き)趣味がこの牧歌詩人には欠けていた。粗野な牧人は歌われるに値しなく(Grobe Hirten verdienen nicht besungen zu werden.)」と評した記事が載せられている。
- (34) 『ハラー詩選』(註(2))二二頁。『ハラー選集』(註(10))三三頁(初版の第四八節)。
- (35) 『ハラー詩選』(註(2))三頁。『ハラー選集』(註(10))一七頁にある初版冒頭第一節は、『スイス詩歌の試み』再版以降で第二節とされるが、その第十一版に至り第二節冒頭四句は変更される。因みに新たな加筆ながらも再版の第一節では、その後の版と冒頭四句が異っており、当四句はヒルツェル編『ハラー詩集』(註(2))三〇〇頁で「異本照合」に際して引用されている。
- (36) ヘーシオドス『歌章』(トイブナー古典叢書一九一三年)複製一九五八年、六〇頁―六一頁。和訳は廣川洋一著『ヘシオドス研究序説』(未來社、一九七五年)四〇四頁より。  
類似の「黄金時代」は、オウイディウスの『変身物語』第一書の第八九句―第一二二句(トゥスクルム古典叢書、一九五二年、一〇頁―一二頁)にも見られ、その第一〇九句から第一二二句にかけて、「やがて、大地は、耕されもしないのに、穀物をさえもたらずであった。田畑は、掘り返されないで

- も、豊かな穂先で白く光っていた。乳の河が流れるかとおもえば、甘露オクセルの流
- れが走り、青々したひいらぎからは、黄金色の蜜がしたたっていた」(岩波文庫『変身物語』二巻本、中村善也訳、一九八一年/八四年、上巻、一六頁)と語られている。恐らくハラーが『アルペン山脈』第二六句(註(38))で念頭に置いているのは、この『変身物語』の箇所であろう。
- (37) ヘーシオドス『歌章』(註(36))七二頁。前掲和訳、四二頁。
- (38) 『ハラー詩選』(註(2))四頁。『ハラー選集』(註(10))一七頁(初版の第二節)は語句の変更はあるが大意に相異なし。  
なお「蜜」と「乳」に関しては、『変身物語』第一書の第一―一句以下(註(36))、および「乳と蜜の流れる地(カナン)」とある『ヨシユア記』第五章の第六節を参照(日本聖書協会『旧約聖書』一九五五年、三〇六頁)。
- (39) 『ハラー詩選』(註(2))四頁(第三二句―第三四句)/五頁(第三五句―第四〇句)。
- (40) 『ハラー選集』(註(10))一七頁(初版の第三節)「汝ら自然の高弟よ、生粋の真正な賢者よ、…」(第二二句以下)。
- (6) 「幸福な乏しや」
- (41) 『ハラー詩選』(註(2))五頁。『ハラー選集』(註(10))一八頁(初版の第四節)もほぼ同じ語句。
- (42) 『ハラー詩選』(註(2))五頁。『ハラー選集』(註(10))一八頁(初版の第五節)。
- (43) 作品集(註(7))第四卷(第四部)三六七頁。「ラオコオン」第十七章、註(7)和訳二二頁。
- (44) 『ハラー詩選』(註(2))五頁。『ハラー選集』(註(10))一八頁(初版の第六節冒頭)。  
「幸福な乏しや(Glückseliger Verunst)」(決定版、第七節、第六一句)と云う用例は、内実こそ異なれハラーの先輩プロクセスに既に見られる。即ちその詩集「神における地上の楽しみ」第一部(一七二二年)の巻頭を飾る『天空(Das Firmament)』第一九句において、これは言わば「幸運な喪失(Glückseliger Verunst)として「よく効く無(helissams Nichts)」を指す(プロクセス『選集』一七三八年、複製写真版一九六五年、四七七頁)。

わが全存在は塵となり、点となり、一つの無となった。

そして私は自分自身を喪失し、このことが私を突然打ちのめした  
絶望が、完全に動揺したわが胸を脅した。

然れども、おおく効く無よ、幸運な喪失よ、

二〇 遍在する神よ、汝において私は自己を再び見出したのだ。

此所では但し専ら自己の圈内しか話題とならず、詩想が空無を孕み至福を  
目指していない。

(45) 『パンとぶどう酒』第七節、第二三句。全集(註(13))第二巻、九四頁。

(46) 希羅対訳『新約聖書』ヴェルテムベルク聖書協会、一九三〇年、八頁。

(47) 『ポーラ詩選』万人文庫七六〇、一九二四年／一九七五年、二三頁。

英詩において『アルベン山脈』のような「幸福な乏しさ」(註(44))が明  
示されるには、恐らく『抒情歌謡集』(Lyrical Ballads)【初版一七九八年  
／再版一八〇一年／第三版一八〇二年】を待たねばならぬであろう。就く当  
詩集に収められたワーズワスの自然讃歌、例えば『ワイ川河畔再訪の

詩行』第九一節(初版、第九二句)に言う「人間本性の静かで悲しい音色  
(The still, sad music of humanity)」(註(26))レクラム文庫版『英国

ロマン派詩集』七六頁)と響き合う「取るに足らぬ田舎の生活(Humble  
and rustic life)」(『抒情歌謡集』序文。レクラム文庫『十九世紀英文学』  
その一、一九八三年、三〇四頁)こそ注目し、後に「幼年期の回顧より  
不死を知る頌歌」第三節(第四節(一八〇三年頃)にて、「汝、幸福な牧童

よ(thou happy Shepherd-boy)、汝ら至福なる人々よ(Ye blessed  
Creatures)」(右『英国ロマン派詩集』一四二頁)と、ワーズワスが歌う素  
地が此所に確められるのである。

(48) 『トムソン詩歌作品集』オクスフォード大学出版局、初版一九〇八年、第  
六版一九七一年、一〇五頁(夏)第一四三三句。

(49) 『トムソン詩歌作品集』(註(48))一〇六頁。

(50) 『トムソン詩歌作品集』(註(48))三九二頁。

類似の国威高揚は古代ローマ帝国の詩人ウエルギリウスの叙事詩『アエネー  
イス』第六書の第七九二句以下(『詩集』ヴァイトマン社刊、第二巻、一九  
一二年(第一三版)複製一九七三年(第一四版)三〇一頁)にもある。

アウグストゥス(オクタウィアヌス)は、…黄金時代(aurea

saecula)を、

昔日(クロノス)サートウルヌスが君臨せし地ラティウムに再建し、  
(北アフリカ)のガラマンテースの国やインドをも越え、  
七九五 帝国(imperium)拡張するであろう。 …

このしばらく後の第八五二句に、「汝ローマ人よ、帝国の人民支配を心に銘  
記せよ(in regere imperio populos, Romane, memento)」(右『詩  
集』第二巻、三〇六頁)が来る。大英帝国の原型が此所にあり、「イギリス  
国会の議員たちは、できるだけ古代ローマ人に自分たちを擬えてみるこ  
がお好きである」と、『哲学書簡』(初版一七三四年)その八でヴォルテール  
の述べたことも虚でなからう(『雑録集』プレヤード版、一九六一年、二〇  
頁。岩波文庫『哲学書簡』林達夫訳、一九五一年、四六頁)。この点は更に  
産業に関しても、『哲学書簡』その一〇(右『雑録集』二八頁。右和訳、六  
二頁以下)で巧みにこう語られている。

こういったことはすべて、イギリス商人に無理もない自尊の風を生ぜし  
め、その結果これも必ずしも見当はずれではないが自らをローマ市民に  
擬するに至らしめたのだ。…(六二頁／六三頁) …商人はその国  
を富み栄えしめ、その事務室からスライトやカイロに指図を与えて世界  
の福祉に貢献している連中なのである。

(51) レオナルド『プロテスタントの歴史』(クセージュ文庫四二七)一九五〇年、  
九〇頁。白水社版・文庫クセージュ一四、渡辺信夫訳、一九六八年、一一一  
頁。

当時十八世紀の証言で謹厳なハララーを物語るものに、オラス・ベネディク  
ト・ンシュール著『アルベン旅行(Voyage dans les Alpes)』の次の件  
があり、近藤等『ハラールとルソーによる文学への山岳美の導入』(早稲田商  
学、第一五五号、一九六一年、一九頁―四三頁所収)三〇頁―三二頁にこう  
引用してある。

一七六四年に、私はハララーのもとを訪れた。その時ハララーは、ロシユの  
岩塩鉱の監督をしていた。しかし私は、その二、三年前から、すでにハ  
ラーとは交渉を持っていた。幾度か彼のもとを訪れてもいた。そのたび  
に、彼は私を親切に迎えてくれた。それにしても、今度の訪問は、こと  
さらに彼を喜ばせたらしかった。彼自身のいうところによると、彼は誰

かに会って、彼の研究していた問題について語り合いたいと、しきりに思っていたところだった。

ハラーは私の顔を見ると、自分の仕事をことごとく中絶した。おかげで私は、滞在していた二週間というものを、引きつづき彼と色々話し合うことができた。その時私は二十四才だった。そして、ハラーのようなすばらしい男に、その時まで出会ったことはなかった。その後も、ほとんど出会ったことはない。この偉大な人間が私に呼びおこしたのは、賛嘆とか敬意とかいう程度のものでなく、ほとんど崇拜に近い感情だった。彼の思想には、何という多様さと、豊かさ、深さと、かがやきとがあるのだらう。

彼の会話は、火のように熱して、相手を眩惑し疲れさせるが、同時にまた、他の場合には、愛情に満ちた深い情熱が相手の心を暖め、相手の心を彼の高さにまでも高めもする。彼が自分の優越を感じたとしても、(どうして、彼がそれを意識しないでいることがあるのか) 彼はすこしも相手の自尊心を傷つけたりはしない。彼は相手の反論を忍耐強く聞き、その疑問を一つ一つ解きほぐしてゆく。彼が断乎たる強い口調になるのは、話が良俗や宗教を傷つけるような問題に触れた場合だけなのだ。

この一週間の滞在は、私の魂に、生涯、消しがたい思い出を残した。ハラーとの会話は、私の心に、学問と、善なるものと、誠実なるものへの、無限の情熱を吹きこんでくれた。

夜になると、昼の間に彼が云ったことを一人瞑想して、ノートをとった。

(7) 「楽園フランス」

(52) サン・ジュスト「一七九〇年十一月十三日ルイ処刑に関する国会演説」。

『選集』一九六八年、八〇頁。

(53) ナートラー『ドイツ文学史』再版(一九六一年)一八二頁。

(54) 『ハラー詩選』(註(2))一四頁。引用四句に相当する初版の第二九節中間部(註(10))『ハラー選集』(二五頁以下)には「テル」も「楽園フランス」も物語られていない。またハラーは詩歌中の「楽園フランス」が乞食を養う」と言う情報が、英国人パーネットの旅行記(一六八五年―一六八六年)に既に見

られる旨を自ら註記している(註(2))『ハラー詩選』(一四頁)が、但し人名のみで、書名は挙げていない。

同様フランス王朝文化との対比で自国スイスを賞揚した当時十八世紀の文学作品として忘れることのできないものが、ルソーの書簡体長篇小説『新エロイズ』(一七六〇年)であり、殊にその第一部の書簡二三(フレヤード版ルソー全集、第二巻、一九六四年、七六頁以下)は、話題の『アルペン山脈』との関連で興味深い記述を、高ヴァレ地方(Le Haut-Valais)について残している(白水社ルソー全集、第九巻、松本勤訳、一九七九年、七五頁―七八頁)。これに関して右フレヤード版ルソー全集のギュイヨン(Guyon)註解(第二巻、一三八七頁/一三九〇頁)には、次の説明が附されている。

一九三〇年シャンベリー刊『十八世紀および十九世紀のフランスとイギリスにおけるアルペン文学(一六八五年―一八六八年)』と題された研究書にて、クレール・エリアンヌ・アンジェル(Engel)は、重要な章をルソーにあてている。…(一三八七頁/一三九〇頁)…アルペン文学については、クレール・エリアンヌ・アンジェルの前掲書を参照。アンジェルはハラーの(ルソーへの)影響を明るみに出した。ハラーの詩歌『アルペン山脈』は一七五〇年に(仏語へと)訳され、直ちに大成巧を収めた。…

更に当註解では、ルソーにとり高山とは岬々たる山岳ではなく、むしろ「アルペン山脈前山地帯(Préalpes)」(一三九〇頁)が主眼であったとの指摘を紹介しているが、とにかくルソーは話題の書簡でこう語っている。

ときには巨大な岩が頭上に廃墟のように垂れ下がっていました。ときには高い山頂から滝が厚い水しぶきで私を浸しました。ときには太古不滅の奔流が私の両脇に深淵を開いていて、とうとう奥底まで眼をやることができなりました。密林の暗闇に迷いこんだこともありましたが、窪地から抜け出ると不意に気持のいい牧場が眼をませてくれました。そんなこともありました。…(原典七七頁/七八頁、和訳七五頁/七六頁)…ここでした。私が清澄な大気につつまれながら、自分の気分が変化し、あんなに長いこと失っていた内心の平和が回復した真の原因を明白に見てとったのは。じつさい、空気が清澄で微細な高山にいますと、呼吸がより楽になり、体がより軽く、精神がより晴朗に感じられま

す。これはすべての人が注目しているわけではありませんが、みんな一様に感じとる印象なのです。そこでは快樂は熱を減じ、情熱は穏やかに なります。そこでは省察は、われわれの眼を打つまわりの事物と釣合つ た、なにかしら偉大で崇高な性格を帯び、刺戟的で官能的なところのい ささかもない、なにかしら静かな悅樂を帯びるのです。人間たちの住み かから高く登ってゆくと、低劣な、地上的な感情はすべてそこに打ち 棄ててゆく思いがし、また天空の域に近づくにつれて、その変わるこ とのない清浄な何ものかに魂が染まる思いがします。そこでは人は憂愁な くして重々しく、平穩にして無感動ではなく、存在すること、思考する ことに満足しています。激しすぎる欲望はすべて鈍くなるのです。欲望 は、欲望を苦痛たらしめる鋭い切っ先を失い、心の奥に軽い甘美な感動 だけをとどめておきます。このように、幸福な風土 (un heureux climat) は、よそでは苦悶をもたらす情熱を人間の至福 (la félicité de l'homme) に役立たせるのです。… (原典七八頁／八〇頁、和訳七 六頁／七八頁) … 彼らの無欲よりはそれは徹底して、私は旅の あいだじゅう一パタゴンも投ずる機会を得ませんでした。じっさい、主 人はその入費の代金を受け取らない、召使も奉仕の代金を受け取らない、 そして乞食が一人も見つからないような国で、お金にどんな使いみちが ありましよう。とはいえ高ヴァレ地方ではお金はないそう珍しいものな のです。が、そのために住人たちは気楽なのです。というのも、ここに は産物が豊富にあつて、それでいて外への出口をもたない内では贅沢な 消費がない、山村の農民たちは労働を喜びとしているので、豊かであつ ても労を惜しむようにはならないのです。もし彼らももっと多くのお金 をもつようなことがあれば、必ずやもっと貧乏になりましよう。彼らに はそのことを感知する知恵があつて、国内に金鉱 (mines d'or) があ るのですが採掘は禁じられています。

(55) 『ハラー詩選』(註(2))一五頁、『ハラー選集』(註(10))に六頁(初版 の第二九節末尾)はこうなっている。

老人は誇る、和合の力を、そして一致した諸力は

また弱国スイスにも幸福の翼を結え付けると。

後にヘルダーリンの詩歌『シュヴァイツ州』(一七九一年)では、共和国ス

イスがフランス革命(一七八九年以降)の現実と睨み合わされ、旧封建体制 打倒と新たな市民社会建設の範例となる(註(13))全集、第一卷、一四五頁、 和訳全集、河出書房新社、一九六六年・一九六九年、第一卷、一七〇頁、高橋英 夫訳)

七一 かつて蒼ざめた暴君が僕たちに空しくも温順なへつらいの勇気を命じ  
ようとした

七三 正義の、仮借なき復讐は、起ちあがったのだ――

七八 自由のうつくしい戦いに登場したヴァルターやテルの仲間たちよ、

七九 神々しい自由の邦(Land, der göttlichen Freiheit)よ、…

(56) 『ハラーの「アルペン山脈」の構造と言葉』(註(4))九〇頁に引用。こ の他ムラルトよりの引用は、ヒルツェル編『ハラー詩集』(註(2))評伝九 五頁以下にも見られる。

(57) 『ハラー選集』(註(10))八〇頁。

(58) シャトブリアン『諸革命に関する試論・キリスト教精髄』(プレヤード 版)一九七八年、一九〇頁。

同一九〇頁で著者は更に『アルペン山脈』第一五節(初版の第一四節)で 述べられたこと、つまり「彼が彼女を愛し、彼女が彼を、これが婚約締結を 成し、結婚はしばしば両者の誠実だけで固められる」(註(2))『ハラー詩選』 九頁、第一四二句以下/註(10)『ハラー選集』二二頁、第一三三句以下

との筋に關し、山岳アルペンのスイス人から聞いた話として、そのスイス人 の少年時代には若者と処女との婚前交渉が普通であったとの旨を伝えている。

### (8) 「苦吟する詩人」

(59) ブルクハルト『シラー記念講演』(一八五九年)、『講義・講演集』(一八四 四年―一八七七年)再版(一九一八年)三〇頁―三四頁より、『シラー――あ らゆる時期の同時代人』第一部(一七八二年―一八五九年)一九七〇年、四 一五頁―四一八頁に引用。四一七頁。

… 現世における詩歌の使命、即ち「芸術家」。それは恐らく、これ 迄に編まれた最高の綱領なのです。この詩歌は、シラーの哲学著作や

『ドン・カルロス』書簡と並びまして、その分野における誠心誠意の至って強力な証左と呼んで差し支えないのです。

今後ともシラーは、あらゆる抒情詩人の中で唯一無比の存在たるでありましょう。なぜならシラーは強力な浄化された意志を以て、個々の瞬間とか個々の状況を永遠化することを根本から諦観し、プロペルティウスやオウィディウスやバイロンやヴィクトル・ユゴーやゲーテたちが就く偉大である彼の文芸の種類に属してはいないからです。シラーが永遠化しますのは、極めて高貴で威力ある表現様式における情操の全体であります。

ドイツ思想詩の真骨頂ヘルダーリンの抒情表現に未だブルクハルトは通じていない。なぜなら十九世紀はシラーの表現様式を越え更に円熟した成果が生み出されたことに十分気付いていなかったからである。

(60) ヴァイス『十八世紀ドイツ文学におけるアルペン体験』(一九三三年)二六頁より、註(3)メッツラー叢書『ハラー』二七頁に引用。

分別惜性(Versand)の分析作業により、風景は描写されつつ諸々の個物へと解体され得るもの、だが体験された風景の躍動と現実味を写す印象(Eindruck)は再現され得ない。蓋しこのことは、外界の自然が何か内面的に親しみあるものであった後の時代に要請されることになったのであるけれども。

更に右『ハラー』同頁には、ヴァイスの著書二五頁以下より次の言葉も引用されている。

『アルペン山脈』の詩節は、壮大さをくっつきりと描き言葉において崇高な再現であるが、これは或る静止せる対象の、またシュタウブバッハの滝(第三六節)の場合などは或る機械的に動く対象の、理性的感性性を与えられた印象(vernünftige-sinnlicher Eindruck)である。自然を千変万化する諸形式の中に眺める感動した人間の個人的一回限りの観想や体験は、再現されずに、むしろ……

(61) 「汝らの境遇を改善するがよい。……」(改稿後の第一節冒頭四句)は、註(35)に附記した通り、『スイス詩歌の試み』第三版(一七四三年)以降のもので、その四句は再版(一七三四年)で、「ゆけ、空虚な人間たちよ、……」とあり、この再版四句(第一句―第四句)は註(2)ヒルツェル編『ハラー

詩集』三〇〇頁の「異本照合」に引用されている。更に当三〇〇頁には、註(10)『ハラー選集』一七頁にある『アルペン山脈』初版の冒頭四句一魂は自ら幸福をなす。……」が、『スイス詩歌の試み』第一〇版(一七六八年)まで変更されず、再版以降の第二節冒頭四句となり、その決定版たる第十二版(一七七七年)で改稿された旨も示してある。

(62) 全集(註(13))第一巻、九〇頁―九五頁。

(63) 『ハラー詩選』(註(2))七頁。『ハラー選集』(註(10))一九頁(初版の第九節)第九〇句「倦むことなき勤勉(Erdia)に……」。

(64) 『ハラー詩選』(註(2))七頁―八頁。『ハラー選集』(註(10))一九頁―二〇頁(初版の第一〇節―第一一節)。

(65) 『ハラー詩選』(註(2))八頁―九頁。『ハラー選集』(註(10))二〇頁―二二頁(初版の第二二節―第二五節)。

(66) 『ハラー詩選』(註(2))一三頁―一五頁。『ハラー選集』(註(10))二四頁―二六頁(初版の第二五節―第三〇節)。

(67) 『ハラー詩選』(註(2))一五頁―一六頁。『ハラー選集』(註(10))二六頁―二八頁(初版の第三二節―第三五節)。

(68) 『ハラー詩選』(註(2))一七頁―一九頁。『ハラー選集』(註(10))二八頁―二九頁(初版の第三六節―第三九節)。

(69) 『ハラー詩選』(註(2))一九頁―二二頁。『ハラー選集』(註(10))二九頁―三二頁(初版の第四〇節―第四三節)。

(70) 『ハラー詩選』(註(2))二〇頁―二三頁。『ハラー選集』(註(10))三一頁―三四頁(初版の第四四節―第四七節)。

(71) 『ハラー詩選』(註(2))九頁。『ハラー選集』(註(10))二二頁(初版の第二六節)。

(72) 『ハラー詩選』(註(2))二二頁。『ハラー選集』(註(10))三二頁(初版の第四三節以下)。

(9) 『各十行の詩節』

(73) 『アルペン山脈』第三六節(註(2))『ハラー詩選』三六頁の山岳描写が名高い。初版は第三五節(註(10))『ハラー選集』二七頁以下)。

此所では峻厳な山岳が岩壁なす峰々を示し、



森林の大河は迅速に貫き流れ、滝また滝を怒濤なして下る。  
溢れ滾る河川は岩盤の裂け目を縫って突き進み  
して急に激しき威力なしてその岸を越え遙か彼方へと飛沫をとばす。

批評家アディソンが『観察者』(The Spectator) (一七二一年—二二年／一四年) 第四二二号(レクラム文庫『英文学』第五卷)一九八二年、三六二頁以下「雄大(Greatness)」(三六二頁)について論じ、「そのような眺望としては、開けた平原や広大な未開の砂漠、巨大な山塊とか、峨々たる岩肌や絶壁、彼方まで膨んだ海原があり、此所で私達は視界の珍しさや美しさに心撃たれず、むしろこれら幾多の自然の途方もなき作品類に現れる粗削りな威容に心撃たれるのである」(三六四頁)と語ったことが、右に引用したような『アルペン山脈』の詩節にあてはまる。

これに対し次に引くポーブ作『名声の殿堂』(一七二一年) 第十一句以下(註(47))『ポーブ詩選』三六頁)などは、筋書きこそ『観察者』第四二二号に呼応するものの、表現の内実から迫り来るものが少ないと思われる。

私には大地と海原と天空との間に立っているように思われた。  
全被境界がわが眼前に開かれ、  
空中で自ら平衡を保ち、足下には地球が懸かり、  
そこでは山岳が隆起し、回る海原が流れる、

一六 此所には裸の岩肌と空虚な荒野が見えた。  
結局この筋の問題は当時の話題の書ロッキンソ著『崇高論』にゆき着くこと  
になる。例えば本論との関連では『崇高論』第九章の第五節で著者が  
「ホメーロスは何と雄大にその神ダイモニオンなことを描いていることでしょうか」  
(希独対訳レクラム文庫版『崇高論』一九八八年、一三二頁)と称賛し引用し  
ている『イリアス』第五歌の第七七〇句以下(トゥスケルム古典叢書『イ  
リアス』一九六一年、一八四頁)が注目し値すると思われる。

そして、物見台上に坐った人が、葡萄色をした海原を眺めやうて、はるか  
にかすんでその両眼に見えるかぎりの、そのくらの距離を、一飛びに  
して、神々の高くない馬どもは、駆つていった。

(筑摩書房『世界古典文学全集』第巻、一九六四年「ホメーロス」  
所収『イリアス』呉茂一訳、七〇頁)

この背景には地中海における「彼方まで膨んだ海原」が控えている。  
更にポーブと並ぶ当時の英国詩人トムソンの『四季』(註(48))に目を向  
けると、その『夏』(一七二七年)には右ハラールの『アルペン山脈』第三六  
節ほど「雄大」ではないけれども、例えば印象深い「滝 (fall of water)」  
(第五八七句)の描写(註(48))『詩歌作品集』七五頁)が見られる。

五九〇 ならだかに緩い勾配の崖の縁まで溢れる川水は  
清らかに静かに流れる。だが崖縁で皆諸共に  
激しい一筋の奔流となり (In one impetuous torrent)、絶壁を下  
に

轟音を立てて瀑布なし、土地一帯を震わせる。

(『夏』第五九〇句—第五九三句)

連邦スイス共和国の霊峰アルペン山岳がハラールの詩句に保証する程のものを、  
平坦なブリテン王国の自然がトムソンの詩句に約束しないのは、いたし方な  
いことである。

(74) 『ハラール詩選』(註(2))三頁。

(75) マクミラン英文古典叢書『人間論』(初版、一八九五年)一九一九年、二  
頁。平凡社版『世界名詩集大成』第九卷、一九五九年、『人間論』(上田勤訳)

一五三頁。

(76) 『人間論』(註(75))六頁。和訳、一五五頁。

(77) 右『人間論』一七頁。和訳、一六〇頁。

(78) 右『人間論』四五頁。和訳、一七四頁。

(79) 『ハラール詩選』(註(2))九頁。『ハラール選集』(註(10))二二頁(初版の  
第一四節末尾)。

(80) 『ハラール詩選』(註(2))二二頁。対応する初版の第四四節の結句(註  
(10))『ハラール選集』三一頁)は、次のようになっている。

して字々汝等、自然のみが幸福になし得ることを。

(81) 『ハラール詩選』(註(2))二二頁。『ハラール選集』(註(10))三三頁(初版  
の第四七節)。

この箇所が、スイス文学研究会編『スイス詩集』(早稲田大学出版部、一  
九八〇年)一二六頁—一五五頁所収『アルプスの山々』(宮下啓三訳)の一  
五四頁—一五五頁では、

波立つ欲望の洪水で君らが溺れずにすむのは、  
理性が純真な教訓の力で堰止めているからだ。

と和訳されているが、これは「理性 (die Vernunft)」の「充溢」(註 38) を「悪徳の源泉」(註 41) と看做すハラールの姿勢を見損ったための誤訳であろう。

(82) 『ハラール詩選』(註 2) 四九頁。「人徳の虚偽」第二五五句―第二五六句。話題の「探求しつつ深く物思いに沈潜し」と言う内省する人間の自然本性と、外界から迫り来る大自然の本性とが眼の当に邂逅するには、ヘルダーリンの詩歌「帰郷」(一八〇一年)冒頭「コンアルペンのさなかは (Drin in den Alpen) …」(註 13) 全集、第二巻、九六頁) を待たねばならないであろう。

「コンアルペンのさなかは、夜も雪白く 雲かかる。  
そは 喜びを生みつつ 暗き谷の顎を覆う。  
その深みをめざして山気は戯れつつ 躍りくだり、

…  
そこでは 年と聖なる時間と日とは より大いなる無限のうちに育ち、  
他の場所におけるよりいっそう大胆な列序と交替をもっている。

…  
いまや谷底深く村もまた目覚め 怖れげなく  
高さものに心開いて 嶺々を仰ぎ見る。

…  
始源の水が稲妻のように墜ちかかれば、生育を予感して  
大地はゆらぎ 飴はあたりにひびきわたる、

…  
〔帰郷〕第一節、手塚富雄訳、註(55) 和訳全集、第二巻、一一八頁  
更に一八〇一年三月下旬ヘルダーリンの弟宛書簡二三三には、「ここ生命の  
この無垢の中、ここ白銀の霊峰アルペン山岳の麓にて、… 殊のほか宗教  
と僕は取り組んでいる」(註 13) 全集、第六巻、四二〇頁) と記されている。

(10) 「内的完全性の発展」

(83) 『純粹理性批判』初版(一七八一年) 四七四頁/再版(一七八七年) 五〇

二頁。プロイセン<sup>プロシヤ</sup>学士院版カント全集(一九〇二年以降)に拠る作品集(写真複製版) 一九六八年、第三巻、三二九頁。

(84) プライティンガー『批判的詩論』(写真複製版一九六六年) 第二巻、四〇七頁より、レッシング『ラオコオン』第十七章(註 7) 作品集、第四部、三六八頁) に引用。和訳『ラオコオン』(註 7) 二二四頁。

(85) ホラーティウス『詩論』第三六一句。トゥスクルム古典叢書羅獨対訳『全集』一九五七年、第二部、二五〇頁。

(86) 『ラオコオン』第十七章(註 84) 原典三三六頁) 和訳、二二二頁。  
詩人の表象は、単に平明・平易でこと足るものではない。散文家ならばそれで十分である。ところが、詩人の念願はこうである。すなわち、われわれのむねに呼びおこす観念を生彩あるものにして、その観念のあまりの速さのためにわれわれは、対象の真の感覚的印象を感じているような気持になり、この幻惑の瞬間には、詩人の用いる手段すなわち言葉をもはや意識しなくなる、こういうところまで持っていくことである。さきに述べたいわゆる詩的絵画の説明も、要するにこういうことだったのである。

(87) マルモンテル『フランス詩論』第二巻、五〇一頁より、『ラオコオン』第十七章(註 84) 原典三七〇頁) 和訳、二二〇頁に引用。

(88) 『ラオコオン』第十七章(註 84) 原典三六八頁) 和訳、二二四頁―二二五頁。

(89) 『ゲッティンゲン学報』一七六六年、第二巻、九〇三頁より、『ハラールの「アルペン山脈」の構造と言葉』(註 4) 一〇二頁に引用。

(90) 『ハラール詩選』(註 2) 一〇三頁以下。  
「風景描写」と「理念の詩作」の一体化と言っても、これはポーブが『批判論』(一七二一年)で言う様な「諸法則 (rules)」(第八八句)により「秩序づけられた自然 (Nature methodised)」(第八九句)という意味(註 47) 『詩選』六〇頁)ではなく、むしろトムソンが『冬』再版(一七二六年)の序文で述べている内観と外界との親密性を指すと考えられる。

私は、自然造化 (works of Nature) にも増して、心を高め樂しませ、詩興 (poetical enthusiasm) や哲学的省察 (philosophical reflection) などに道德的情操 (moral sentiment) を覚醒するにやぶやか

でない主題を知らない。

(註(48)『詩歌作品集』二四〇頁以下)

但し「省察」とか「情操」の實質に關し独英の相違は見逃せず、随想風なヒュームの著作が「哲学」になるのは異なり、正に堅固な學術体系なして「人間理性」が「建築術的 (architektonisch)」(註(83))な展開をなす筋へと、ハラールの詩作は志向していると思われる。

(91) 『ラオオン』第十七章(註(84)原典三六七頁)和訳、二二二頁—二二三頁。『ハラール詩選』(註(2))一八頁(第三九節)。「ハラール選集」(註(10))二九頁(初版の第三八節)。

初版には複数名詞の屬格語尾に n が付くスイス方言ドイツ語の例が、第三七二句「雜草の (der Pöbel-Kräutern)」と第三七七句「葉の (der Blättern)」に見られる。因みに同じ方言の複数名詞屬格形は、初版『スイス詩歌の試み (Versuch Schweizerischer Gedichten)』(註(3))メッツラー叢書『ハラール』(三三三頁)の「詩歌の (Gedichten)」にも確認でき、更にその第三版序文(註(2))ヒルツェル編『ハラール詩集』(二四六頁)には、當の屬格形に關しハラール自身の説明がある。

(92) 『ハラールの「アルペン山脈」の構造と言葉』(註(4))九三頁。なお引用の第三八〇句(初版の第三七〇句)は、註(2)『ハラール詩選』一八頁と註(10)『ハラール選集』二八頁を参照。

(93) 作品集(註(3))第二二卷、一三頁。中央公論社「世界の名著」第三八卷(一九七九年)共同訳「ヘルダー・ゲーテ」所収『ドイツの建築』(一七七年)三〇九頁。

「内的必然 (notwendig) と眞実によって君は構想し、造形 (bildend) のさなから生ける美があふれ出たことだろう」と、此所でゲーテが語る時の前提条件が、「もし、君が、測る (messen) よりも実感 (fühlen) を重んじ、君も驚嘆している質量の精神 (Geist der Massen) にすなおに打たれていたら」(右記原典八頁、和訳三〇四頁)という点が興味深い。

身近な兄弟の作品でも、それがあまりに崇高なときは、目で確かめることなど、人間精神にできることではない。ただ頭をたれてあがめるしかないのだ。探究的觀照 (forschendes Schauen) につかれた私の目が、たそがれによってやさしくいたわられたことが何度あったことだろう。

そんなとき、無数の部分が全体の質量にとけこんで、それが單純巨大な姿となって私の魂の前に立ち、私の力は享受と認識のために歓喜に満ちてひろげられるのであった。(右原典十一頁、和訳三〇七頁)

(94) アルテミス記念版『作品、書簡および對話集』第十三卷、一九五四年、五四頁—五五頁。

当手稿「一七七五年エルヴィンの墓への第三次巡礼」の「祈り」は、本論冒頭の「要旨」草稿を予め手にされた喜多村得也教授(昭和大学)の御教示による。

(95) 作品集(註(3))第九卷、三二六頁。『詩と眞実』第八書。

(平成三年九月三十日受理)  
(平成三年十二月二十七日發行)

HALLERS „ALPEN“(1729) IN UMRISSEN

Beglückte güldne Zeit, Geschenk der ersten Güte, ...	RUB. <u>S.4</u>	21
Nicht, weil freiwillig Korn die falben Felder deckte Und Honig mit der Milch in dicken Strömen lief; ...		25 26
Nein, weil der Mensch zum Glück den Überfluß nicht zählte, Ihm Notdurft Reichtum war und Gold zum Sorgen fehlte!		29 30
Ihr Schüler der Natur, ihr kennt noch güldne Zeiten! ...		31
Die Wolken, die ihr trinkt, sind schwer von Reif und Strahl; Der lange Winter kürzt des Frühlings späte Wochen, Und ein verewigt Eis umringt das kühle Tal; Doch eurer Sitten Wert hat alles das verbessert, ...	<u>S.4</u> <u>S.5</u>	36 37 38 39
Wie Tell mit kühnem Mut das harte Joch zertreten, Das Joch, das heute noch Europens Hälfte trägt; Wie um uns alles darbt und hungert in den Ketten Und Welschlands Paradies gebogne Bettler hegt; Wie Eintracht, Treu und Mut, mit unzertrennten Kräften, An eine kleine Macht des Glückes Flügel heften. ...	<u>S.5</u> <u>S.14</u> <u>S.14</u> <u>S.15</u>	295 296 297 298 299 300
Dann hier, wo Gotthards Haupt die Wolken übersteiget Und der erhabnern Welt die Sonne näher scheint, Hat, was die Erde sonst an Seltenheit gezeuget, Die spielende Natur in wenig Lands vereint; ...		311 312 313 314
Dort ragt das hohe Haupt am edlen Enziane Weit übern niedern Chor der Pöbel-Kräuter hin; Ein ganzes Blumen-Volk dient unter seiner Fahne, Sein blauer Bruder selbst bückt sich und ehret ihn. Der Blumen helles Gold, in Strahlen umgebogen, Türmt sich am Stengel auf und krönt sein grau Gewand; ...	<u>S.15</u> <u>S.18</u>	381 382 383 384 385 386
Der schimmernde Kristall sproßt aus der Felsen Klüften, Blitzt durch die düstre Luft und strahlet überall. O Reichtum der Natur! verkriecht euch, welsche Zwerge: Europens Diamant blüht hier und wächst zum Berge! ...	<u>S.18</u> <u>S.19</u> <u>S.19</u> <u>S.21</u>	407 408 409 410
Der Strom fließt schwer von Gold und wirft gediegne Körner, Wie sonst nur grauer Sand gemeines Ufer schwärzt. Der Hirt sieht diesen Schatz, er rollt zu seinen Füßen, O Beispiel für die Welt! er siehts und läßt ihn fließen. ...		437 438 439 440
Die ihr das stille Glück des Mittelstands verschmähet Und mehr vom Schicksal heischt als die Natur von euch, Die ihr zur Notdurft macht, worum nur Torheit flehet: O glaubts, kein Stern macht froh, kein Schmuck von Perlen reich! ...		445 446 447 448
O selig! wer wie ihr mit selbst gezogenen Stieren Den angestorbnen Grund von eignen Äckern pflügt; ...	<u>S.21</u> <u>S.22</u>	481 482
Der seinen Zustand liebt und niemals wünscht zu bessern!		489

konnte. Sie sagen, daß es also mit den Freuden des Himmels sei, und wie oft bin ich zurückgekehrt, diese himmlisch-irdische Freude zu genießen, den Riesengeist unsrer ältern Brüder in ihren Werken zu umfassen. Wie oft bin ich zurückgekehrt, von allen Seiten, aus allen Entfernungen, in jedem Lichte des Tags zu schauen seine Würde und Herrlichkeit! Schwer ist's dem Menschengestalt, wenn seines Bruders Werk so hoch erhaben ist, daß er nur beugen und anbeten muß. Wie oft hat die Abenddämmerung mein durch forschendes Schauen ermattetes Aug' mit freundlicher Ruhe geletzt, wenn durch sie die unzähligen Teile zu ganzen Massen schmolzen, und nun diese, einfach und groß, vor meiner Seele standen und meine Kraft sich wonnevoll entfaltete, zugleich zu genießen und zu erkennen! Da offenbarte sich mir, in leisen Ahnungen, der Genius des großen Werkmeisters. ... (S.11/S.13) ... Die Kunst ist lange bildend, eh' sie schön ist, und doch so wahre, große Kunst, ja oft wahrer und größer als die schöne selbst. Denn in dem Menschen ist eine bildende Natur, die gleich sich tätig beweist, wann seine Existenz gesichert ist. Sobald er nichts zu sorgen und zu fürchten hat, greift der Halbgott, wirksam in seiner Ruhe, umher nach Stoff, ihm seinen Geist einzuhauchen. Und so modelt der Wilde mit abenteuerlichen Zügen, gräßlichen Gestalten, hohen Farben seine Kokos, seine Federn und seinen Körper. Und laßt diese Bildneri aus den willkürlichsten Formen bestehn, sie wird ohne Gestaltsverhältnis zusammenstimmen; denn eine Empfindung schuf sie zum charakteristischen Ganzen. ... (S.13/S.14) ... Und von der Stufe, auf welche Erwin gestiegen ist, wird ihn keiner herabstoßen. Hier steht sein Werk, tretet hin und erkennt das tiefste Gefühl von Wahrheit und Schönheit der Verhältnisse, wirkend aus starker, rauher, deutscher Seele, auf dem eingeschränkten düstern Pfaffenschauplatz des *medii aevi*. ...

94)Goethe „Dritte Wallfahrt nach Erwins Grabe im Juli 1775“(Handschrift v. 13.7.1775) ‚Gebet‘: Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. Zürich/Stuttgart (Artemis) Bd.13. 1954. 2.Aufl. 1965. S.54-55.

Du bist Eins und lebendig, gezeugt und entfaltet, nicht zusammengetragen und geflickt. Vor dir, wie vor dem schaumstürzenden Sturze des gewaltigen Rheins, wie vor der glänzenden Krone der ewigen Schneegebürge, wie vor dem Anblick des heiter ausgebreiteten Sees, und deiner / Wolkenfelsen und wüsten Täler, grauer Gotthard! wie vor jedem großen Gedanken der Schöpfung, wird in der Seele reg was auch Schöpfungskraft in ihr ist. In Dichtung stammelt sie über, in krütztlenden Strichen wühlt sie auf dem Papier Anbetung dem Schaffenden, ewiges Leben, umfassendes unauslöschliches Gefühl des, das da ist und da war und da sein wird.

95)Goethe „Dichtung und Wahrheit“ II.Teil. Buch 8: Werke(3(1)3). Bd.9. S. 316.

Man muß Jüngling sein, um sich zu vergegenwärtigen, welche Wirkung Lessings „Laokoon“ auf uns ausübte, indem dieses Werk uns aus der Region eines kümmerlichen Anschauens in die freien Gefilde des Gedankens hinriß. Das so lange mißverständene *ut pictura poesis* war auf einmal beseitigt, der Unterschied der bildenden und Redekünste klar, die Gipfel beider erschienen nun getrennt, wie nah ihre Basen auch zusammenstoßen mochten. ... Wie vor einem Blitz erleuchteten sich uns alle Folgen dieses herrlichen Gedankens, alle bisherige anleitende und urteilende ward, wie ein abgetragener Rock, weggeworfen, wir hielten uns von allem Übel erlöst, ... Am meisten entzückte uns die Schönheit jenes Gedankens, daß die Alten den Tod als den Bruder des Schlags anerkannt, ... Vgl. Lessing „Laokoon“ Kap.11: Werke(3(1)7). Teil 4. S.346. Die alten Künstler haben auch wirklich den Tod und den Schlaf mit der Ähnlichkeit unter sich vorgestellt, die wir an Zwillingen so natürlich erwarten. ...

- Weit übern niedern Chor der Pöbel-Kräuter hin; / Pöbel-Kräutern(Urfas.)  
 Ein ganzes Blumen-Volk dient unter seiner Fahne,  
 Sein blauer Bruder selbst bückt sich und ehret ihn.  
 Der Blumen helles Gold, in Strahlen umgebogen, 385  
 Türmt sich am Stengel auf und krönt sein grau Gewand; / fas.)  
 Der Blätter glattes Weiß, mit tiefem Grün durchzogen, / Der Blättern(Ur-  
 Bestrahlt der bunte Blitz von feuchtem Diamant; / Strahlt von dem lichten  
 Gerechtestes Gesetz! daß Kraft sich Zier vermähle; / sich hier (Urfas.)  
 In einem schönen Leib wohnt eine schönre Seele. 390
- Vgl. Metzler-Haller(3(1)3). S.33-34.  
 Versuch Schweizerischer Gedichten. Bern, Bey Niclaus Emanuel Haller.  
 1732. ... Hallers Versuch Von Schweizerischen Gedichten. Zweyte, vermehrte und veränderte Auflage. Bern, Bey Niclaus Emanuel Haller. 1734.  
 ... (S.33/S.34) ... Hallers Versuch Schweizerischer Gedichte. Dritte, vermehrte und veränderte Auflage. Bern, Niclaus Emanuel Haller. 1743. ...  
 Vgl. Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 3.Aufl. 1743. Vorrede: Hirzel-Haller(3(1)2). S.246.
- Wir haben mit den Ober-Teutschen Kreisen gemein, daß wir viele Wörter mit einem andern Geschlechte gebrauchen, als in Sachsen gewöhnlich ist. Der zweite Fall in der mehrern Anzahl ist selbst in unsern Bibeln und symbolischen Büchern anderst als in dem übrigen Teutschlande beschaffen. Viele Wörter sind bey uns gebräuchlich, die bey andern veraltet sind, und tausend andre sind in Sachsen im beständigsten Gebrauche, die ein Schweizer nicht ohne ein Wörter-Buch verstehet. ...
- 92)Günther „Form und Sinn“(3(1)6) S.93.  
 Was Lessing aber übersieht, ist der Umstand, daß diese nur beschreibenden Strophen in einen Mitttext eingebettet sind, der ihnen eine innere Bewegung übermittelt, die sie, allein besehen, nicht besitzen. Das durch «fliehnde Nebel» brechende Licht der Sonne, das «auf den Blättern schwebt und die Natur erfrischt», enthüllt einen edlen Wettstreit bunter Blumen, die um ihren «Rang» kämpfen. Wenn sich der Dichter auch bemüht, das «Blumenvolk» in einzelnen Spezies aufs genaueste in Worten zu malen, wenigstens in einzelnen Eigenschaften, so liegt doch der Hauptsinn dieser Strophen nicht im Statischen des «grünen Tapets, gestickt mit Regenbögen», sondern im schön bewegten, lebendigen, nie zu ergründenden und hierarchisch sich abstufoenden Wunderchor dieser Alpenkräuter. ...  
 Vgl. Haller „Die Alpen“ Str.38. V.379-380; Reclam-Haller(3(1)2). S.18:  
 „Die Alpen“(Urfassung) Str.37. V.369-370; DNL-Haller(3(2)11). S.28.  
 Ein ganz Gebürge scheint, gefirnißt von dem Regen,  
 Ein grünender Tapet, gestickt mit Regenbögen. 380
- 93)Goethe „Von deutscher Baukunst“(1772): Werke(3(1)3). Bd.12. S.7-8/S.10-11/S.13-14.  
 Wenigen ward es gegeben, einen Babelgedanken in der Seele zu zeugen, ganz, groß, und bis in den kleinsten Teil notwendig schön, wie Bäume Gottes; ... (S.7/S.8) ... Hättest du mehr gefühlt als gemessen, wäre der Geist der Massen über dich gekommen, die du anstauntest, du hättest nicht so nur nachgeahmt, weil sie's taten und es schön ist; notwendig und wahr hättest du deine Plane geschaffen, und lebendige Schönheit wäre bildend aus ihnen gequollen. ... (S.8/S.10) ... vermännigfaltige die ungeheure Mauer, die du gen Himmel führen sollst, daß sie aufsteige gleich einem hocherhabnen, weitverbreiteten Baume Gottes, der mit tausend Ästen, Millionen Zweigen und Blättern wie der Sand am Meer ringsum der Gegend verkündet die Herrlichkeit des Herrn, seines Meisters. ... (S.10/S.11) ... Mit welcher unerwarteten Empfindung überraschte mich der Anblick, als ich davor trat! Ein ganzer, großer Eindruck füllte meine Seele, den, weil er aus tausend harmonierenden Einzelheiten bestand, ich wohl schmecken und genießen, keineswegs aber erkennen und erklären

j'avais conçu; et s'ils parviennent à donner plus au moral et moins au détail des peintures physiques, ils excelleront dans ce genre, plus riche, plus vaste, plus fécond, et infiniment plus naturel et plus moral que celui de la galanterie champêtre.

88) Lessing „Laokoon" Kap.17: Werke(3(1)7). Teil 4. S.368.

Ist dieses hier der Fall? Und ist er es nicht, wie hat man sagen können, „daß die ähnlichste Zeichnung eines Malers gegen diese poetische Schilderung ganz matt und düster sein würde"?(Breitinger „Critische Dichtkunst" 1740. Bd.2. S.407: 3(10)84) Sie bleibt unendlich unter dem, was Linien und Farben auf der Fläche ausdrücken können, und der Kunstrichter, der ihr dieses übertriebene Lob erteilet, muß sie aus einem ganz falschen Gesichtspunkte betrachtet haben; er muß mehr auf die fremden Zieraten, die der Dichter darein verwebet hat, auf die Erhöhung über das vegetative Leben, auf die Entwicklung der innern Vollkommenheiten, welchen die äußere Schönheit nur zur Schale dienet, als auf diese Schönheit selbst, und auf den Grad der Lebhaftigkeit und Ähnlichkeit des Bildes, welches uns der Maler, und welches uns der Dichter davon gewähren kann, gesehen haben. ... Ich höre in jedem Worte den arbeitenden Dichter, aber das Ding selbst bin ich weit entfernt zu sehen.

89) Haller „Göttingische Anzeigen von gelehrten Sachen"(1766) Bd.2. S.903: Günther „Form und Sinn"(3(1)6) S.101.

... einige merkwürdige Eigenschaften ... (des) ... Krautes ... (der Dichter) ... denn er kann die Eigenschaften ausdrücken, die inwendig liegen, die durch die übrige Sinne erkannt, oder durch Versuche entdeckt werden, und dieses ist dem Maler verboten.

90) Elschenbroich, Adalbert: Nachwort zur Reclam-Haller-Ausgabe(3(1)2). S. 103-104.

Lessing hat Haller insofern unrecht getan, als er unberücksichtigt ließ, daß in den Alpen (S.103/S.104) Landschaftsschilderung und Ideendichtung eine Einheit bilden. Weithin ist die Natur hier sogar das auslösende Moment für die philosophische Reflexion. Das wird beispielgebend bleiben bis zu Schillers Elegie Der Spaziergang, und auch Hölderlin hat immer wieder in Oden, Elegien und Hymnen aus dem Erlebnis der Landschaft heraus philosophiert. ...

Vgl. Pope „An Essay on Criticism"(1711) V.88-89: Collected Poems(3(6)47). S.60.

Those rules of old discover'd, not devised,  
Are Nature still, but Nature methodised:

Vgl. Die englische Literatur 5 der Reclam-Universal-Bibliothek(3(9)73).

S.29.

/ den,  
Jene Regeln, die schon in alter Zeit entdeckt — nicht erfunden — wurden,  
Sind immer noch Natur — allerdings Natur, die in ein System gebracht worden ist.

Vgl. Thomson „The Seasons" ‚Winter' 2.Aufl. 1726. Preface: Poetical Works (3(6)48). S.240-241.

I know no subject more elevating, more amusing; more ready to awake the poetical enthusiasm, the philosophical reflection, and (S.240/S.241) the moral sentiment, than the works of Nature. Where can we meet with such variety, such beauty, such magnificence? All that enlarges and transports the soul! What more inspiring than a calm, wide survey of them? ...

91) Lessing „Laokoon" Kap.17: Werke(3(1)7). Teil 4. S.367.

Man versuche es an einem Beispiele, welches ein Meisterstück in seiner Art heißen kann. Dort ragt das hohe Haupt vom edeln Enziane ...

Vgl. Haller „Die Alpen" Str.39. V.381-390; Reclam-Haller(3(1)2). S.18:

„Die Alpen"(Urfassung) Str.38. V.371-380; DNL-Haller(3(2)11). S.29.

Dort ragt das hohe Haupt am edlen Enziane / vom edeln Enziane(Urfassung)

Hier in dieser Unschuld des Lebens, hier unter den silbernen Alpen, soll mir es auch endlich leichter von der Brust gehen. Die Religion beschäftigt mich vorzüglich. ...

(10) „DIE ENTWICKELUNG DER INNEREN VOLLKOMMENHEITEN“

83) Kant „Kritik der reinen Vernunft“ 1. Aufl. 1781. S.474; 2. Aufl. 1787. S. 502: Werke. Akademie-Textausgabe. Unveränderter photomechanischer Abdruck des Textes der von der Preußischen Akademie der Wissenschaften 1902 begonnenen Ausgabe von Kants gesammelten Schriften. Berlin (Gruyter) 1968. Bd. 3. S.329 (Elementarlehre. II.Theil. Transsc. Logik. 2.Abth. 2.Buch. 2. Hauptst. 3.Abschnitt. Von dem Interesse der Vernunft ...): Oeuvres philosophiques. Bibliothèque de la Pléiade. Tome I. Des premiers écrits à la Critique de la raison pure. Paris (Gallimard) 1980. S.1125.

Die menschliche Vernunft ist ihrer Natur nach architektonisch, ...  
La raison humaine est, de par sa nature, architectonique, ...

84) Breitinger, Johann Jakob „Critische Dichtkunst“ (1740) Faksimile-Nachdruck. 2 Bände. Stuttgart (Metzler) 1966. Bd.2. S.406-407 (Bd.2. Abschn. 9. Von dem mahlerischen Ausdruck der Poesie).

So wenn Hr. Haller in dem Gedichte die Alpen (S.406/S.407) betitelt, Gentianam majorem luteam, als eins der trefflichsten Alpen-Kräuter, und die blaue pratensem flore lanuginoso, poetisch beschreiben will, so sagt er: Dort ragt das hohe Haupt vom edlen Enziane ... („Die Alpen“ Str. 39. V.381: 3(10)91) ... In einem schönen Leib' wohnt eine ... Seele. Man vergleiche damit die genaueste historische Beschreibung eines Botanici, oder auch die ähnlichste Zeichnung eines Mahlers, so wird man gestehen müssen, daß sie gegen dieser poetischen Schilderey ganz matt und düster seyn. ...

Vgl. Lessing „Laokoon“ Kap.17: Werke(3(1)7). Teil 4. S.368.

Ist dieses hier der Fall? Und ist er es nicht, wie hat man sagen können, „daß die ähnlichste Zeichnung eines Malers gegen diese poetische Schilderung ganz matt und düster sein würde“? ... (3(10)83)

85) Horatius „De arte poetica“ V.361: Sämtliche Werke. Lateinisch/Deutsch. 2 Teile. München (Heimeran) 1957. Teil 2. S.250/S.251 (Deutsch nach Färber, Hans).

ut pictura poesis: ...

Das Dichtwerk gleicht dem Gemälde: ...

Vgl. Gottsched „Versuch einer Critischen Dichtkunst“ Unveränd. reprogr. Nachdr. d. 4., verm. Aufl. (Leipzig. Bernhard Christoph Breitkopf. 1751) Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1982. S.53.

Ein Vers ist Bildern gleich, ...

(Horaz „Von der Dichtkunst“ V.361)

Vgl. Wielands Übersetzung von Horati „De arte poetica“ (Über die Dichtkunst) V.361: Werke. 5 Bände. München (Hanser) 1965-68. Bd.5. S.623.

Gedichte sind darin den Malereien gleich,

86) Lessing „Laokoon“ Kap.17: Werke(3(1)7). Teil 4. S.366.

Der Poet will nicht bloß verständlich werden, seine Vorstellungen sollen nicht bloß klar und deutlich sein; hiermit begnügt sich der Prosaist. Sondern er will die Ideen, die er in uns erwecket, so lebhaft machen, daß wir in der Geschwindigkeit die wahren sinnlichen Eindrücke ihrer Gegenstände zu empfinden glauben, und in diesem Augenblicke der Täuschung uns der Mittel, die er dazu anwendet, seiner Worte, bewußt zu sein aufhören. Hierauf lief oben die Erklärung des poetischen Gemäldes hinaus.

87) Marmontel „Poétique française“ T.II. S.501: Lessing „Laokoon“ Kap.17; Werke(3(1)7). Teil 4. S.370.

J'écrivais ces réflexions avant que les essais des Allemands dans ce genre (l'églogue) fussent connus parmi nous. Ils ont exécuté ce que



- 82) Haller „Die Falschheit menschlicher Tugenden“(1730) V.255-292: Reclam-Haller(3(1)2). S.49(V.255-281)/S.50(V.282-292).
- Versenkt im tiefen Traum nachforschender Gedanken, 255  
Schwingt ein erhabner Geist sich aus der Menschheit Schranken.  
Seht den verwirrten Blick, der stets abwesend ist  
Und vielleicht itzt den Raum von andern Welten mißt;  
Sein stets gespannter Sinn verzehrt der Jahre Blüte,  
Schlaf, Ruh und Wollust fliehn sein himmlisches Gemüte. 260  
Wie durch unendlicher verborgner Zahlen Reih  
Ein krumm geflochtner Zug gerecht zu messen sei;  
Warum die Sterne sich an eigne Gleise halten;  
Wie bunte Farben sich aus lichten Strahlen spalten;  
Was für ein innrer Trieb der Welten Wirbel dreht; 265  
Was für ein Zug das Meer zu gleichen Stunden bläht;  
Das alles weiß er schon: er füllt die Welt mit Klarheit,  
Er ist ein steter Quell von unerkannter Wahrheit.  
Doch, ach, es lischt in ihm des Lebens kurzer Tacht,  
Den Müh und scharfer Witz zu heftig angefacht! 270  
Er stirbt, von Wissen satt, und einst wird in den Sternen  
Ein Kenner der Natur des Weisen Namen lernen.  
Erscheine, großer Geist, wann in dem tiefen Nichts  
Der Welt Begriff dir bleibt und die Begier des Lichts,  
Und laß von deinem Witz, den hundert Völker ehren, 275  
Mein lehr-begierig Ohr die letzten Proben hören!  
Wie unterscheidest du die Wahrheit und den Traum?  
Wie trennt im Wesen sich das Feste von dem Raum?  
Der Körper rauhen Stoff, wer schränkt ihn in Gestalten,  
Die stets verändert sind und doch sich stets erhalten? 280  
Den Zug, der alles senkt, den Trieb, der alles dehnt, S.49  
Den Reiz in dem Magnet, wonach sich Eisen sehnt, S.50  
Des Lichtes schnelle Fahrt, die Erbschaft der Bewegung,  
Der Teilchen ewig Band, die Quelle neuer Regung,  
Dies lehre, großer Geist, die schwache Sterblichkeit, 285  
Worin dir niemand gleicht und alles dich bereut!  
Doch suche nur im Riß von künstlichen Figuren,  
Beim Licht der Ziffer-Kunst, der Wahrheit dunkle Spuren;  
Ins Innre der Natur dringt kein erschaffner Geist,  
Zu glücklich, wann sie noch die äußre Schale weist! 290  
Du hast nach reifer Müh und nach durchwachten Jahren  
Erst selbst, wie viel uns fehlt, wie nichts du weißt, erfahren!  
Vgl. Hölderlin „Heimkunft“(1801) Str.1. V.1-3/V.9-10/V.13-17: Stuttgarter  
Ausgabe(3(2)13). Bd.2. S.96.
- Drinn in den Alpen ists noch helle Nacht und die Wolke,  
Freudiges dichtend, sie deckt drinnen das gähnende Thal.  
Dahin, dorthin toset und stürzt die scherzende Bergluft, 3  
...
- Denn es wächst unendlicher dort das Jahr und die heiligen  
Stunden, die Tage, sie sind kühner geordnet, gemischt. 10  
...
- Jezt auch wachet und schaut in der Tiefe drinnen das Dörflein  
Furchtlos, Hohem vertraut, unter den Gipfeln hinauf.  
Wachstum ahnend, denn schon, wie Blize, fallen die alten 15  
Wasserquellen, der Grund unter den Stürzenden dampft,  
Echo tönet umher, ...
- Vgl. Hölderlins Brief 231 an den Bruder von Ende März 1801: Stuttgarter  
Ausgabe(3(2)13). Bd.6. S.420.

- At first, an azure sheet, it rushes broad;  
Then, whitening by degrees as prone it falls, 595  
And from the loud-resounding rocks below  
Dashed in a cloud of foam, it sends aloft  
A hoary mist and forms a ceaseless shower.
- 74)Haller „Die Alpen" Vorbemerkung: Reclam-Haller(3(1)2). S.3.  
Dieses Gedicht ist dasjenige, das mir am schwersten geworden ist. Es war die Frucht der großen Alpen-Reise, die ich An. 1728 mit dem jetzigen Herrn Canonico und Professor Geßner in Zürich getan hatte. Die starken Vorwürfe lagen mir lebhaft im Gedächtnis. Aber ich wählte eine beschwerliche Art von Gedichten, die mir die Arbeit unnötig vergrößerte. Die zehenzeilichten Strophen, die ich brauchte, zwangen mich, so viele besondere Gemälde zu machen, als ihrer selber waren, und allemal einen ganzen Vorwurf mit zehen Linien zu schließen. Die Gewohnheit neuerer Zeiten, daß die Stärke der Gedanken in der Strophe allemal gegen das Ende steigen muß, machte mir die Ausführung noch schwerer. Ich wandte die Nebenstunden vieler Monate zu diesen wenigen Reimen an, und da alles fertig war, gefiel mir sehr vieles nicht. Man sieht auch ohne mein Warnen noch viele Spuren des Lohensteinischen Geschmacks darin.
- 75)Pope „An Essay on Man"(1733-34) London (Macmillan's English Classics) 1895(1.Aufl.). 1919. S.2(„The Design" 1735).  
If I could flatter myself that this Essay has any merit, it is in steering betwixt the extremes of doctrines seemingly opposite, in passing over terms utterly unintelligible, and in forming a temperate yet not inconsistent, and a short yet not imperfect, system of ethics.
- 76)Pope „An Essay on Man"(3(9)75) Epistle I. V.95. S.6.  
Hope springs eternal in the human breast:
- 77)Pope „An Essay on Man"(3(9)75) Epistle II. V.108. S.17.  
Reason the card, but passion is the gale;  
Vgl. Die englische Literatur 5 der Reclam-Universal-Bibliothek(3(9)73). S.49 (2.Epistel. V.107-110). / dahin;  
Auf dem weiten Meer des Lebens segeln wir in verschiedenen Richtungen  
Der Verstand ist der Kompaß, aber die Leidenschaft ist der Sturmwind.  
Wir finden Gott auch nicht nur in der schweigenden Windstille;  
Er reitet auf dem Sturm und wandelt auf dem Wind. 110
- 78)Pope „An Essay on Man"(3(9)75) Epistle IV. V.372. S.45.  
And heav'n beholds its image in his breast.
- 79)Haller „Die Alpen" Str.15. V.145-150; Reclam-Haller(3(1)2). S.9: „Die Alpen"(Urfassung) Str.14. V.135-140; DNL-Haller(3(2)11). S.21.  
Die holde Nchtigall grüßt sie von nahen Zweigen, 145  
Die Wollust deckt ihr Bett auf sanft geschwollnes Moos,  
Zum Vorhang dient ein Baum, die Einsamkeit zum Zeugen,  
Die Liebe führt die Braut in ihres Hirten Schoß.  
O dreimal seligs Paar! Euch muß ein Fürst beneiden,  
Dann Liebe balsamt Gras und Ekel herrscht auf Seiden. 150  
Vgl. Chateaubriand „Essai sur les révolutions"(3(7)58) I. 48. S.190.  
... il était commun qu'une jeune fille et un jeune homme destinés l'un à l'autre ...
- 80)Haller „Die Alpen" Str.45. V.450: Reclam-Haller(3(1)2). S.21.  
Die mäßige Natur allein kann glücklich machen. 450  
Vgl. „Die Alpen"(Urfassung" Str.44. V.439-440: DNL-Haller(3(2)11). S.31.  
Seht ein verachtet Volk bey Müh und Armuht lachen,  
Und lernt, daß die Natur allein kan glücklich machen. 440
- 81)Haller „Die Alpen" Str.48. V.477-478; Reclam-Haller(3(1)2). S.22: „Die Alpen"(Urfassung) Str.47. V.467-468: DNL-Haller(3(2)11). S.32.  
Euch überschwemmt kein Strom von wallenden Gelüsten,  
Dawider die Vernunft mit eiteln Lehren prahlt.

By Greatness, I do not only mean the bulk of any single (S.362/S.364) object, but the largeness of a whole view, considered as one entire piece. Such are the prospects of an open champian country, a vast uncultivated desert, of huge heaps of mountains, high rocks and precipices, or a wide expanse of waters, where we are not struck with the novelty or beauty of the sight, but with that rude kind of magnificence which appears in many of these stupendous works of nature. Our imagination loves to be filled with an object, or to grasp at any thing that is too big for its capacity. We are flung into a pleasing astonishment at such unbounded views, and feel a delightful stillness and amazement in the soul at the apprehension of them. ...

Mit Größe meine ich nicht nur den Umfang eines beliebigen einzel- (S.363/S.365) nen Gegenstandes, sondern die Weite einer ganzen Aussicht, wenn man sie als eins betrachtet. Von dieser Art sind der Blick auf ein offenes, ebenes Land, hohe Felsen und Abgründe oder eine weite Wasserfläche, wo wir nicht durch die Neuheit oder Schönheit des Anblicks ergriffen werden, sondern durch jene wilde Art von Großartigkeit, die sich in vielen dieser erstaunlichen Werke der Natur zeigt. Unsere Einbildungskraft liebt es, von einem Gegenstand ganz ausgefüllt zu werden oder nach etwas zu greifen, das für ihr Fassungsvermögen zu groß ist. Solche unbegrenzten Aussichten stürzen uns in ein angenehmes Erstaunen, und indem wir sie wahrnehmen, empfinden wir eine entzückende Stille und Bewunderung in der Seele. ...

Vgl. Pope „The Temple of Fame”(1711) V.11-16: Collected Poems(3(6)47). S. 36.

I stood, methought, betwixt earth, seas, and skies:  
The whole creation open to my eyes:

In air self-balanced hung the globe below,  
Where mountains rise, and circling oceans flow;  
Here naked rocks and empty wastes were seen,  
There towery cities, and the forests green:

15

Vgl. Longinos „De sublime”(Reclam-UB) Stuttgart. 1988. S.22(IX.5: 182V).

ὁ δὲ πῶς μεγαθύει τὰ δαιμόνια; ...

Vgl. Homeros „Ilias” Griechisch/Deutsch nach Rupé, Hans. München (Heimeran) 1961. 6.Aufl. 1977. S.184/S.185: „Ilias” V. 770-772.

ὅσον δ' ἠεροειδέες ἀνὴρ ἴδεν ...

Weit wie ein Mann die neblige Ferne durchspäht mit den Augen,  
Welcher von hoher Warte hinab aufs finstere Meer blickt:

770

So weit heben im Sprung sich der Göttinnen wiehernde Rosse.

Vgl. „Ilias·Odyssee” In der Übertragung von Voß, Johann Heinrich („Ilias” Hamburg 1793 / „Odyssee” Hamburg 1781). München (dtv) 1979. S.95: „Ilias” Gesang 5. V.770-772.

Weit wie die dunkelnde Fern ein Mann durchspäht mit den Augen,  
Sitzend auf hoher Wart, in das finstere Meer hinschauend:

770

So weit heben im Sprung sich der Göttinnen schallende Rosse.

Vgl. Thomson „The Seasons” „Summer”(1727) V.585-598: Poetical Works(3(6) 48). S.75.

Thus up the mount, in airy vision rapt,  
I stray, regardless whither; till the sound  
Of a near fall of water every sense

585

Wakes from the charm of thought: swift-shrinking back,  
I check my steps and view the broken scene.

Smooth to the shelving brink a copious flood

590

Rolls fair and placid; where, collected all

In one impetuous torrent, down the steep

It thundering shoots, and shakes the country round.

67)Haller „Die Alpen“ Str.33-36. V.321-360: Reclam-Haller(3(1)2). S.15  
(Str.33. V.321-328) / S.16 (Str.33. V.329-330 / Str.34. V.331-340 / Str.  
35. V.341-350 / Str.36. V.351-360).

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.32-35. V.311-350: DNL-Haller(3(2)11). S.  
26 (Str.32. V.311-316) / S.27 (Str.32. V.317-320 / Str.33. V.321-330 /  
Str.34. V.331-340 / Str.35. V.341-346) / S.28 (Str.35. V.347-350).

68)Haller „Die Alpen“ Str.37-40. V.361-400: Reclam-Haller(3(1)2). S.17  
(Str.37. V.361-370 / Str.38. V.371-374) / S.18 (Str.38. V.375-380 / Str.  
39. V.381-390 / Str.40. V.391-394) / S.19 (Str.40. V.395-400).

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.36-39. V.351-390: DNL-Haller(3(2)11). S.  
28 (Str.36. V.351-360 / Str.37. V.361-370) / S.29 (Str.38. V.371-380 /  
Str.39. V.381-390).

69)Haller „Die Alpen“ Str.41-44. V.401-440: Reclam-Haller(3(1)2). S.19  
(Str.41. V.401-410) / S.20 (Str.42. V.411-420 / Str.43. V.421-430 / Str.  
44. V.431-435) / S.21 (Str.44. S.436-440).

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.40-43. V.391-430: DNL-Haller(3(2)11). S.  
29 (Str.40. V.391-394) / S.30 (Str.40. V.395-400 / Str.41. V.401-410 /  
Str.42. V.411-420 / Str. 43. V.421-422) / S.31 (Str.43. V.423-430).

70)Haller „Die Alpen“ Str.18-25. V.171-250: Reclam-Haller(3(1)2). S.10  
(Str.18. V.171-180 / Str.19. V.181-190 / Str.20. V.191-193) / S.11 (Str.  
20. V.194-200 / Str.21. V.201-210 / Str.22. V.211-220 / Str.23. V.221-222)  
/ S.12 (Str.23. V.223-230 / Str.24. V.231-240 / Str.25. V.241-247) / S.13  
(Str.25. V.248-250).

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.17-24. V.161-240: DNL-Haller(3(2)11). S.  
21 (Str.17. V.161-166) / S.22 (Str.17. V.167-170 / Str.18. V.171-180 /  
Str.19. V.181-190 / Str.20. V.191-194) / S.23 (Str.20. V.195-200 / Str.21.  
V.201-210 / Str.22. V.211-220 / Str.23. V.221-224) / S.24 (Str.23. V.225-  
230 / Str.24. V.231-240).

71)Haller „Die Alpen“ Str.17. V.161-162: Reclam-Haller(3(1)2). S.9.

Entfernt vom eiteln Tand der mühsamen Geschäfte

Wohnt hier die Seelen-Ruh und flieht der Städte Rauch;

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.16. V.151-152: DNL-Haller(3(2)11). S.21.

Entfernt vom eiteln Tand der mühsamen Geschäften,

Wohnt hier die Seelen-Ruh und flieht der Stätten Rauch.

72)Haller „Die Alpen“ Str.44. V.437-440: Reclam-Haller(3(1)2). S.21.

Der Strom fließt schwer von Gold und wirft gediegne Körner,

Wie sonst nur grauer Sand gemeines Ufer schwärzt.

Der Hirt sieht diesen Schatz, er rollt zu seinen Füßen,

O Beispiel für die Welt! er siehts und läßt ihn fließen. 440

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.43. V.427-430: DNL-Haller(3(2)11). S.31.

Vgl. „Die Alpen“ Str.45. V.441-442; Reclam-Haller(3(1)2). S.21: „Die Al-  
pen“(Urfassung) Str.44. V.431-432; DNL-Haller(3(2)11). S.31.

Verblendete Sterbliche! die, bis zum nahen Grabe,

Geiz, Ehr und Wollust stets an eitlen Hamen hält,

(9)„DIE ZEHENZEILICHTEN STROPHEN“

73)Haller „Die Alpen“ Str.36. V.351-354; Reclam-Haller(3(1)2). S.16: „Die  
Alpen“(Urfassung) Str.35. V.341-344; DNL-Haller(3(2)11). S.27.

Hier zeigt ein steiler Berg die Mauer-gleichen Spitzen,

Ein Wald-Strom eilt hindurch und stürzt Fall auf Fall. 352

Der dick beschäumte Fluß dringt durch der Felsen Ritzen

Und schießt mit gäher Kraft weit über ihren Wall.

Vgl. Addison, Joseph „The Spectator“(1711-12/1714) Nr.412 über die Ver-  
gnügen der Einbildungskraft: Die englische Literatur 5. Englisch/Deutsch.  
Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1982. S.362/S.364//S.363/S.365.

Fortan steht er einzig unter allen lyrischen Dichtern, weil er mit starkem, geläutertem Willen der Verewigung des einzelnen Momentes, der einzelnen Situation wesentlich entsagt, nicht zu jener Gattung gehört, in der vor allen groß sind Properz, Ovid, Byron, Victor Hugo, Goethe. Schiller verewigt das Ganze einer Empfindung in der edelsten und gewaltigsten Stilform. Fortan sammelt er alle Strahlen des Gefühls vollständig, so daß er trotz der Allgemein-Giltigkeit seiner Gedichte doch so ergreift, wie nur das Momentane irgend kann. Tausende haben schöne Liebeslieder gedichtet, nur er die ›Würde der Frauen‹, nur er das Allgemeine der Sehnsucht »Ach, aus dieses Tales Gründen«, nur er das Allgemeine der edelheitern gesellschaftlichen Stimmung »Und so finden wir uns wieder«, nur er die Erscheinung der Poesie um Leben in dem ›Mädchen aus der Fremde‹, und ihre Herrschaft in der ›Macht des Gesanges‹. Endlich konnte nur er sich zu jenen kurzen, ergreifenden Programmen sammeln: ›Hoffnung‹, ›Worte des Glaubens‹, ›Worte des Wahns‹.

60) Weiss, Richard „Das Alpenerlebnis in der deutschen Literatur des 18. Jahrhunderts“ (1933) S.25-26: Metzler-Haller(3(1)3). S.27.

Die Alpenstrophen sind eine großartig scharfe und sprachlich erhabene Wiedergabe des vernünftigsinnlichen Eindruckes eines ruhenden und — im Falle des Staubaches — eines mechanisch bewegten Objektes. Nicht das persönlich einmalige Gesicht und Erlebnis des bewegten Menschen, der die Natur in tausend wechselnden Formen sieht, wird wiedergegeben, sondern nur das auf der allen gemeinsamen Sinnlichkeit beruhende Bild, wie es die Naturwissenschaft fordert ... Durch die analytische Arbeit des Verstandes kann eine Landschaft beschreibend in Einzelheiten aufgelöst, nicht aber der Eindruck von der Bewegtheit und Wirklichkeit einer erlebten Landschaft wiedergegeben werden, wie es einer späteren Zeit, der auch die äußere Natur etwas innerlich Verwandtes war, zum Bedürfnis wurde ...

61) Vgl. (3(5)35).

62) Hölderlin „Brod und Wein“ 9 Strophen. 160 Verse: Stuttgarter Ausgabe (3(2)13). Bd.2. S.90-95.

63) Haller „Die Alpen“ Str.10. V.99f.: Reclam-Haller(3(1)2). S.7.

Nur hat die Fröhlichkeit bisweilen wenig Stunden

Dem unverdroßnen Volk nicht ohne Müh entwunden.

100

Vgl. „Die Alpen“ (Urfassung) Str.9. V.89f.: DNL-Haller(3(2)11). S.19.

Nur hat die Fröhlichkeit bißweilen wenig Stunden,

Dem unverdroßnen Fleiß mit Mühe ausgewunden.

90

64) Haller „Die Alpen“ Str.11-12. V.101-120: Reclam-Haller(3(1)2). S.7(Str.11. V.101-110) / S.8(Str.12. V.111-120).

Vgl. „Die Alpen“ (Urfassung) Str.10-11. V.91-110: DNL-Haller(3(2)11) S.19 (Str.10. V.91-98) / S.20(Str.10. V.99-100 / Str.11. V.101-110).

65) Haller „Die Alpen“ Str.13-16. V.121-160: Reclam-Haller(3(1)2). S.8(Str.13. V.121-130 / Str.14. V.131-138) / S.9(Str.14. V.139-140 / Str.15. V.141-150 / Str.16. V.151-160).

Vgl. „Die Alpen“ (Urfassung) Str.12-15. V.111-150: DNL-Haller(3(2)11) S.20(Str.12. V.111-120 / Str.13. V.121-130) / S.21(Str.14. V.131-140 / Str.15. V.141-150).

66) Haller „Die Alpen“ Str.26-31. V.251-310: Reclam-Haller(3(1)2). S.13 (Str.26. V.251-260 / Str.27. V.261-270) / S.14(Str.28. V.271-280 / Str.29. V.281-290 / Str.30. V.291-298) / S.15(Str.30. V.299-300 / Str.31. V.301-310).

Vgl. „Die Alpen“ (Urfassung) Str.25-30. V.241-300: DNL-Haller(3(2)11) S.24(Str.25. V.241-250 / Str.26. V.251-254) / S.25(Str.26. V.255-260 / Str.27. V.261-270 / Str.28. V.271-280 / Str.29. V.281-284) / S.26(Str.29. V.285-290 / Str.30. V.291-300).

57)Haller „Der Mann nach der Welt“(1733) V.149-160: DNL-Haller(3(2)11) S. 80.

Glücklich waren wir, eh' als durch öftern Sieg  
Bern über Habsburgs Schutt die Nachbarn überstieg; 150  
Der Mauren engen Raum bewohnten große Seelen,  
Sie waren ohne Land, doch fähig zum Befehlen;  
Es war ein Vaterland, ein Gott, ein freies Herz;  
Bestechen war kein Kauf, Verräterei kein Scherz.  
Itzt sinken wir dahin, von langer Ruh' erweicht, 155  
Wo Rom und jeder Staat, wenn er sein Ziel erreicht.  
Das Herz der Bürgerschaft, das einen Staat beseelt,  
Das Mark des Vaterlands ist mürb und ausgehöhlt;  
Und einmal wird die Welt in den Geschichten lesen,  
Wie nah dem Sittenfall der Fall des Staats gewesen. 160

58)Chateaubriand, François René „Essai historique, politique et miral sur les révolutions anciennes et modernes, considérées dans leurs rapports avec la Révolution française“(1797) Première Partie. Chapitre 48: „Essai sur les révolutions / Génie du christianisme“ Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1978. S.190.

Ainsi, la philosophie fut le premier degré de la corruption des Scythes. Lorsque les Suisses étaient vertueux, ils ignoraient les lettres et les arts. Lorsqu'ils commencèrent à perdre leurs moeurs, les Haller, les Tissot, les Gessner, les Lavater parurent. ... J'ai connu deux Suisses très oroginaux. L'un ne faisait que de sortir de ses montagnes, et me racontait que dans son enfance il était commun qu'une jeune fille et un jeune homme destinés l'un à l'autre couchassent ensemble avant le mariage dans le même lit, sans que la chasteté des moeurs en reçût la moindre atteinte; mais que, dans les derniers temps, on avait été obligé, pour plusieurs raisons, réformer cet usage. ...

(8)„DER ARBEITENDE DICHTER“

59)Burckhardt, Jacob „Gedächtnisrede auf Schiller“(1859): Vorträge 1844-1887. Hrsg. v. Dürr, Emil. 2.Aufl. Basel 1918. S.30-34; Schiller — Zeitgenosse aller Epochen. Dokumente zur Wirkungsgeschichte Schillers in Deutschland. Teil I. 1782-1859. Hrsg. v. Oellers, Norbert. Frankfurt am Main (Athenäum) 1970. S.415-418. S.416-417.

... Das erste Drama des idealen Stils ist ›Don Carlos‹. Mit voller mächtiger Absicht schafft er den Posa: »Seine Neigung war die Welt mit allen kommenden Geschlechtern«. Alles an dieser Erscheinung ist unhistorisch und a priori unmöglich, und dennoch ist dieser Posa in der Entwicklung der deutschen Poesie und Gefühlswelt unentbehrlich, man darf wohl sagen, dieser Kosmopolit ist die nationalste Figur der deutschen Literatur. In der Lyrik ist für diese Epoche bezeichnend das ›Lied an die Freude‹. Es hält die logische Prüfung nicht aus, es ist ein Rausch; aber keine Literatur der Welt besitzt wohl etwas Ähnliches. Und ein zweites charakteristisches Werk dieser Jahre sind die ›Götter Griechenlands‹, die man ja nicht allzu dogmatisch nehmen darf, auch nicht das

Einen zu bereichern unter allen,  
Mußte diese Götterwelt vergehn!

denn von vor- wie von nachher gibt es die deutlichsten Aussagen über Schillers Monotheismus. Als drittes ist in dieser Reihe zu nennen sein Programm über (S.416/S.417) die Bestimmung der Poesie auf Erden: ›Die Künstler‹. Es ist wohl das höchste Programm, das je aufgestellt worden ist. Man darf das Gedicht neben seinen philosophischen Schriften und den ›Briefen über Don Karlos‹ nennen als den stärksten Beweis für seine Gewissenhaftigkeit im Fache.

56) Muralt, Beat Ludwig „Lettres sur les Anglois et les François et sur les Voyages"(1725): Günther „Form und Sinn"(3(1)6) S.90; Hirzels Haller-Ausgabe(3(1)2). S.XCV-XCVI.

Il semble que la Providence qui gouverne le monde, ait voulu que parmi les nations il y en eût une droite et simple, qui manquant de grandes richesses, aussi bien que d'occasions à de grands plaisirs, ne fût pas dans la tentation de se laisser aller au luxe. Une heureuse obscurité, un genre de vie éloigné de toute ostentation, autant que de toute mollesse, devait nous attacher à nos montagnes, et le contentement inséparable de ce genre de vie, devait nous y affermir. ... (S.90/S.XCV) ... Nos pères ne voiageoient point; il n'étoit point établi parmi eux de se former sur des modèles étrangers pour se faire valoir. La Droiture, la Franchise, la Fermeté les ornoient suffisamment et ils ne savoit pas qu'avec ses qualitez on eut besoin de manières, ni que, pour se faire estimer dans son País, il falloit les quitter et aller chercher au loin de quoi contenter le public. Avec les moeurs et le caractère pris dans leur domestique non seulement ils ont vécu avec dignité chez eux, mais ils ont porté leurs moeurs dans les país étrangers, lorsqu'ils étoient engagez à y aller; et après en avoir fait gloire plutôt que d'en avoir eu honte, ils les ont rapporté chez eux. Sans mêler rien d'étranger dans leur caractère ils ont vécu avec honneur et ils en ont laissé à nôtre nation une réputation si affermie, que ce n'est qu'à une longue suite d'années, que nous sommes venus à bout de la détruire. Mais aussi, dit-on, ces bonnes gens pour ne vouloir pas descendre de leurs montagnes et se former un peu, étoient merveilleusement simples et grossiers et n'ont guère joui de la vie. Ils en ont joui plus que nous. Comme chez eux les plaisirs de la vie ne dépendoient des choses étrangères, mais de ce que le país leur fournissoit, ils les ont goûtés tranquillement et ils ont vécu heureux. Si, par la grossièreté qu'on leur reproche, on entend l'habitude d'agir et de parler naturellement et selon le caractère qui leur étoit propre; si l'on appelle simplicité l'incapacité de feindre et de se déguiser, de vouloir imposer aux autres par des qualitez empruntées, c'est un nouvel éloge que l'on leur donne; et certainement s'ils revenoient au monde ils feroient gloire de ce que nous leur reprochons, comme ils nous reprochoient, sans doute, les choses dont nous faisons gloire. Si l'on pouvoit se transporter dans les tems passez, comme l'on voiage dans les país éloignez, c'est là que l'on pourroit être tenté de voiage. La (S.XCV/S.XCVI) grossière République d'alors donne l'idée d'un bâtiment fait des pièces de roche, qui a du Grand autant que du Solide; celle d'aujourd'hui, nôtre Nation avec la politesse et l'éclat dont elle cherche à se parer, ne présente à l'Imagination que Platre et Vernis; et je suis persuadé que les moeurs et le caractère original de nos Pères avoient plus de véritable bien-séance que les manières et le caractère que nous affectons. Chaque nation a le sien que la Nature lui donne et qui est assorti au pays et aux circonstances de ses habitans. De même chaque nation a ses manières comme une suite nécessaire de son caractère. Il ne faudroit changer ni l'une ni l'autre de ces choses, mais se contenter de les rectifier; il faudroit cultiver son caractère et lui assortir les manières. Aller prendre des manières étrangères pour les rapporter chez soi, c'est chercher à devenir étranger dans sa patrie. ...

prairie réjouissoit tout à coup mes regards. ... (S.77/S.78) ...

Ce fut là que je démêlai sensiblement dans la pureté de l'air où je me trouvois, la véritable cause du changement de mon humeur, et du retour de cette paix intérieure que j'avois perdue depuis si longtems. En effet, c'est une impression générale qu'éprouvent tous les hommes, quoiqu'ils ne l'observent pas tous, que sur les hautes montagnes où l'air est pur et subtil, on se sent plus de facilité dans la respiration, plus de légèreté dans le corps, plus de sérénité dans l'esprit, les plaisirs y sont moins ardens, les passions plus modérées. Les méditations y prennent je ne sais quel caractère grand et sublime, proportionné aux objets qui nous frappent, je ne sais quelle volupté tranquille qui n'a rien d'acre et de sensuel. Il semble qu'en s'élevant au dessus du séjour des hommes on y laisse tous les sentimens bas et terrestres, et qu'à mesure qu'on approche des régions éthérées l'âme contracte quelque chose de leur inaltérable pureté. On y est grave sans mélancholie, paisible sans indolence, content d'être et de penser: tous les desirs trop vifs s'émoussent; ils perdent cette pointe aigüe qui les rend douloureux, ils ne laissent au fond du coeur qu'une émotion légère et douce, et c'est ainsi qu'un heureux climat fait servir à la félicité de l'homme les passions qui font ailleurs son tourment. ... (S.78/S.80) ... Leur desintéressement fut si complet que dans tout le voyage je n'ai pu trouver à placer un patagon. En effet à quoi dépenser de l'argent dans un pays où les maîtres ne reçoivent point le prix de leurs fraix, ni les domestiques celui de leurs soins, et où l'on ne trouve aucun mendiant? Cependant l'argent est fort rare dans le haut-Valais, mais c'est pour cela que les habitans sont à leur aise: car les denrées y sont abondantes sans aucun débouché au dehors, sans consommation de luxe au dedans, et sans que le cultivateur Montagnard, dont les travaux sont les plaisirs, devienne moins laborieux. Si jamais ils ont plus d'argent, ils seront infailliblement plus pauvres. Ils ont la sagesse de le sentir, et il y a dans le pays des mines d'or qu'il n'est pas permis d'exploiter. ... (S.80/S.1387: Anmerkungen) ...

Dans son étude sur „La littérature alpestre en France et en Angleterre aux XVIII<sup>e</sup> et XIX<sup>e</sup> siècles (1685-1868)“, (Chambéry, 1930), où un important chapitre est consacré à Rousseau, Claire-Éliane Engel nie que cette lettre exprime une impression réelle! Pourtant nous sommes certains que Rousseau a vu le Haut-Valais en 1744 lorsque, ... (S.1387/S.1390) ...

Sur la littérature alpestre, cf. l'ouvrage déjà cité de Claire-Éliane Engel, qui a mis en lumière l'influence de Haller, dont le poème „Die Alpen“ avait été traduit en 1750 et avait aussitôt connu un grand succès, et celle des frères De Luc, les géologues amis de Rousseau qui, en 1754, avaient été à Chamonix et en étaient revenus par le Valais. Elle a d'autre part montré que ... ; que ... et que le paysage célébré par Rousseau dans une phrase fameuse du Livre IV („Confession“) ... est un paysage de «préalpes», celui des environs de Chambéry. ...

55) Vgl. (3(7)54).

Vgl. Hölderlin „Kanton Schweiz“(1791) V.71-73/V.78-79: Stuttgarter Ausgabe(3(2)13). Bd.1. S.145.

Herrlich Gebirg! wo der blaiche Tyrann den Knechten vergebens,  
Zahm und schmeichlerisch Muth gebot — zu gewaltig erhuh sich 72  
Wider den Trotz die gerechte, die unerbittliche Rache —

...

Walthers Gesellen und Tells, im schönen Kampfe der Freiheit! 78

Könnst' ich dein vergessen, o Land, der göttlichen Freiheit! 79



Tout cela donne un juste orgueil à un marchand anglais, et fait qu'il ose se comparer, non sans quelque raison, à un citoyen romain. ... un négociant qui enrichit son pays, donne de son cabinet des ordres à Surate et au Caire, et contribue au bonheur du monde.

51) Léonard, Émile-G.: Histoire du Protestantisme. QUE-SAIS-JE?. Paris (Presses Universitaires de France) 1950. S.90.

l'apologétique orthodoxe. ... Haller qui, d'après Philippe Godet, «inspirait à Voltaire une sorte de frayeur respectueuse», ...

Vgl. Saussure, Horace-Bénédict: Voyage dans les Alpes. Begegnung mit Haller im Jahre 1764.

(7) „WELSCHLANDS PARADIES“

52) Saint-Just „Discours prononcé le 13 novembre 1790 concernant le jugement de Louis XVI à la tribune de la Convention“: OEuvres choisies. Paris (Gallimard) 1968. S.80/S.83.

Tout roi est un rebelle et un usurpateur. ... (S.80/S.83) ... Louis a combattu le peuple: il est vaincu. C'est un barbare, ... il regardait les citoyens comme ses esclaves; ...

53) Nadler, Josef: Geschichte der deutschen Literatur. 2. ergänzte Aufl. Regensburg (Josef Habel) 1961. S.182.

„Die Alpen“ 1729, die im Mittelpunkt stehen, müßten eigentlich „Die Älp-ler“ oder besser „Die alten Eidgenossen“ heißen. ...

54) Haller „Die Alpen“ Str.30. V.291-300: Reclam-Haller(3(1)2). S.14-15.

Ein anderer, dessen Haupt mit gleichem Schnee bedeckt,  
Ein lebendes Gesetz, des Volkes Richtschnur ist,  
Lehrt, wie die feige Welt ins Joch den Nacken strecket,  
Wie eitler Fürsten Pracht das Mark der Länder frißt,  
Wie Tell mit kühnem Mut das harte Joch zertreten, 295  
Das Joch, das heute noch Europens Hälfte trägt;  
Wie um uns alles darbt und hungert in den Ketten  
Und Welschlands Paradies gebogne Bettler hegt; S.14  
Wie Eintracht, Treu und Mut, mit unzertrennten Kräften, S.15  
An eine kleine Macht des Glückes Flügel heften. 300

Vgl. Hallers Anmerkung über den V.297(S.14).

Diese Betrachtung hat schon Burnet gemacht.

(„Some Letters containing an account of what seem'd most remarkable in travelling thro' Switzerland, Italy etc.“ 1685-86)

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.29. V.281-290: DNL-Haller(3(2)11). S.25f.

Ein anderer, dessen Haupt mit gleichem Schnee bedeket,  
Ein lebendes Gesäß, des Volkes Richtschnur ist;  
Lehrt was den Stand erhält, was er vor Fehler heket,  
Wie auch der öfftre Sieg der Völkern Stärke frist. S.25  
Er zeigt der Freyheit Wehrt, wie Gleichheit an den Gütern, S.26 285  
Und der Gesäzen Forcht des Standes Glük erhält,  
Er weist, wie die Gewalt selbst-herrschender Gebietern,  
Zuerst das Volk erdrückt und dann von selbstn fällt.  
Er rühmt der Eintracht Macht, und daß vereinte Kräfften,  
Auch an ein schwaches Land des Glükes Flügel hefften. 290

Vgl. Rousseau, Jean-Jacques „La nouvelle Heloise“(1760) Première Partie. Lettre 23: OEuvres complètes. Bibliothèque de la Pleiade. Tome 2. Paris (Gallimard) 1964. S.77/S.78/S.80/S.1387 und S.1390(Anmerkungen).

Tantôt d'immenses roches pendoient en ruines au dessus de ma tête. Tantôt de hautes et bruyantes cascades m'inondoient de leur épais brouillard. Tantôt un torrent éternel ouvroit à mes côtés un abime dont les yeux n'osoient sonder la profondeur. Quelquefois je me perdois dans l'obscurité d'un bois touffu. Quelquefois en sortant d'un gouffre une agréable

Vgl. Wordsworth „Ode Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood / Ode Andeutungen der Unsterblichkeit aus Erinnerungen der frühen Kindheit"(um 1803) Str.III-IV. V.35-36: Gedichte der englischen Romantik(3(6)47). S.142/S.143.

... thou happy Shepherd-boy! 35 ... du glücklicher Schäferjunge.

## IV

Ye blessed Creatures, ... 36 Ihr gesegneten Geschöpfe, ...  
Vgl. Wordsworths Vorwort(Preface) zu „Lyrical Ballads"(1798/2.Aufl. 1801/3.Aufl. 1802): Die englische Literatur 7. Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1983. S.304/S.305(Deutsche Übersetzung).

Humble and rustic life was generally chosen, because, in that condition, the essential passions of the heart find a better soil in which they can attain their maturity, are less under restraint, and speak a plainer and more emphatic language; ...

Das einfache und ländliche Leben wurde allgemein gewählt, weil in diesem Zustand die wesentlichen Leidenschaften des Herzens einen besseren Nährboden finden, in dem sie ihre Reife erlangen können, weniger Beschränkung unterliegen und eine einfachere und eindrucksvollere Sprache sprechen; ...

48)Thomson, James „The Seasons"(1726-30) ‚Summer'(1727) V.1438-45: Poetical Works. Oxford Standard Authors. London (Oxford Univ. Press) 1908. 6. Aufl. 1971. S.105-106.

Heavens! what a goodly prospect spreads around, S.105  
Of hills, and dales, and woods, and lawns, and spires, S.106 1440  
And glittering towns, and gilded streams, till all  
The stretching landskip into smoke decays!

Happy Britannia! where the Queen of Arts,  
Inspiring vigour, Liberty, abroad  
Walks unconfined even to thy farthest cots,  
And scatters plenty with unsparing hand. 1445

49) Vgl. (3(6)48).

50)Thomson „Liberty"(1735-36) Part V. The Prospect (1736). V.1-7: Poetical Works(3(6)48). S.392.

HERE interposing, as the Goddess paused;  
'O blest Britannia! in thy presence blest,  
Thou guardian of mankind! whence spring alone  
All human grandeur, happiness, and fame;  
For toil, by thee protected, feels no pain, 5  
The poor man's lot with milk and honey flows,  
And, gilded with thy rays, even death looks gay.

Vgl. Vergilius „Aeneis" Liber VI. V.792-5/V.851: Gedichte. Bd.1/Bd.2(Buch I-VI der Aeneis)/Bd.3(Buch VII-XII der Aeneis). Zürich (Weidmann) 1915(9. Aufl.)/1912(13. Aufl.)/1904(9. Aufl.). 1973(10. Aufl.)/(14. Aufl.)/(10. Aufl.). Bd.2. S.301/S.306.

Augustus ... : aurea condet  
saecula qui rursus Latio regnata per arva  
Saturno quondam; super et Garamantas et Indos  
proferet imperium: ... S.301 795  
S.306

tu regere imperio populos, Romane, memento 851

Vgl. Voltaire „Lettres philosophiques"(1734ff.) Lettre 8. Sur Parlement: Mélanges. Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1961. S.20.

Les membres du Parlement d'Angleterre aiment à se comparer aux anciens Romains autant qu'ils le peuvent. ...

Vgl. Voltaire „Lettres philosophiques" Lettre 10. Sur le Commerce: Mélanges(3(6)50). S.28.

- Wer mißt den äußern Glanz scheinbarer Eitelkeiten,  
Wann Tugend Müh zur Lust und Armut glücklich macht? S.4  
Das Schicksal hat euch hier kein Tempe zugesprochen, S.5 35  
Die Wolken, die ihr trinkt, sind schwer von Reif und Strahl;  
Der lange Winter kürzt des Frühlings späte Wochen,  
Und ein verewigt Eis umringt das kühle Tal;  
Doch eurer Sitten Wert hat alles das verbessert,  
Der Elemente Neid hat euer Glück vergrößert. 40
- 40) Haller „Die Alpen“ (Urfassung) Str.3. V.21-25: DNL-Haller(3(2)11). S.17.  
Ihr Schüler der Natur! gebohrn' und wahre Weisen!  
Die ihr auf Schweizer-Lands beschneyten Mauren macht,  
Ihr, und nur ihr allein kennt keine Zeit von Eisen,  
Weil Tugend Müh zur Lust, und Armuth glücklich macht;  
Das Schicksal hat euch zwar kein Tempe zugesprochen, 25
- (6) „GLÜCKSELIGER VERLUST“
- 41) Haller „Die Alpen“ Str.5. V.41-42: Reclam-Haller(3(1)2). S.5.  
Wohl dir, vergnügtes Volk! o danke dem Geschicke,  
Das dir der Laster Quell, den Überfluß, versagt;
- 42) Haller „Die Alpen“ Str.6. V.59-60: Reclam-Haller(3(1)2). S.5.  
Dann, wo die Freiheit herrscht, wird alle Mühe minder,  
Die Felsen selbst beblümt und Boreas gelinder. 60
- 43) Vgl. (3(10)91).
- 44) Haller „Die Alpen“ Str.7. V.61: Reclam-Haller(3(1)2). S.5.  
Glückseliger Verlust von schadenvollen Gütern!  
Vgl. Brockes „Das Firmament“ V.16-20: „Auszug der vornehmsten Gedichte  
aus dem Irdischen Vergnügen in Gott“(1738) Faksimile-Nachdruck. Stuttgart  
(Metzler) 1965. S.477.  
Mein gantzes Wesen ward ein Staub, ein Punct, ein Nichts,  
Und ich verlohrt mich selbst. Dieß schlug mich plötzlich nieder;  
Verzweiflung drohete der gantz verwirrten Brust:  
Allein, o heilsams Nichts! glückseliger Verlust!  
Allgegenwärt'ger Gott, in Dir fand ich mich wieder. 20
- 45) Hölderlin „Brod und Wein“ Str.7. V.119-122: Stuttgarter Ausgabe(3(2)13).  
Bd.2. S.94.  
... Indesses dünket mir öfters  
Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn, 120  
So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,  
Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?
- 46) Biblia. Novum Testamentum graece et latine. Stuttgart (Württembergische  
Bibelanstalt) 1930. S.8: Secundum Matthaeum. V. 3.  
Beati pauperes spiritu: quoniam ipsorum est regnum caelorum.
- 47) Pope, Alexander „Windsor Forest“(1713) V.39-42: Collected Poems. London  
(Everyman's Library) 1924(1.Aufl.). 1975. S.23.  
Here Ceres' gifts in waving prospect stand,  
And nodding tempt the joyful reaper's hand; 40  
Rich Industry sits smiling on the plains,  
And peace and plenty tell, a Stuart reigns.  
Vgl. Wordsworth, William „Lines/Zeilen Composed a Few Miles above Tintern  
Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour / Einige Meilen  
oberhalb von Tintern Abbey verfaßt, als ich während einer Reise wieder die  
Ufer des Wye besuchte. 13. Juli 1798“(1798) V.91: Gedichte der englischen  
Romantik. Englisch/Deutsch. Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1980.  
S.76/S.77.  
The still, sad music of humanity,  
Die stille, traurige Musik der Menschlichkeit ...

- Der Dinge Wert ist das, was wir davon empfinden;  
Vor seiner teuren Last flieht er zum Tode hin.
- 36) Hesiodvs. Carmina. Recensvit A. Rzach. 3.Aufl. 1913. Bibliotheca Teub-  
neriana. Stvtgardiae in aedibvs B.G.Tevbneri 1958. S.60-61: „Erga ... “  
V.109-117(S.60)/V.118ff.(S.61).  
Vgl. Hesiod. Deutsch nach Marg, Walter. Sämtliche Werke. Zürich/Stuttgart  
(Artemis) 1970. S.312: „ERGA“ V.109-119.
- Golden haben zuerst das Geschlecht hinfälliger Menschen  
Todfreie Götter geschaffen, die himmlische Häuser bewohnen. 110  
Das war zu Kronos' Zeit, als er noch König im Himmel.  
Und die lebten wie Götter und hatten nicht Kummer im Herzen,  
Fern von Mühen und frei von Not, nicht drückte das schlimme  
Alter auf sie, sondern allzeit behend an Beinen und Armen  
Lebten sie freudig in Festen, weitab von allen den Übeln; 115  
Starben, als käme ein Schlaf über sie. Und alle die Güter  
Waren ihr Teil; Frucht brachte der nahrungspendende Boden  
Willig von selbst, vielfältig und reich. Vollbrachten in Ruhe  
Gerne und froh ihre Werke, gesegnet mit Gütern in Fülle.  
Vgl. Ovidius „Metamorphoses“ Tusculum-Bücherei. Lateinisch/Deutsch nach  
Rösch, Erich. München (Heimeran) 1952. S.10(Liber I. V.89ff.)/S.11(Deut-  
sche Übersetzung). S.12(Liber I. V.108ff.)/S.13(Deutsch).
- Aurea prima sata est aetas, ... 89  
... S.10  
S.12
- mox etiam fruges tellus inarata ferebat,  
nec renovatus ager gravidis canebat aristis; 110  
flumina iam lactis, iam flumina nectaris ibant,  
flavaque de viridi stillabant ilice mella.  
... S.12  
S.11
- Erstes Alter ward das Goldene. Ohne Gesetz und  
Sühner wahrte aus eigenem Trieb es die Treu und das Rechte. 90  
... S.11  
S.13
- Ungepflügt trug bald auch des Bodens Früchte die Erde,  
ohne Brachen gilbte das Feld von hangenden Ähren. 110  
Bald von Milch und bald von Nectar gingen die Flüsse,  
gelber Honig tropfte aus grünender Eiche hernieder.
- 37) Hesiodos „Erga“ V.311: Carmina(3(5)36). S.72; Sämtliche Werke(3(5)36).  
S.320.
- Arbeit, die ist nicht Schande, das Nichtstun jedoch, das ist Schande.
- 38) Haller „Die Alban“ Str.3. V.21-30: Reclam-Haller(3(1)2). S.4.
- Beglückte güldne Zeit, Geschenk der ersten Güte,  
Oh, daß der Himmel dich so zeitig weggerückt!  
Nicht, weil die junge Welt in stetem Frühling blühte  
Und nie ein scharfer Nord die Blumen abgepflückt;  
Nicht, weil freiwillig Korn die falben Felder deckte 25  
Und Honig mit der Milch in dicken Strömen lief;  
Nicht, weil kein kühner Löw die schwachen Hürden schreckte  
Und ein verirrtes Lamm bei Wölfen sicher schlief;  
Nein, weil der Mensch zum Glück den Überfluß nicht zählte,  
Ihm Notdurft Reichtum war und Gold zum Sorgen fehlte! 30
- Vgl. Biblia Germanica 1545 (Deutsch nach Luther) Faksimile-Ausgabe. Stutt-  
gart (Deutsche Bibelgesellschaft) 1967/83. Teil I. S.CXX: Josua. V. 6.  
ein Land da milch vnd honig inne fleusst.
- 39) Haller „Die Alpen“ Str.4. V.31-40: Reclam-Haller(3(1)2). S.4-5.
- Ihr Schüler der Natur, ihr kennt noch güldne Zeiten!  
Nicht zwar ein Dichterreich voll fabelhafter Pracht;

## (5) „GÜLDNE ZEIT“

32) Hölderlin „Brod und Wein“ 4.Str. V.55: Stuttgarter Ausgabe(3(2)13).  
Bd.2. S.91.

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle,

33) Haller „Tagebuch seiner Beobachtungen ...“(3(2)10) Teil 1. S.368.  
Über J.G. Sulzers „Theorie der schönen Künste“(1772).

Wir können die Vollkommenheit unmöglich fühlen, die man den theokritischen Idyllen zuschreibt. Allerdings war die Sprache musikalisch. ... Aber der Geschmack fehlte dem Manne, und grobe Hirten verdienen nicht besungen zu werden. Die alten Patriarchen, und die Araber ihre Nachfolger, geben Muster ächter und dennoch edeldenkender Hirten, die keine Werke der Einbildung sind. ...

34) Haller „Die Alpen“ Str.49. V.481-490: Reclam-Haller(3(1)2). S.22.

O selig! wer wie ihr mit selbst gezogenen Stieren

Den angestorbnen Grund von eignen Äckern pflügt;

Den reine Wolle deckt, belaubte Kränze zieren

Und ungewürzte Speis aus süßer Milch vergnügt;

Der sich bei Zephyrs Hauch und kühlen Wasser-Fällen

485

In ungesorgtem Schlaf auf weichen Rasen streckt;

Den nie in hoher See das Brausen wilder Wellen,

Noch der Trompeten Schalle in bangen Zelten weckt;

Der seinen Zustand liebt und niemals wünscht zu bessern!

Das Glück ist viel zu arm, sein Wohlsein zu vergrößern.

490

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.48. V.471-480: DNL-Haller(3(2)11). S.32.

O selig, wer wie Ihr mit selbst-gezognen Stieren

Den angestorbnen Grund von eignen Aeckern pflügt.

Den reine Wolle dekt, belaubte Kränze zieren,

Und ungewürzte Speis aus süßer Milch vergnügt.

Den Zephyrs leis Gezisch bey kühlen Wasser-Fällen

475

In leichtem Schlaff gewiegt, auf weichen Rasen streckt.

Den nie in hoher See das Brausen wilder Wellen,

Noch der Trompeten-Schall in blut'gen Lagern weckt.

Der seinen Zustand liebt und ihn nicht wünscht zu bessern

Gewiß der Himmel kan sein Glücke nicht vergrößern.

480

35) Haller „Die Alpen“ Str.1. V.1-5: Reclam-Haller(3(1)2). S.3.

Versuchts, ihr Sterbliche, macht euren Zustand besser,

Braucht, was die Kunst erfand und die Natur euch gab;

Belebt die Blumen-Flur mit steigendem Gewässer,

Teilt nach Korinths Gesetz gehaune Felsen ab;

Umhängt die Marmor-Wand mit persischen Tapeten,

Vgl. „Die Alpen“(2.Aufl. 1734) Str.1. V.1-4: Hirzels Haller-Gedichte(3(1)2). S.300(Verzeichniß der Lesarten).

Geht, eitle Sterbliche, erfüllt die Luft mit Schlössern,

Theilt nach Korinthens Lehr gehaune Bergen auß,

Belebt der Gärten Pracht mit steigenden Gewässern,

Bedeckt mit Sammt den Leib und mit Porphyr das Hauß.

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.1. V.1-4; „Die Alpen“(„Versuch Schweizerischer Gedichte“ 2.Aufl. - 10.Aufl. 1734-1768) Str.2. V.11-14: DNL-Haller(3(2)11). S.17.

Die Seele macht ihr Glük, ihr sind die äussern Sachen,

Zur Lust und zum Verdruß, nur die Gelegenheit:

Ein wohlgesetzt Gemüht kan Galle süsse machen,

Da ein verwehnter Sinn auf alles Wermuth streut;

Vgl. „Die Alpen“(11.Aufl. 1777) Str.2. V.11-14: Reclam-Haller(3(1)2). S.

4.

Wann Gold und Ehre sich zu Clives Dienst verbinden,

Keimt doch kein Funken Freud in dem verstörten Sinn.

- Doch fühle ich zuweilen ein Sehnen  
Nach italienischen Himmeln und ein inneres Seufzen danach,  
Auf einem Alpengipfel wie auf einem Thron zu sitzen  
Und halb zu vergessen, was Welt oder Weltkind bedeutete.
- 27) Haller „Die Alpen“ Str.37. V.361-364: Reclam-Haller(3(1)2). S.17.  
Doch wer den edlern Sinn, den Kunst und Weisheit schärfen,  
Durchs weite Reich der Welt empor zur Wahrheit schwingt,  
Der wird an keinen Ort gelehrte Blicke werfen,  
Wo nicht ein Wunder ihn zum Stehn und Forschen zwingt.  
Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.36. V.351-4: DNL-Haller(3(2)11). S.28.  
Doch wer mit einem Aug, das Kunst und Weißheit schärfen,  
Den großen Bau der Welt, der Wesen Grund betracht,  
Der wird an keinen Ort gelehrte Blike werffen,  
Wo nicht ein Wunderwerk ihn staunend stehen macht.
- 28) Haller „Die Alpen“ Str.41. V.407-410: Reclam-Haller(3(1)2). S.19.  
Der schimmernde Kristall sproßt aus der Felsen Klüften,  
Blitzt durch die düstre Luft und strahlet überall.  
O Reichthum der Natur! verkriecht euch, welsche Zwerge:  
Europens Diamant blüht hier und wächst zum Berge! 410  
Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.40. V.397-400: DNL-Haller(3(2)11). S.30.  
Ein Felß von Edelstein, wo tausend Farben spielen  
Blitz durch die düstre Luft und strahlet überall.  
O Reichthum der Natur! verkriecht euch, welsche Zwerge,  
Europens Diamant blüht hier, und wächst zum Berge. 400
- 29) Haller „Die Alpen“ Str.45. V.441-450: Reclam-Haller(3(1)2). S.21.  
Verblendte Sterbliche! die, bis zum nahen Grabe,  
Geiz, Ehr und Wollust stets an eitlen Hamen hält,  
Die ihr der kurzen Zeit genau gezählte Gabe  
Mit immer neuer Sorg und leerer Müh vergällt,  
Die ihr das stille Glück des Mittelstands verschmähet 445  
Und mehr vom Schicksal heischt als die Natur von euch,  
Die ihr zur Notdurft macht, worum nur Torheit flehet:  
O glaubts, kein Stern macht froh, kein Schmuck von Perlen reich!  
Seht ein verachtet Volk zur Müh und Armut lachen,  
Die mäßige Natur allein kann glücklich machen. 450  
Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.44. V.431-40: DNL-Haller(3(2)11). S.31.  
Verblendte Sterbliche! die biß zur nahen Baare  
Geiz, Ehr' und Wollust stäts an eiteln Hamen hält,  
Die ihr die vom Geschik bestimmte Handvoll Jahre  
Mit immer neuer Sorg' und lährer Müh vergällt,  
Die ihr die Seelen-Ruh in stäten Stürmen suchet, 435  
Und an die Klippen nur das irre Steuer richt,  
Die ihr was schadet, wünscht, und was euch nutzt, verfluchet,  
Ach öffnet ihr zuletzt die schlaffen Augen nicht!  
Seht ein verachtet Volk bey Müh und Armuth lachen,  
Und lernt, daß die Natur allein kan glücklich machen. 440
- 30) Haller „Morgengedanken“(3(3)20) V.41-48: DNL-Haller(3(2)11). S.4.  
Doch, dreimal großer Gott! es sind erschaffne Seelen  
Für deine Thaten viel zu klein;  
Sie sind unendlich groß, und wer sie will erzählen,  
Muß, gleich wie du, ohn' Ende sein!  
O Unbegreiflicher! ich bleib' in meinen Schranken, 45  
Du, Sonne! blendst mein schwaches Licht;  
Und wem der Himmel selbst sein Wesen hat zu danken,  
Braucht eines Wurmes Lobspruch nicht.
- 31) Vgl. (3(4)30).

22)Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 7.Buch: Werke(3(1)3). Bd.9. S.264.  
Für den, der etwas Produktives in sich fühlte, war es ein verzweiflungs-  
voller Zustand. ...

23)Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 7.Buch: Werke(3(1)3). Bd.9. S.263.  
Nach diesen sämtlichen Erfordernissen wollte man nun die verschiedenen  
Dichtungsarten prüfen, und diejenige, welche die Natur nachahmte, sodann  
wunderbar und zugleich auch von sittlichem Zweck und Nutzen sei, sollte  
für die erste und oberste gelten. Und nach vieler Überlegung ward end-  
lich dieser große Vorrang, mit höchster Überzeugung, der Äsopischen Fa-  
bel zugeschrieben. So wunderbar uns jetzt eine solche Ableitung vor-  
kommen mag, so hatte sie doch auf die besten Köpfe den entschiedensten  
Einfluß. ...

24)Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 7.Buch: Werke(3(1)3). Bd.9. S.263-264.  
Breitinger war ein (S.263/S.264) tüchtiger, gelehrter, einsichtsvoller  
Mann, dem, als er sich recht umsah, die sämtlichen Erfordernisse einer  
Dichtung nicht entgingen, ja, es läßt sich nachweisen, daß er die Mängel  
seiner Methode dunkel fühlen mochte. ... Zu seiner völligen Rechtfertigung  
aber mag dienen, daß er, von einem falschen Punkte ausgehend,  
nach beinahe schon durchlaufenem Kreise, doch noch auf die Hauptsache  
stößt, und die Darstellung der Sitten, Charaktere, Leidenschaften, kurz,  
des inneren Menschen, auf den die Dichtkunst doch wohl vorzüglich ange-  
wiesen ist, am Ende seines Buchs gleichsam als Zugabe anzuraten sich ge-  
nötigt findet. ... Hier gedenken wir nur Günthers, ... in Gelegen-  
heitsgedichten ...

25) Vgl. (3(3)24).

(4) „REICHTUM DER NATUR“

26)Haller „Die Alpen“ Str.32. V.311-4: Reclam-Haller(3(1)2). S.15.

Dann hier, wo Gotthards Haupt die Wolken übersteiget  
Und der erhabnern Welt die Sonne näher scheint,  
Hat, was die Erde sonst an Seltenheit gezeuget,  
Die spielende Natur in wenig Lands vereint;

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.31. V.301-4: DNL-Haller(3(2)11). S.26.

Dann hier, wo Gotthardts Haupt die Wolken übersteiget,  
Und der erhobnen Welt die Sonne näher scheint,  
Hat was die Erde sonst an Seltenheit gezeuget,  
Die spielende Natur in wenig Lands vereint.

Vgl. Goethes Handschrift vom 13. Juli 1775 (3(10)94).

... , grauer Gotthard! wie vor jedem großen Gedanken der Schöpfung, ...

Vgl. Goethe „Wilhelm Meisters Lehrjahre“(1796) III.Buch. Kap.1: Werke(3  
(1)3). Bd.7. S.145.

Kennst du das Land, wo die Zitronen blühen,

Vgl. Keats „Happy is England ... / Glücklich ist England ...“(1817) V.  
1-8: Gedichte der englischen Romantik. Englisch/Deutsch. Stuttgart (Reclam-  
Universal-Bibliothek) 1980. S.332/S.333.

Happy is England! I could be content

To see no other verdure than its own;

To feel no other breezes than are blown

Through its tall woods with high romances blent:

Yet do I sometimes feel a languishment

For skies Italian, and an inward groan

To sit upon an Alp as on a throne,

And half forget what world or worldling meant.

Glücklich ist England! Ich könnte zufrieden sein,

Kein anderes Grün zu sehen als sein eigenes;

Keine anderen Brisen zu fühlen als die, welche

Durch seine hohen Wälder wehen, mit edlen Romanzen vermischt.

5

S.332

S.333

19) Metzler-Haller(3(1)3). S.53-54.

Unterdessen hatten BODMER und BREITINGER Haller als Kronzeugen ihrer neuen Dichtungsauffassung, die sie in ihren Schriften der Gottschedischen gegenüberstellen, gefeiert. In Breitingers »Kritischer Dichtkunst«(1740) werden Hallers Gedichte vorzüglich als Exempel herangezogen: der Zürcher Kunstrichter lobt die poetische Malerei(I, S.23ff.), seine Verwendung der Machtwörter(II, S.65ff.), die Partizipialkonstruktionen(II, S.149), den häufigen Gebrauch der Beiwörter(II, S.266ff.) und bewundert die herzrührende Schreibart gewisser Partien(II, S.381 (Metzler S.53/S.54) und 393f.). In der »Kritischen Abhandlung von den ... Gleichnissen«(1740) hatte er die Sparsamkeit und Wahrheit der Bildersprache wie die Kürze der Diktion Hallers lobend hervorgehoben. ...

20) Haller „Die Alpen“ Str.38. V.375: Reclam-Haller(3(1)2). S.18.

Die Luft erfüllet sich mit reinen Ambra-Dämpfen,

Vgl. „Die Alpen“(Urfassung) Str.37. V.365: DNL-Haller(3(2)11). S.28.

Die Luft erfüllet sich mit lauen Ambra-Dämpfen,

Vgl. „Die Alpen“ Vorbemerkung: Reclam-Haller(3(1)2). S.3.

Man sieht auch ohne mein Warnen noch viele Spuren des Lohensteinischen Geschmacks darin.

Vgl. Haller „Morgengedanken“(1725) V.5/V.11/V.15f.: DNL-Haller(3(2)11). S.3.

Der Himmel färbet sich mit Purpur und Saphiren,

5

...

Die falben Wolken glühn von blitzendem Rubine,

11

...

Der Lilien Ambradampf belebt zu unsrer Wonne

15

Der zarten Blätter Atlasgrau.

Vgl. Gottsched „Die Vernünftigen Tadlerinnen“(1725-26) Teil 1. XXXIV(22. August 1725): Minamiozi, Shin-iti „Studien zur Deutschen Literatur im 18. Jahrhundert“ Tokyo (Sansyuya) 1983. S.16.

... hochgetriebene Redens-Arten ...

Vgl. Bodmer/Breitinger „Die Discourse der Mahlern“ Erster Discours des II. Theils (Bodmer) über „Das Reich der Freude“. S.4/S.6: Minamiozi „Studien ...“(3(3)20) S.15f.

mit Hügeln .... / auf welchen Blumen ihre Hälse hervorreckten / die die heitersten Strahlen der Morgenröthe nachmahlten .... und die Gerüche von Balsam / Weyrauch und Myrrhen in unsere Nasen bließ. (S.4/S.6: S.15/S.16) unsere Blumen / die ungepflegt hier wie Rubinen brennen / dort ihre Blätter mit Atlaß und Damast schmücken.

Vgl. Klein, Johannes: Geschichte der deutschen Lyrik von Luther bis zum Ausgang des zweiten Weltkrieges. Wiesbaden (Franz Steiner) 1. Aufl. 1957. 2. erweiterte Aufl. 1960. S.189.

Neukirch (1665-1729), der Hofmannswaldaus und Lohensteins Stil einst nachgeahmt hatte, durch die Begegnung mit dem ... Canitz aber eine Wendung zur Klarheit und Nüchternheit erfuhr, bekannte in dem neuen Ton, der bereits Zeit und Stil der Aufklärung verrät, ...

21) Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 7. Buch: Werke(3(1)3). Bd.9. S.262.

Man gab uns Gottscheds „Kritische Dichtkunst“ in die Hände; sie war brauchbar und belehrend genug: denn sie überlieferte von allen Dichtungsarten eine historische Kenntnis, sowie vom Rhythmus und den verschiedenen Bewegungen desselben; ... Die Schweizer traten auf als Gottscheds Antagonisten; sie mußten doch also etwas anderes tun, etwas Besseres leisten wollen: so hörten wir denn auch, daß sie wirklich vorzüglicher seien. Breitingers „Kritische Dichtkunst“ ward vorgenommen. Hier gelangten wir nun in ein weiteres Feld, eigentlich aber nur in einen größeren Irrgarten, ...



Wenn es nicht aus der Seele dringt  
Und mit urkräftigem Behagen  
Die Herzen aller Hörer zwingt.

14)Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 4.Aufl. 1748. Vorrede: Hirzels  
Haller-Gedichte(3(1)2). S.248-249: Metzler-Haller(3(1)3). S.20 etc.

Ich hatte indessen die englischen Dichter mir bekannter gemacht und von  
denselben die Liebe zum Denken und den Vorzug der schweren Dichtkunst an-  
genommen. Die philosophischen Dichter, deren Größe ich bewunderte, ver-  
drangen (S.248/S.249) bald bey mir das geblähte und aufgedunsene Wesen  
dess Lohensteins, der auf Metaphoren wie auf leichten Blasen schwimmt.

Hierauf entstund bei mir die neue Art zu Dichten, die so vielen Deut-  
schen zu missfallen das Unglück gehabt hat, die ich aber so wenig bereue,  
daß ich wünschen möchte, noch viel mehr Gedanken in viel mindre Zeilen  
gebracht zu haben. ...

15)Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 7.Buch: Werke(3(1)3). Bd.9. S.269.

Bei diesem Umgange wurde ich durch Gespräche, durch Beispiele und durch  
eignes Nachdenken gewahr, daß der erste Schritt, um aus der wäbrigen,  
weitschweifigen, nullen Epoche sich herauszuretten, nur durch Bestimm-  
theit, Präzision und Kürze getan werden könne. ...

16)Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 7.Buch: Werke(3(1)3). Bd.9. S.269-270.

Haller und Ramler waren von Natur zum Gedrängten geneigt; Lessing und  
Wieland sind durch Reflexion dazu geführt worden. ... Klopstock, in den  
ersten Gesängen der „Messiade“, ist nicht ohne Weitschweifigkeit; in den  
Oden und anderen kleinen Gedichten erscheint er gedrängt, so auch in sei-  
nen Tragödien. Durch (S.269/S.270) seinen Wettstreit mit den Alten, be-  
sonders dem Tacitus, sieht er sich immer mehr ins Enge genötigt, wodurch  
er zuletzt unverständlich und ungenießbar wird. ...

17) Vgl. (3(2)16).

Vgl. Günther „Form und Sinn“(3(1)6) S.108.

Auf Hallers erste folgte Goethes zweite Stufe. Goethe erkannte zutiefst  
und setzte es dichterisch in die Tat um, daß alles, was der Mensch unter-  
nimmt — er braucht das Wort, von Hamann redend, doch gilt es für ihn in-  
sonderlich — aus «sämtlichen vereinten Kräften» entspringen muß („Dich-  
tung und Wahrheit“ 12.Buch). Aus solchem Ganzen herauschaffend, verlieh  
er dem Dichterworte eine symbolhaftige Lebensfülle, die es vorher nicht  
besessen. Hölderlin — dies sei noch beigefügt — fand die dritte Stufe,  
fand sie, lebte sie dar: die Dichtigkeit vergeistigte sich, und in und  
zwischen den Worten sank der Geist ins Bodenlose, in die unabsehbaren In-  
nenräume des Schweigens, aus denen der Sprache eine ganz neue Gedrängt-  
heit zuflöß. ...

Vgl. Goethe „Dichtung und Wahrheit“ 12.Buch: Werke(3(1)3). Bd.9. S.514.

Das Prinzip, auf welches die sämtlichen Äußerungen Hamanns sich zurück-  
führen lassen, ist dieses: „Alles, was der Mensch zu leisten unternimmt,  
es werde nun durch Tat oder sonst hervorgebracht, muß aus sämtlichen ver-  
einigten Kräften entspringen; alles Vereinzelte ist verwerflich.“ ...

(3) „DER INNERE MENSCH“

18)Metzler-Haller(3(1)3). S.54.

GOTTSCHED selbst brachte in der dritten Auflage seiner »Critischen Dicht-  
kunst«(1742) einige versteckte Seitenhiebe gegen die Dunkelheit von Hal-  
lers Gedichten an, gegen die BODMER in seiner Abhandlung »Von der Schreib-  
art in Miltons verlorenem Paradiese«(»Sammlung Critischer ... Schriften«  
III, 1742) auftrat, indem er die kleinliche Beckmesserei der Leipziger ab-  
lehnte und Hallers poetische Mittel von einem höheren Standpunkt aus mit  
denen Miltons in Vergleich setzte. Auf diese Weise wurde Haller immer  
mehr zu einem zentralen Streitobjekt innerhalb dieser literarischen Feh-  
de zwischen Zürich und Leipzig, ohne daß er selbst in die Streitigkeiten  
eingriff. ...

Klage, mit energischer, fast bitterer Satyre zeichnet er die Verirrungen des Verstandes und Herzens und mit Liebe die schöne Einfalt der Natur. Nur überwiegt überall zu sehr der Begriff in seinen Gemälden, so wie in ihm selbst der Verstand über die Empfindung den Meister spielt. Daher lehrt er durchgängig mehr, als er darstellt, und stellt durchgängig mit mehr kräftigen als lieblichen Zügen dar. Er ist groß, kühn, feurig, erhaben; zur Schönheit aber hat er sich selten oder niemals erhoben. ...  
9) Vgl. (3(1)8).

## (2) „DIE NEUE ART ZU DICHTEN“

10) Haller „Tagebuch seiner Beobachtungen über Schriftsteller und über sich selbst“ (Bern. Nicolaus Emanuel Haller. 1787) Frankfurt am Main (Athenäum) Faksimile-Nachdruck. 1971. Teil 2. S.119.

... Hagedorn ist in eben dem Jahre, aber sechs Monate früher als ich, gebohren. Beyde kamen wir in eine Zeit, da die Dichtkunst aus Deutschland sich verlohren hatte. Denn Brokes und Pietsch hatten einzelne, und jener zuweilen grosse Schönheiten, er überlies sich aber allzusehr der unendlichen Fertigkeit, mit welcher ihm die Reime aus der Feder giengen. ... und ich schrieb eine Unendlichkeit von Versen von allen Arten, ehe ich fünfzehnjährig wurde; meine Begierde war unersättlich; ich ahmte bald Brokes, bald Lohenstein, und bald andere niedersächsische Dichter nach, indem ich eines von ihren Gedichten zum Muster vor mir nahm, und ein anderes ausarbeite, das nichts dem Muster nachgeschrieben, und doch ihm ähnlich seyn sollte. ...

(Brief an Eberhard Fr. Gemmingen vom März 1772: Sammlung kleiner Halle-rischer Schriften. 2.Aufl. Teil 3. S.337ff.)

11) Haller „Die Alpen“ Str.28. V.280: Reclam-Haller(3(1)2). S.14.

Die Rührung macht den Vers und nicht gezählte Töne.

Vgl. „Die Alpen“ (Urfassung) Str.27. V.270: Deutsche National-Litteratur (=DNL). Bd.41. 2.Abt. Haller ... Auswahl. Berlin/Stuttgart (Spemann) um 1885. Faksimile-Nachdruck. Tokyo (Sansyusya) 1974. S.25.

Er denket wie ein Hirt, und schreibet wie er denket.

12) Haller „Die Alpen“ Str.2. V.13: Reclam-Haller(3(1)2). S.4. Vgl.(3(7)54).

Der Dinge Wert ist das, was wir davon empfinden

Vgl. „Die Alpen“ (Urfassung) Str.1. V.3: DNL-Haller(3(2)11). S.17.

Ein wohlgesetzt Gemüht kan Galle süsse machen,

13) Haller „Über den Ursprung des Übels“ (3(1)2) Vorbemerkung: Reclam-Haller (3(1)2). S.53.

... Aber ein Dichter ist kein Weltweiser, er malt und rührt und erwei-set nicht. ...

Vgl. Streicher, Andreas „Schillers Flucht von Stuttgart und Aufenthalt in Mannheim von 1782 bis 1785“ Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1968. S.19.

... Aber eine innere, beruhigende Stimme rief ihm dann zu: ist der gro-ße Arzt, der große Naturforscher Haller nicht auch zugleich ein großer Dichter? Wer besang die Wunder der Schöpfung schöner und herrlicher als Haller?

Du hast den Elefant aus Erden aufgetürmet,

Und seinen Knochenberg beseelt,

war ein Ausdruck, den Schiller nebst so vielen andern dieses Dichters nicht nur damals, sondern auch dann noch mit Bewunderung anführte, als seine erste Jugendzeit längst verfliegen war. ...

Vgl. Hölderlin „Deutscher Gesang“ (1801) V.20: Sämtliche Werke. Stuttgart (Kohlhammer) 1946-77 (Register 1985). Bd.2. S.202.

Den Seelengesang.

Vgl. Goethe „Faust“ 1.Teil. 1806. V.534-537: Werke(3(1)3). Bd.3. S.25.

Wenn ihr's nicht fühlt, ihr werdet's nicht erjagen,

Vgl. Gottsched: Leipziger Gelehrte Zeitungen. 1732: Hirzels Haller-Gedichte(3(1)2). S.CXX.

Es ist diese Probe so gar wohlgerathen, daß ein jedweder Leser derselben wünschen wird, mehr dergleichen aus diesem Lande zu sehen. Denn die Gedanken sind mehrentheils neu, erhaben und gründlich, die Worte wohlge wählt und nachdrücklich, und die Reimen rein und fließend. Der ungenannte Verfasser solle dem Vernehmen nach der berühmte Herr Muralt seyn, welcher vor etlichen Jahren die mit so vielem Beyfall aufgenommene Lettres sur les Anglois et les François geschrieben hat. ...

5)Descartes „Discours de la Méthode“(1637) Aufgrund der von Adam und Tannery hrsg. Standard-Ausgabe der „Oeuvres de Descartes“(Bd.1). Übersetzt u. hrsg. v. Gäbe, Lüder. Philosophische Bibliothek 261. Hamburg (Felix Meiner) 1960. S.62(Quatrième Partie)/S.63(IV.Teil).

Car, premièrement, cela même que j'ai tantôt pris pour une règle, à savoir que les choses que nous concevons très clairement et très distinctement, sont toutes vraies, n'est assuré qu'à cause que Dieu est ou existe, et qu'il est un être parfait, et que tout ce qui est en nous vient de lui. D'où il suit que nos idées ou notions, étant des choses réelles, et qui viennent de Dieu, en tout ce en quoi elles sont claires et distinctes, ne peuvent en cela être que vraies. ...

Denn erstens ist sogar das, was ich gerade als Regel angenommen habe, daß nämlich die Dinge, die wir uns sehr klar und sehr deutlich vorstellen, alle wahr sind, nur gesichert, weil Gott ist oder existiert und weil er ein vollkommenes Wesen ist und alles in uns von ihm herkommt. Woraus folgt, daß unsere Vorstellungen oder Begriffe, die wirkliche Gegenstände sind und von Gott stammen, soweit sie klar und deutlich sind, nur wahr sein können; ...

6)Frey „Haller und seine Bedeutung ...“(3(1)3) S.119: Günther, Werner „Zu Struktur und Sprache von Hallers «Alpen»“(„Form und Sinn. Beiträge zur Literatur- und Geistesgeschichte“ Bern/München. Francke 1968. S.89-110) S. 104

... hin und her einreißenden finsternen und gezwungenen Wesen in der poetischen Schreibart ...

7)Lessing „Laokoon“ Kap.XVII: Werke in 25 Teilen. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 1925/1929/1935. Hildesheim (Olms) Faksimile-Nachdruck. 1970. Teil 4. S.368. Vgl. (3(10)88).

Ich höre in jedem Worte den arbeitenden Dichter, aber das Ding selbst bin ich weit entfernt zu sehen.

8)Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“(1795-96): Werke. Nationalausgabe. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) Bd.20. 1962. S.453f. Noch, ich gestehe es, kenne ich kein Gedicht in dieser Gattung, weder aus älterer noch neuerer Litteratur, welches den Begriff, den es bearbeitet, rein und vollständig entweder bis zur Individualität herab oder bis zur Idee hinaufgeführt hätte. Der gewöhnliche Fall ist, wenn es noch glücklich geht, daß zwischen beyden abgewechselt wird, während daß der abstrakte Begriff herrschet, und daß der Einbildungskraft, welche auf dem poetischen Felde zu gebieten haben soll, bloß verstattet wird, den Verstand zu bedienen. Dasjenige didaktische Gedicht, worinn der Gedanke selbst poetische wäre, und es auch bliebe, ist noch zu erwarten. Was hier im allgemeinen von allen Lehrgedichten gesagt wird, gilt auch von den Hallerischen insbesondere. Der Gedanke selbst ist kein dichterischer Gedanke, aber die Ausführung wird es zu- (S.453/S.454) weilen, bald durch den Gebrauch der Bilder bald durch den Aufschwung zu Ideen. Nur in der letztern qualität gehören sie hieher. Kraft und Tiefe und ein pathetischer Ernst charakterisiren diesen Dichter. Von einem Ideal ist seine Seele entzündet, und sein glühendes Gefühl für Wahrheit sucht in den stillen Alpen thälern die aus der Welt verschwundene Unschuld. Tief führend ist seine

## TAGESANBRUCH DER DEUTSCHEN GEDANKENLYRIK

- Hallers „Versuch Schweizerischer Gedichte“(1732-77) -

(3) HALLERS „ALPEN“(1729)

## QUELENNACHWEIS

(1) „EHRENSÄULEN“

1) Kleist, Ewald „Der Frühling“(1749) V.440-445: Sämtliche Werke. Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1971. S.54/S.56.

... Tauch in die Farben Aurorens 440

Mahl mir die Landschaft, o du! aus dessen ewigen Liedern

Der Aare Ufer mir duften und vor den Angesicht prangen, S.54

Der sich die Pfeiler des Himmels die Alpen die er besungen S.56

Zu Ehrensäulen gemacht. Wie blitzt die streifichte Wiese

Von Demant ähnlichen Tropfen! ... 445

2) Haller, Albrecht „Über den Ursprung des Übels“(1834) I. Buch. V.9-15: Die Alpen und andere Gedichte. Aufgrund der „Gedichte“(Frauenfeld. Huber 1882), hrsg. v. Hirzel, Ludwig. Der Auswahl und die Hrsg. v. Elschenbroich, Adalbert. Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1965. S.54.

Dir Hügel decken grüne Wälder,

Wodurch der falbe Schein der Felder 10

Mit angenehmem Glanze bricht;

Dort schlängelt sich durchs Land, in unterbrochnen Stellen,

Der reinen Aare wallend Licht;

Hier lieget Nüchterns Haupt in Fried und Zuversicht

In seinen nie erstiegenen Wällen. 15

3) Frey, Adolf „A. Haller und seine Bedeutung für die deutsche Literatur“(1879) S.111f./S.113: Siegrist, Christoph „A. Haller“(Sammlung Metzler. Bd. 57) Stuttgart (Metzler) 1967. S.57.

Tatsächlich wurde die eigentliche Bedeutung Hallers immer stärker anerkannt, und es ist wohl nicht übertrieben, wenn ADOLF FREY feststellt, daß dieser von 1735 bis zum Auftreten Klopstocks der angesehenste deutsche Dichter war (S.113). Seine Gedichte mußten immer wieder neu aufgelegt werden, und viele zeitgenössische Berichte zeigen, wie man sie auswendig gewußt und auf Reisen mitgenommen hat (s. Frey, S.111f.). ...

Vgl. Goethe „Dichtung und Wahrheit“(1811-14) II. Teil. Buch 6-7 über das Jahr 1765: Werke. Hamburger Ausgabe. München (Beck/dtv) 1981/82. Bd.9. S. 254/S.255//S.268.

Das Gottschedische Gewässer hatte die deutsche Welt mit einer wahren Sündflut überschwenmt, welche sogar über die höchsten Berge hinaufzusteigen drohte. (S.254/S.255) ... Und so waren mir in kurzer Zeit die schönen bunten Wiesen in den Gründen des deutschen Parnasses, wo ich so gern lustwandelte, unbarmherzig niedergemäht und ich sogar genötigt, das trocknende Heu selbst mit umzuwenden und dasjenige als tot zu verspotten, was mir kurz vorher eine so lebendige Freude gemacht hatte. ... (S.255/S.268)

... der ansehnliche Altvater ...

4) Hirzels Haller-Gedichte(3(1)2). S.CCXXIII; Metzler-Haller(3(1)3). S.56: Gottsched „Vorrede zu Neukirchs Gedichten“(1744)

Allein wie ändert sich der Zeiten schlimmer Lauf!

Es wächst ein neu Geschlecht verführter Sängers auf.

Der Alpen stäter Schnee erkältet ihren Busen,

Zum Stey ist ihr Parnaß und Feyen sind die Musen.

So starr und ungelenk St. Gotthards Eis je war,

Stellt auch ihr steifer Vers die kalten Bilder dar.

So Sinn als Einfall sind Gespenster des Verstandes,

Sie irren in der Nacht des nie verklärten Landes,

Darinn kein Auge sieht, das nicht den Eulen gleicht,

Dem hellen Tag entflieht und nur ins Dunkle weicht.

## HALLER'S "ALPS" (1729)

— The dawn of the German lyric of thoughts (3) —

Katsumi TAKAHASHI

## ABSTRACT

Haller's "Alps" are regarded as a lyric of nature, a poetic picture or a perspective poem. His landscape painting, however, is closely connected with the didactical elements, which yet mostly remain to draw the moral. But at the same, they have a pure development of lyric thoughts in germ. In this respect, the poem deserves to be praised with Goethe's admiration for Lessing's "Laocoön": "We are carried away by this work from the domain of a miserable intuition into the free fields of thoughts". Although the matter is nature, description or outlook, Haller does not round off all these externals by aiming at perfection of "thing itself". Instead of this, we take a task upon ourselves, to look for a "development of inner perfections", that is peculiar to the European conscience. This is the reason why it does not suffice for us to enjoy the plenitude of concrete images of Haller's "Alps". We must rather make researches into the progress of ideas, which penetrates the whole work.

To my mind, the essential idea of the poem is to confirm the "happy loss" (1.61) of the "golden Age" (1.21) in the Swiss natural richness: the alpine "many-coloured plants" (1.367), the flower of "noble gentian" (1.381), the "glimmering crystal" (1.407), the "river of gold" (1.437) etc. These "riches of Nature" (1.409) correspond to the "moral value" (1.39) of the Alps' inhabitants: "Even the rocks themselves bloom" (1.60).

The modest blooming on the sheer cliffs already symbolizes the bliss of the "gratified people" (1.41), who are destined to "refuse the source of vices, the profusion" (1.42). While the profuse abundance is peculiar to the pomp of the "Bourbon dynasty's Paradise", Haller with a multitude of talents gives full play to his profuse ability in the interior abundance. In quest of a mental "development of inner perfections", the religious poet overcomes his own spiritual "profusion" and considers the "happy loss" of the "gratified people" as the ideal of the humanity to come. This concept "happy loss" doubles the parts of the "blest Greece" (1.55) and the "lean time" (1.122) in Hölderlin's "Bread and Wine" (1800-1801): "Blessed are the poor in spirit . . ." ("Gospel according to Matthew" 5. 3).

«LES ALPES» DE HALLER EN 1729

— L'aube de la lyrique d'idées en allemand (3) —

Katsumi TAKAHASHI

SOMMAIRE

«Les Alpes» de Haller sont considérées comme une lyrique de la nature, une peinture poétique ou une poésie de perspective. Étant donné que dans les «Alpes» les descriptions de paysages et la poésie d'idées constituent une unité, nous ne pouvons pas faire ici abstraction d'une évolution interne qui part de la poésie dogmatique pour aboutir à une lyrique de pensées. Si l'on attache de l'importance à cette évolution d'idées, cette poésie mérite aussi l'éloge que Goethe a fait de «Laocoon» de Lessing (1766): «cette œuvre nous arrache au domaine de considérations sans envergure pour nous introduire dans les vastes horizons de la pensée». Bien que nous trouvions dans cette poésie nature, description et perspective, chez Haller l'extérieur ne se borne pas à «la chose elle-même». Il serait préférable d'y chercher une «évolution des perfections internes» qui est particulière à la conscience européenne. C'est pourquoi il ne nous suffit pas de jouir de la plénitude des images concrètes pour interpréter cette poésie; nous sommes contraints de rechercher dans les profondeurs de l'esprit poétique une trame rationnelle qui pénètre l'œuvre tout entière.

Je crois que l'idée fondamentale de la poésie est de constater «l'heureuse perte» (vers 61) de «l'âge d'or» (vers 21) dans la richesse naturelle qu'offrent les Alpes. À la «richesse de la nature» (vers 409) et aux «mœurs valeureuses» (vers 39) des populations alpines correspondent essentiellement en haute montagne les «herbes décorées de mille couleurs» (vers 367), telles que la fleur de la «noble gentiane» (vers 381), bien qu'on y trouve aussi le «cristal étincelant» (vers 407) et le «courant doré» (vers 437): «Même les rochers sont couverts de fleurs» (vers 60).

La modeste floraison sur les rochers escarpés symbolise déjà la félicité du «peuple satisfait» (vers 41) auquel le destin «refuse la source des vices, la surabondance» (vers 42). Tandis que l'abondance superficielle s'exprime dans la pompe du «paradis bourbonien» (vers 298), Haller avec ses dons multiples déploie des talents divers dans une sorte de surabondance intérieure. À la recherche d'une «évolution des perfections internes» de l'esprit, le religieux poète surmonte finalement sa propre surabondance spirituelle et propose cette «heureuse perte» des Alpes comme l'idéal de l'humanité future. Cette «heureuse perte» le conduira plus tard, d'une part à la «Grâce bienheureuse» (vers 55), et d'autre part au «temps des tribulations» (vers 122) dans «Le Pain et le vin» de Hölderlin (1800-01): «Heureux les pauvres en esprit . . .» («Évangile selon Matthieu» 5. 3).

## HALLERS „ALPEN“ (1729)

## — Der Tagesanbruch der deutschen Gedankenlyrik (3) —

Katsumi TAKAHASHI

## ZUSAMMENFASSUNG

Hallers „Alpen“ (1729) lassen sich natürlich als Naturlyrik, als poetische Malerei oder als perspektive Poesie auffassen. Da aber „in den ‚Alpen‘ Landschaftsschilderung und Ideendichtung ein Einheit bilden“ (3 (10) 90), können wir hier auch die innere Entwicklung einer Lehrdichtung zu Gedankenlyrik beobachten. In dieser Hinsicht verdiente das Gedicht Goethes Lob über Lessings „Laokoon“ (1766), daß „dieses Werk uns aus der Region eines kümmerlichen Anschauens in die freien Gefilde des Gedankens“ hinreißt („Dichtung und Wahrheit“ Buch 8 : 3 (10) 95). Obwohl es im Gedicht um Natur, um Beschreibung und Ausblicke geht, rundet sich all dieses Äußerliche bei Haller niemals zu einem „Ding selbst“ (3 (1) 7). Stattdessen werden wir gefordert, darin nach einer „Entwicklung der innern Vollkommenheiten“ (3 (10) 88) zu suchen, die wohl eine Eigenart eines wie auch immer konzipierten europäischen Bewußtseins darstellt. Darum genügt es nicht, genußvoll die Fülle konkreter Bilder zu interpretieren, sondern wir sind genötigt, den Ideengängen nachzuspüren, die sich in tieferen Schichten durch das ganze Werk ziehen.

Der gedankliche Kern des Gedichtes besteht m. E. darin, daß Haller die karge Natur der Alpen als Reichtum auffaßt und darum den Verlust der „güldnen Zeit“ (V. 21) als einen „glückseligen“ (V. 61) empfindet. Dem „Reichtum der Natur“ (V. 409), etwa den „buntgeschmückten Kräutern“ (V. 367) im Hochgebirge oder der Blüte vom „edlen Enziane“ (V. 381), aber auch dem „schimmernden Kristall“ (V. 407) oder dem „Strom von Gold“ (V. 437) entspricht der „Sitten Wert“ (V. 39) der Alpenbewohner: „Die Felsen selbst“ sind „beblümt“ (V. 60).

Dies bescheidene Erblühen im steilen Fels steht im Einklang mit dem „vergnügten Volk“ (V. 41), dem das Schicksal „der Laster Quell, den Überfluß versagt“ (V. 42). Zum äußeren „Überfluß“, der Pracht von des bourbonischen „Welschlands Paradies“ (V. 298), gesellt sich aber auch ein „innerer Überfluß“, dem vielseitig begabten Haller nur allzu vertraut. Auf der Suche nach einer „Entwicklung der innern Vollkommenheiten“ überwindet aber der religiöse Dichter schließlich seinen eigenen seelischen „Überfluß“ und sieht so in der glückspendenden Kargheit der Alpennatur ein Idealbild für die zukünftige Menschheit. Dieser „glückselige Verlust“ wird später einerseits im Bild vom „seeligen Griechenland“ (V. 55), andererseits im Begriff der „dürftigen Zeit“ (V. 122) in Hölderlins „Brod und Wein“ (1800—01: 3 (5) 32/(6) 45) wieder aufgegriffen und weiter durchdacht: „Selig sind / die da geistlich arm sind“ („Evangelium des Matthäus“ 5.3 : 3 (6) 46).

DER TAGESANBRUCH DER DEUTSCHEN GEDANKENLYRIK (3)

— Hallers „Alpen“ (1729) —

L'AUBE DE LA LYRIQUE D'IDÉES EN ALLEMAND (3)

— «Les Alpes» de Haller en 1729 —

THE DAWN OF THE GERMAN LYRIC OF THOUGHTS (3)

— Haller's "Alps" (1729) —

TAKAHASHI, Katsumi

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

(Section de Philologie allemande de la Faculté des Lettres)

(Seminar for German Philology of the Faculty of Arts)

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KÔCHI (Kôtzsch).

JAPAN 1991. VOL. 40. GEISTESWISSENSCHAFTEN.

BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI (Kôtchi).

JAPON 1991. TOME XL. SCIENCES HUMAINES.

RESEARCH REPORTS OF KÔCHI UNIVERSITY.

JAPAN 1991. VOL. 40. HUMANITIES.

INHALT : TABLE DES MATIÈRES : CONTENTS

[ I ] DER TAGESANBRUCH DER DEUTSCHEN GEDANKENLYRIK : L'AUBE DE LA LYRIQUE D'IDÉES EN ALLEMAND : THE DAWN OF THE GERMAN LYRIC OF THOUGHTS

- (1) VORWORT : PRÉFACE : PREFACE (XXXVI. 43-54)
- (2) „MORGEN-GEDANKEN“ : «PENSÉES DU MATIN» : “MORNING-THOUGHTS” (1725) (XXXVIII. II. 215-254)
- (3) „DIE ALPEN“ : «LES ALPES» : “THE ALPS” (1729) (XL. 1 - 56)
  - 1) „Ehrensäulen“ : «Colonnes d'honneur» : “Pillars of honour”
  - 2) „Die neue Art zu Dichten“ : «La manière nouvelle de faire un poème» : “The new art of verse making”
  - 3) „Der innere Mensch“ : «L'homme intérieur» : “The inner man”
  - 4) „Reichtum der Natur“ : «Richesse de la Nature» : “Riches of Nature”
  - 5) „Guldne Zeit“ : «Âge d'or» : “Golden Age”
  - 6) „Glückseliger Verlust“ : «Heureuse perte» : “Happy loss”
  - 7) „Welschlands Paradies“ : «Paradis bourbonien» : “The Bourbon dynasty's Paradise”
  - 8) „Der arbeitende Dichter“ : «Le poète travaillant» : “The labouring poet”
  - 9) „Die zehnzeilichten Strophen“ : «Les strophes en dix lignes» : “The strophes of ten lines”
  - 10) „Die Entwicklung der innern Vollkommenheiten“ : «L'évolution des perfections internes» : “The development of inner perfections”
- (4) „GEDANKEN ÜBER VERNUNFT, ABERGLAUBEN UND UNGLAUBEN“ : «PENSÉES SUR LA RAISON, LA SUPERSTITION ET L'IRRÉLIGION» : “THOUGHTS ON REASON, SUPERSTITION AND IRRELIGION” (1729)
- (5) „ÜBER DEN URSPRUNG DES ÜBELS“ : «SUR L'ORIGINE DU MAL» : “ON THE ORIGIN OF THE EVIL” (1734)
- (6) „UNVOLLKOMMNE ODE ÜBER DIE EWIGKEIT“ : «ODE IMPARFAITE SUR L'ÉTERNITÉ» : “UNFINISHED ODE ON THE ETERNITY” (1736)
- (7) SCHLUSS : CONCLUSION : CONCLUSION

QUELLENNACHWEIS : INFORMATION DES SOURCES : SOURCES

Zusammenfassung / Sommaire / Abstract

INHALT : TABLE DES MATIÈRES : CONTENTS